



北海道大学大学院 消化器外科学分野 I ～教室年報：2013年～

Department of Gastroenterological Surgery I
Hokkaido University Graduate School of Medicine
Annual Report 2013





北海道大学大学院
消化器外科学分野 I
教授 武富 紹信

巻頭言

平成23年11月、私の着任と同時に外科学講座が再編され、当科の名称が北海道大学院医学研究科外科学講座消化器外科学分野 I に変更になりました。名称は新しくなりましたが、これまでの第一外科同門の先輩方が培ってこられた多大なる臨床・研究業績を活かして、よりアクティビティの高い外科教室として成熟させていくことが使命と考え、日々教室員と切磋琢磨しております。私が掲げた教室の目標は「最先端治療・研究の展開」と「地域医療への貢献」です。この2つの目標を達成するためには、若手人材の育成が大きな鍵を握っています。新卒後臨床研修制度が導入されて以来、全国的に外科への入局数が減少しています。特に北海道は他の地域に比べ格段に広い医療圏を賅わねばなりません。そのためにも多くの学生や初期臨床研修医に外科の魅力を伝え、一人でも多くの若者に外科の門を叩いてもらえるよう、外科医療教育に力を注ぎ、そして外科の魅力を積極的アピールしていきたいと考えています。

外科医として患者さんが求める医師像は、最適の治療を選択し、それを実行する能力を身に付けることです。そのためには自己研鑽を怠らず、一人一人の患者さんに真摯に向き合う姿勢を忘れないことが大事ですが、さらに重要なのはこの考え方をチームとして成熟させることにあると思います。外科医療は決して個人一人のちからで成り立つものではなく、チーム医療として実践していかなければなりませんし、病棟スタッフやご家族も含めた患者さんを取り巻くすべての人の協力が必要です。そのためにも、個々の力量を最大限に高めるとともに、ひとつの目標に向かって協力し合い、力が発揮できるような成熟したチームを作り上げることが最も重要と考えています。

このような目標のもと、教室の活動をまとめた年報の作成を思い立ちました。活字にし、写真をまとめることで反省の機会とし、さらに我々の日々の活動を皆様にご覧いただき、ご批判いただきたく考えております。

今回2013年教室年報を編纂するにあたりご協力いただいた教室員および同門の諸先輩方に、ここにあらためて御礼申し上げます。特に、医局長の横尾英樹君および編集委員長として頑張ってくれた柴崎晋君に心より感謝申し上げます。

“志”ある外科医が集まり、厳しいながらもさわやかな風の吹く外科教室を目指してこれからも努力してまいります。

(2014年5月20日)





医局長
横尾 英樹

教室報創刊にあたって

昨年、武富教授より医局長の任務を仰せつかり今年で2年目に突入しておりますが何とか無事に過ごすことが出来ております。これもひとえに教室員、同門会の諸先輩方のご協力の賜と受け止めており感謝申し上げます。

さて、今まで同門会から検刀会会報が1年に1回発行されており、同門会や教室での出来事がある程度まとめられた形で皆様に情報を提供して参りました。ただ、同門会誌ということもあり教室での1年間の動きを十分に伝えられない一面もございました。この欠点を補うべくニュースレターを発行したりしてきましたが、教室報という形できちんと教室の1年間の出来事を教室員、同門会の先生方のみならず日本全国の医療機関にお知らせした方がよいのではないかと考え皆様にお届けした次第です。

ページを開いていただければわかると思いますが、ビジュアルにまとめたいつもりですのでどこを開いてもすぐに頭に飛び込んでくるようにしております。また、関連病院の先生方にもご協力していただき近況報告なども取り入れましたので魅力的な教室報になったと自負しております。

最後に今回、消化管グループの柴崎 晋先生に編集長をお願いし精力的に頑張ってもらった結果今日の完成に至りました。この場を借りて感謝申し上げます。



contents

目次

巻頭言

教室報創刊にあたって

3 2013年教室活動紹介

4 組織構成・教室メンバー一覧表

5 2013年業績一覧

消化器外科 I・週間予定表

M&M (Morbidity & Mortality) カンファレンス内容

〈診療部門〉

8 肝胆膵グループ

13 移植グループ

18 消化管グループ

23 小児グループ

〈研究部門〉

28 リサーチ統括部長より

29 研究グループ紹介

29 移植グループ

31 保存グループ

33 腫瘍(肝)グループ

35 腫瘍(消化管)グループ

37 小児グループ

〈留学生〉

40 国内留学

42 海外留学

45 〈2013年入局後期研修医〉

49 〈秘書・クラーク〉

51 2013年の年表・年間行事

81 関連病院紹介

96 編集後記

2013年教室活動紹介

2013年教室活動紹介 / 組織構成・教室メンバー一覧表

| | |
|----|------|
| 教授 | 武富紹信 |
|----|------|

| | | |
|----|------|--------------|
| 医局 | 医局長 | 副医局長 |
| | 横尾英樹 | 本間重紀 本多昌平 |

(13/4/1-14/3/31)

| | | | | | |
|------------|-----------|--------------|------------------------------|-----------------------------|----------|
| 病棟 | 病棟医長 高橋典彦 | | 副病棟医長 青柳武史、柿坂達彦 | | |
| Group | 小児 | 消化管 | 肝胆膵 | 移植 | (乳腺・内分泌) |
| Chief | 岡田忠雄 | 高橋典彦 | 佐藤直樹 神山俊哉 | 嶋村剛 山下健一郎 | 細田充主 |
| Sub-chief | 本多昌平 | 川村秀樹 本間重紀 | 蒲池浩文 横尾英樹 | | 山本貢 |
| Instructor | | 皆川のぞみ 柴崎晋 | 柿坂達彦 敦賀陽介 折茂達也 若山顕治 | 青柳武史 後藤了一 高橋徹 腰塚靖之 | 中野基一郎 |

| | |
|---------------|--|
| Junior Fellow | 大平将史、加藤紘一、金沢亮、沢田堯史、渋谷一陽 正司裕隆、谷道夫、深作慶友、松井博紀、宮岡陽一 |
|---------------|--|

| | |
|---------------|---|
| Super Rotator | (1年目) 平田甫、伊藤憲、吉田将大 (2年目) 柏倉さゆり、加藤拓也、椎谷洋彦 |
|---------------|---|

| | | | | |
|----|-------------|-----------------------|--|-----------|
| 外来 | 外来医長 | 岡田忠雄 | 副外来医長 | 川村秀樹、本多昌平 |
| | 新来 | 再来 | | |
| 月 | ○ (武富紹信) | 小児外科 肝胆膵 乳腺・甲状腺 | (岡田忠雄、本多昌平) (神山俊哉、蒲池浩文、横尾英樹) (工キ：佐藤直樹) (細田充主、山本貢) | |
| 火 | — | 外来医長 | 副外来医長 | |
| 水 | ○ (武富紹信) | 小児外科 乳腺・甲状腺 | (岡田忠雄、本多昌平) (細田充主、山本貢) | |
| 木 | — | 外来医長 移植 | 副外来医長 (嶋村剛、山下健一郎) | |
| 金 | ○ | 小児外科 消化管 移植 | (岡田忠雄、本多昌平) (高橋典彦、川村秀樹、本間重紀) (嶋村剛、山下健一郎) | |

| | |
|----------|---|
| Research | (Chief) 深井原、(Sub-chief) 藤好 真人 (2年目) 江本慎、大野陽介、大畑多嘉宣、小野仁、山田健司 (1年目) 相山健、石川隆壽、小丹枝裕二、水上達三、湊雅嗣 |
|----------|---|

2013年業績一覧

○手術件数：

2013年総手術件数：535例

- ・消化管G手術：131例
- ・肝胆膵G手術：156例
- ・移植G手術：25例
- ・小児G手術：223例

(手術内容詳細については各グループ紹介参照)

○学会発表：

国内 151題、海外 37題

○論文発表：

英文原著 27編、英文症例報告 6編
和文原著 8編、和文症例報告 5編

消化器外科 I ・ 週間予定表

| | 7:30 | 8:30 | 8:50 | 13:00 | 14:30 | 15:00 | 17:00 |
|-----|-----------------------|------|------|----------|-------------------|-----------------------|------------------------------------|
| 月曜日 | 術前症例検討会 | | 当直報告 | 病棟業務 | 総回診 | 学生指導 (縫合結紮/動物実習) | ・薬剤説明会 ・MRIカンファレンス ・ほくたけセンター |
| 火曜日 | リサーチカンファレンス | | | 手術日/病棟業務 | | | |
| 水曜日 | 術前症例検討会 | | 当直報告 | 手術日/病棟業務 | 学生指導 (鏡視下縫合結紮) 隔週 | 手術日/病棟業務 | |
| 木曜日 | M&Mカンファレンス 学会予演会 | | | 手術日/病棟業務 | | | |
| 金曜日 | 抄読会 /術前症例検討会 (予備日) | | | 手術日/病棟業務 | | 15:00 学生課題報告会 (隔週) | ・消化管カンファレンス |

M&M (Morbidity & Mortality) カンファレンス内容

| | | | | | |
|------|------|----------------|-------|------|------------------|
| 5/16 | 移植G | 気道損傷の1例 | 8/22 | 消化管G | クローン病術後の腹腔内膿瘍の1例 |
| 5/30 | 肝胆膵G | 肝切離断端部膿瘍の1例 | 9/5 | 小児G | STEP症例の1例 |
| 6/20 | 消化管G | 術中VTの1例 | 9/26 | 肝胆膵G | 門脈気腫症の1例 |
| 7/25 | 小児G | 鎖肛後の水腎症の1例 | 10/31 | 肝胆膵G | 術後出血の1例 |
| 8/1 | 肝胆膵G | TAE後肺炎の死亡例について | 12/26 | 小児G | 鼠径ヘルニア再発疑い症例について |

2013年教室活動紹介

〈診療部門〉

2013年教室活動紹介 / 診療部門

■ 肝胆膵グループ

《スタッフ紹介》



佐藤 直樹 (チーフ)

昭和50年北大卒業、北大第一外科(葛西洋一教授)に入局。消化管、乳腺・甲状腺、小児外科をローテート後に肝疾患グループへ。学位はFCMで肝再生の細胞動態の研究。臨床では当時の難病「肝エキノコックス症」の疫学、病態、診断と治療を道立衛生研究所(血清診断)、放射線科(画像解析)、病理部とともに検討し、マスキング(道の委託事業)にも参画した。教室は文部省後援の国際シンポジウムを札幌で開催し、北大は世界最多の手術症例を有するようになった。道の認定患者数は650名に。現在は道エキノコックス症専門委員会、協議会の委員長を務めている。これとともに病院手術部の実質的な責任者として管理・運用を行ってきた。平成18年北大は全国42国立大学病院中で第1位の全身麻酔手術件数を誇ったこともあった。肝臓移植は272例、膵臓移植は7例、心臓は平成25年12月に第1例目が行われた(2014.3.7現在)。



神山 俊哉 (チーフ)

肝胆膵外科の後進への指導と肝細胞癌、転移性肝癌など肝癌治療が専門です。腹腔鏡下肝切除を含め肝切除の安全性を向上させること、標準化させることにより、さらに効果的な肝癌の治療法を確立することを目指しています。これまで有効な治療法がなかった高度進行肝癌への治療として、IVR、放射線治療を組み合わせた新しい治療法の開発に取り組んでいます。研究では肝癌の浸潤転移、Glycomicsを中心とした研究を行っています。



蒲池 浩文 (サブチーフ)

肝胆膵グループの胆膵部門を担当しております。ご紹介いただく疾患の大部分は局所進行膵癌、もしくは大量肝切除を要する肝門部胆管癌であり、難治性疾患であることに加え、手術まで至らない症例もありますが、外科治療がどのような形で介入できるかを常に考え、術前後の抗癌剤治療・放射線治療を含めた集学的治療を軸に診療にあたっております。切除可能か否かの判断は難しい部分がありますので、患者さんがおりましたらご相談いただくと幸いです。



横尾 英樹 (サブチーフ)

肝胆膵グループのおもに肝臓部門を担当しています。臨床と研究にわたり質の高いものをめざし頑張っております。手術手技の向上のみならず肝癌の集学的治療による治療成績の向上をめざしております。研究面ではプロテオミクスにて同定された分子の解析を大学院生にやってもらい良好な結果が出てきているので今年中に論文化すること、ならびに次世代につながる確かな実験系を確立することが目標です。

昨年からは医局長をしていますのでチームスタッフには仕事面で負担をかけることもしばしばで申し訳なく思っておりますが何とか皆さんに支えてもらいながらやっております。



柿坂 達彦 (インストラクター)

平成11年度入局の柿坂達彦と申します。平成22年4月より大学病棟の肝胆膵グループに配属となり、主に肝疾患の診療に従事しております。今年度は、術者として高難易度肝切除術・腹腔鏡下肝切除術を執刀させていただく機会が増え、肝臓外科医として少しは成長できたかと感じておりますが、依然として神山先生の比護のもとに誘導されて手を動かしている点が否めません。研究面では学会発表のデータを論文投稿できておらず、大いに反省しております。来年度ですが、臨床面では腹腔鏡下肝切除術の技術の定型化・適応拡大を目標に、また研究面では肝細胞癌の悪性度・予後に関する臨床病理学的因子データの解析・論文化、さらに学生・研修医の教育の充実に向けて日々努力してまいります。



敦賀 陽介 (インストラクター)

2011年度より肝胆膵Gの一員として大学病棟で勤務しております。主に蒲池先生の指導の下、肝胆膵の中でも胆膵疾患を中心に診療にあたっております。胆膵疾患は、手術の難易度もさることながら、術前の治療方針の立案、術後管理ともに非常に精度が求められ、いまだに自分の至らなさを反省させられることばかりです。来年度はさらに、臨床のみならず、研究、教育においても積極的に役割を果たしていかなければいけないと自覚しております。当科で治療を受けられる患者さんにより大きな希望を与えられるよう、治療成績の向上にむけて研鑽を積んでまいりたいと思います。



折茂 達也 (インストラクター)

2013年度より肝胆膵グループで勤務しています折茂達也です。2000年に北海道大学を卒業後、同年第一外科(現消化器外科)に入局し、以後関連病院を中心に勤務してきました。大学以外での勤務が長かったため、今までは特殊だと思っていた手術が、大学では日常的に行われていることに今更ながら驚嘆しています。いろいろ気づかされた点は多いですが、切除をあきらめないという外科医の原点をあらためて学ばせていただきました。これからも様々な可能性に制限を設けず研鑽を重ねていきたいと思います。



若山 顕治 (インストラクター)

北海道大学78期卒の若山顕治です。昭和52年生まれ、出身は新潟県新潟市、新潟高校卒です。眼科医の妻と5歳の娘の3人暮らしです。18歳で北海道に来てからちょうど18年、人生の半分を道産子としてすごしたことになります。現在、大学の肝胆膵グループでインストラクターとして、主に肝疾患の診療にあたっています。学生時代は医学部バスケットボール部で汗を流していました。医局対抗バスケットボール大会が創設され、毎年の楽しみとなっています。ここ数年バスケットボール部の後輩の入局者が増え、今年は久しぶりに3位のカップを獲得することができました。こここのところ若い先生の入局が増え、頼もしい限りです。彼らに恥じることの無いよう、高いレベルの診療を心掛けるとともに、彼らとともにさらに成長していきたいと思っております。

現在取り組んでいること

(肝臓)

肝細胞癌腫瘍同定、区域同定における術中ICG蛍光法の有用性
肝内胆管癌術後補助療法としてのジェムザールの有用性
腹腔鏡下肝切除における完全腹腔鏡下手術への移行をめざして
肝切除における新たな肝予備能評価の検討
HBV陽性肝細胞癌におけるHBVウイルス量と切除成績との関係

(治療)

肝転移を有する結腸直腸癌に対するUFT/UZEL療法の検討
(Polaris試験)
NIK333(ベレチノイン)のC型肝炎陽性肝細胞癌治療後の肝細胞癌再発に対する有効性安全性 多施設共同研究 →K333(ベレチノイン)、B型肝炎陽性肝細胞癌が対象
大腸癌肝転移における抗癌剤効果規定因子に関する研究(熊本大学)

(研究)

1. 肝細胞癌悪性度バイオマーカー候補E-FABPの発現・機能解析
(基盤研究C 大学院生 大畑)
2. 新規バイオマーカー APC結合蛋白EB1の肝細胞癌発癌進展における分子機構の解明 (基盤研究C 大学院生 相山)
3. 次世代シーケンシング・ゲノムワイド関連解析を用いたC型肝炎肝細胞癌の術後再発に関わる宿主因子の解析 (坂本班)

(胆膵)

・進行膵癌に対する術前放射線化学療法 院内自主臨床試験登録(OO8-0040)
・膵胆道癌術後TS-1週4回投与の効果
・borderline resectable肝門部胆管癌に対する新規手術術式の確立
・肝門部胆管癌術前化学療法の検討
・消化器癌におけるMesothelin分子発現の意義と癌悪性度との関係(平成24年度基盤研究C)
・膵癌NACRT施行後の治療抵抗性癌幹細胞のプロファイル解析とターゲット治療法の開発

2013年診療実績(1月～12月)

1. 病棟実績 2013年延べ入院患者数
肝臓 300人
胆膵 82人
2. 手術件数
肝臓 118件(HCC54、CCC4、転移性肝腫瘍25、エキノコックス7、ドナー5、その他9)
胆膵 38件(膵癌11、胆道癌12、胆石、胆嚢炎6、膵良性疾患1、その他8)

2013年業績(学会発表)

《第285回東海外科学会(4月7日 名古屋)》
肝細胞癌に対するこれからの外科治療(特別講演)
武富紹信

《第15回外科分子細胞治療研究会(4月11日 福岡)》
肝細胞癌における膜リン脂質情報変換酵素DGKの機能解析
武富紹信

《第113回日本外科学会定期学術集会(4月11-13日 福岡)》
適応拡大を目指した腹腔鏡下肝切除における肝門部処理・肝実質切除法の確立(ビデオシンポジウム)
神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

肝門部領域胆道系腫瘍に対する胆管・血管3DCT合成画像の治療戦略上の位置づけ(シンポジウム)
蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、柿坂達彦、横尾英樹、山下健一郎、神山俊哉、武富紹信

3D画像支援システムによる下右肝静脈還流領域を評価した肝切除(ビデオシンポジウム)
横尾英樹、神山俊哉、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

vp3,4肝細胞癌の門脈腫瘍栓に対する術前放射線治療の有効性の検討
柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

膵門脈合併切除術後門脈狭窄に対するステント留置の検討
敦賀陽介、蒲池浩文、若山顕治、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

肝細胞癌下大静脈/右心房腫瘍栓に対する外科的治療
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、蒲池浩文、敦賀陽介、山下健一郎、鈴木知己、嶋村剛、藤堂省、武富紹信

《第67回手術手技研究会(5月18日 札幌)》
右心房内腫瘍栓を伴う高度進行肝細胞癌に対する肝切除術(サージカルフォーラム)
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、蒲池浩文、敦賀陽介、山下健一郎、嶋村剛、藤堂省、武富紹信

《第25回日本肝胆膵外科学会・学術集会(6月12-14日 宇都宮)》
大腸癌肝転移に対する肝切除の適応とタイミング(教育セミナー)
武富紹信

肝門側からの展開困難な血管合併切除を要する左葉系肝門部胆管癌に対する術式の工夫(ミニシンポジウム)
蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、柿坂達彦、横尾英樹、山下健一郎、神山俊哉、武富紹信

大腸癌多発肝転移に対する外科切除のタイミング(ミニシンポジウム)
横尾英樹、神山俊哉、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

肝細胞癌リンパ節転移症例に対する治療法の検討
柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

当科における門脈再建法(ミニビデオシンポジウム)
敦賀陽介、蒲池浩文、若山顕治、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

下大静脈/右心房腫瘍栓を有する肝細胞癌に対する肝切除(ミニビデオシンポジウム)
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、蒲池浩文、敦賀陽介、中西一彰、嶋村剛、藤堂省、武富紹信

《第49回日本肝癌研究会(7月11-12日 東京)》
肝切除手技の工夫「ICG蛍光法とニードルガイドテクニックによる肝亜区域切除法」(ビデオセッション)
横尾英樹、神山俊哉、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

肝細胞癌と鑑別困難であったFNH-like noduleの1例

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、蒲池浩文、敦賀陽介、渋谷一陽、大平将史、武富紹信

肝癌再発予測と予防・治癒切除後の肝内再発肝細胞癌における予後不良因子と治療戦略（一般演題（口演））

若山顕治、神山俊哉、柿坂達彦、横尾英樹、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

《第103回日本臨床外科学会北海道支部総会（7月13日 室蘭）》
下大静脈／右心房腫瘍栓を伴う高度進行肝細胞癌に対する外科的治療（学会賞選考発表会）

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、蒲池浩文、敦賀陽介、山下健一郎、嶋村剛、武富紹信

肝細胞癌腹腔鏡下術後に早期腹膜播種再発をおこした1例

加藤紘一、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

出血性嚢胞との鑑別が困難だった胆管MCNの一例

大平将史、神山俊哉、蒲池浩文、横尾英樹、柿坂達彦、敦賀陽介、折茂達也、若山顕治、武富紹信

膵Mixed ductal-neuroendocrine carcinomaの1例

渋谷一陽、蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

《第68回日本消化器外科学会総会（7月17-19日 宮崎）》

血清中糖鎖の網羅的解析による肝細胞癌新規バイオマーカーの開発（企画関連口演消化器癌個別化治療（総論））

神山俊哉、柿坂達彦、横尾英樹、蒲池浩文、若山顕治、敦賀陽介、三浦信明、西村紳一郎、藤堂省、武富紹信

血管合併切除再建を伴う肝門胆手術「左葉系切除を要する高度進行胆道癌に対するTransparenchymal glissonian approachを用いた血行再建法」（要望ビデオ）

蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、柿坂達彦、横尾英樹、山下健一郎、神山俊哉、武富紹信

肝切除合併症予防策「肝尾状葉腫瘍切除における3D画像によるシミュレーションの有用性」（企画関連口演）

若山顕治、神山俊哉、柿坂達彦、横尾英樹、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

《第40回日本膵臓研究会（8月30-31日 香川）》

肝門部胆管癌切除後9年目に発生した異時重複膵癌の一例

敦賀陽介、蒲池浩文、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

《第113回日本消化器病学会北海道支部例会（8月31日-9月1日 札幌）》

大腸癌肝転移切除における術中造影エコーの有用性（一般演題）
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

《The 13th Congress of the Asian Society of Transplantation (2013.9.3 Kyoto)》

Role of IL28B polymorphism in living donor liver transplant patients with chronic hepatitis C. (Symposium)
Taketomi A, Fukuhara T, Maehara Y.

《第99回北海道外科学会（9月7日 札幌）》

人工血管による肝静脈再建を伴う肝切除術を施行した肝細胞癌の2例
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、

蒲池浩文、武富紹信

肝原発扁平上皮癌の1例

宮岡陽一、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、畑中佳奈子、武富紹信

当科における胆管癌再発症例の検討

敦賀陽介、蒲池浩文、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

《第21回日本消化器関連学会週間（10月9-12日 東京）》

AFPとPIVKA-IIの積=AP値の肝細胞癌切除例における術前予後・再発予測因子としての意義（優秀演題）

神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、蒲池浩文、敦賀陽介、武富紹信

予後向上に向けた肝内胆管癌に対する術後補助化学療法

横尾英樹、神山俊哉、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

vp3,4肝細胞癌の門脈腫瘍栓に対する術前放射線治療の有効性の検討（優秀演題）

柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

胆嚢癌との鑑別を要した黄色肉芽腫性胆嚢炎の3切除例

敦賀陽介、蒲池浩文、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

《JDDW2013 第11回日本消化器外科学会大会(10月12日 東京)》
次世代消化器癌診療における外科治療の展望 Part II：肝門胆～肝臓外科治療の今後の展望（特別企画）

武富紹信

《第37回北海道膵臓研究会（11月2日 札幌）》

膵Mixed exocrine-neuroendocrine carcinomaの2例

敦賀陽介、蒲池浩文、三橋智子、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

《The American Association for the Study of Liver Diseases AASLD Liver meeting 2013 November 2-5 WashingtonDC)》

2153: A product of alpha-fetoprotein and protein induced by vitamin K absence-II as a powerful predictor of the prognosis and recurrence of hepatocellular carcinoma after hepatectomy

Kamiyama T, Yokoo H, Kakisaka T, Orimo T, Wakayama K, Kamachi H, Tsuruga Y, Yamashita K, Shimamura T, Todo S, Taketomi A

《第7回肝臓内視鏡外科研究会（11月20日 名古屋）》

当科における腹腔鏡下肝切除時の肝実質切離の工夫

柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

《第75回日本臨床外科学会総会（11月21-23日 名古屋）》

内視鏡下肝切除「腹腔鏡下肝切除における基本的手技：実質切離・肝門部・短肝静脈処理の確立」（主題関連演題）

神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、蒲池浩文、敦賀陽介、武富紹信

断端陽性となった肝門部胆管癌に対する術後放射線療法の意義

蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

私のこだわりの手術手技－肝臓「大腸癌肝転移切除における術中造影超音波検査の有用性」(要望演題(ビデオ))

横尾英樹、神山俊哉、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

私のこだわりの手術手技－肝臓「多発性肝嚢胞に対して肝拡大左葉切除術を施行した1例」(要望演題(ビデオ))

柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

自己免疫性膵炎に合併した胆嚢IgG4関連炎症性偽腫瘍の一例

敦賀陽介、蒲池浩文、三橋智子、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

私のこだわりの手術手技－肝臓「腫瘍栓により門脈本幹が完全閉塞した肝細胞癌に対するpassive bypassを使用した肝右葉切除術」(要望演題(ビデオ))

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

先端技術を応用した外科手術「V4bを温存した中肝静脈合併切除を要する肝拡大右葉切除術～三次元画像解析システムを用いた術前シミュレーションと術式の選択～」(要望演題(口演))

若山顕治、神山俊哉、柿坂達彦、横尾英樹、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

《第104回日本臨床外科学会 北海道支部例会(12月7日 札幌)》

エリスロポイエチン産生による多血症を伴った巨大肝細胞癌の1例
加藤紘一、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

膵癌術後難治性下痢に対してポリカルボフィルカルシウム(ポリフル)が有効であった1例

正司裕隆、蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

《第100回北海道外科学会(平成26年2月22日 札幌)》

横行結腸癌肝転移切除後断端再発に対し施行したRFA後にbiloma内再発をきたした1例

深作慶友、神山俊哉、若山顕治、折茂達也、敦賀陽介、柿坂達彦、横尾英樹、蒲池浩文、武富紹信

特異な画像所見を示し診断に苦慮した肝内胆管癌再発の1例

金沢亮、蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

《第114回日本消化器病学会 北海道支部例会(平成26年3月1-2日)》
局所進行膵癌に対するゲムシタピン併用術前放射線化学療法の治療効果

敦賀陽介、蒲池浩文、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

TACE後の再発に対する再肝切除後、急速に再発した肝細胞癌の2例

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、蒲池浩文、敦賀陽介、渋谷一陽、大平将史、武富紹信

2013年業績(論文発表)

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

肝細胞癌に対する治療法

北海道外科雑誌 58(1): 2-6 2013

大野陽介、蒲池浩文、敦賀陽介、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信
門脈ステントを留置した肝門部胆管癌肝門部再発の1例
臨床外科学会雑誌, 74巻10号, 2879-2884, 2013

柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、畑中佳奈子、武富紹信

手術治療により長期生存が得られた肝細胞癌リンパ節転移・胆管内腫瘍栓の1例

癌と化学療法: 40; 1831-1833, 2013

廣方玄太郎、神山俊哉、中西一彰、蒲池浩文、横尾英樹、武富紹信

肝右葉切除により門脈圧亢進症が軽快した肝内動門脈短絡の1例
日本臨床外科学会雑誌74: 1661-1665, 2013

Kakisaka T, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Wakayama K, Tsuruga Y, Kamachi H, Hatanaka K, Taketomi A.

Long-term survival of a patient with metachronous lymph node metastasis and bile duct tumor thrombus due to hepatocellular carcinoma successfully treated with repeated surgery

Gan To Kagaku Ryoho. 2013

Wakayama K, Kamiyama T, Yokoo H, Kakisaka T, Kamachi H, Tsuruga Y, Nakanishi K, Shimamura T, Todo S, Taketomi A.

Surgical management of hepatocellular carcinoma with tumor thrombi in the inferior vena cava or right atrium.

World J Surg Oncol. 2013

Kakisaka T, Kamiyama T, Yokoo H, Nakanishi K, Wakayama K, Tsuruga Y, Kamachi H, Mitsunashi T, Taketomi A.

An intraductal papillary neoplasm of the bile duct mimicking a hemorrhagic hepatic cyst: a case report.

World J Surg Oncol. 2013

Tsuruga Y, Kamachi H, Wakayama K, Kakisaka T, Yokoo H, Kamiyama T, Taketomi A.

Portal vein stenosis after pancreatectomy following neoadjuvant chemoradiation therapy for pancreatic cancer.

World J Gastroenterol. 2013

Shimada S, Kamiyama T, Yokoo H, Wakayama K, Tsuruga Y, Kakisaka T, Kamachi H, Taketomi A.

Clinicopathological characteristics and prognostic factors in young patients after hepatectomy for hepatocellular carcinoma.

World J Surg Oncol. 2013

Kamiyama T, Yokoo H, Furukawa JI, Kuroguchi M, Togashi T, Miura N, Nakanishi K, Kamachi H, Kakisaka T, Tsuruga Y, Fujiyoshi M, Taketomi A, Nishimura SI, Todo S.

Identification of novel serum biomarkers of hepatocellular carcinoma using glycomic analysis.

Hepatology. 2013 Jan 15.

Taketomi A, Shirabe K, Muto J, Yoshiya S, Motomura T, Mano Y, Ikegami T, Yoshizumi T, Sugio K, Maehara Y.

A rare point mutation in the ras oncogene in hepatocellular carcinoma.

Surgery Today. 43(3):289-292, 2013.

■ 移植グループ

《スタッフ紹介》



嶋村 剛 (チーフ)

北大病院における肝移植プログラムに1997年開始当初から参加し、成人生体肝移植170例、小児生体肝移植69例、脳死肝移植31例、膵腎同時移植4例、膵単独移植3例を経験しました。2010年の臓器移植法改正に伴い、わが国の肝移植も生体移植から脳死移植に徐々に移行しつつあります。そのような社会的変化に対応しながら、後進の育成を進めていきたいと考えています。このことが北海道で唯一の脳死肝移植・膵移植実施認定施設の実施責任者としての職責と考えています。



山下健一郎 (サブチーフ)

米国留学から戻り移植グループで早10年が経過しようとしています。この間、先輩方から多くのご指導を賜り学んだ事を習得し、自分が研鑽を積んだ事を進めつつ、これらを次世代の後輩へ伝えるべく尽力してきました。今までに皆で築き上げた成果が多数、教室から世界へ発信されてきました。なかでも強力な免疫抑制作用を発揮する分子標的治療薬ASKP1240は現在、米国にて臨床試験phase IIに入り、どの施設でも移植後の患者さんに使用できる日が少しずつ近づいています。また、平成22年から開始した制御性T細胞を用いた細胞治療による免疫抑制法は、世界に先駆け10名の生体肝移植症例で臨床試験を行い、7名の患者さんが既に免疫抑制剤から離脱しており、肝移植における免疫寛容誘導の治療法として世界の移植施設の中でも認識されるようになりました。臨床・研究共に地道に積み上げることの難しさと同時に出来上がったものを壊してしまうことの簡単さを痛感するこのごろです。自身もそうですが、良い伝統を受け継ぎつつ一歩でも前へこれを前進させゆくべく、グループ各人の努力や活躍に今後も期待しています。



青柳 武史 (インストラクター)

肝移植、肝胆膵外科の勉強のため2年間フランスのBelghiti先生のところで勉強させていただき、北海道に帰ってきて早2年が経過しようとしています。この2年の間ひとえに患者様のために日々努力してきましたが、まだまだ力不足ですべての患者様に満足して頂ける医療が提供できているとは言えない状況です。自身の外科医としての、医療者としての成長も遅々として歯痒いばかりです。藤堂先生、Belghiti先生を始めこれまでお世話になった先生と患者様に「えー、まだそんなこともできないの？」と呆れられないように、なんとか成長していきたいと思えます。



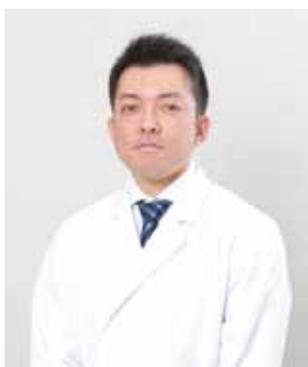
後藤 了一 (インストラクター)

移植グループの後藤です。肝移植外科医としてのトレーニングに励みながら、移植免疫を中心としたBench-to-Bedsideの研究を立ち上げたいと考えています。北海道から移植医療の推進に寄与したいと思います。よろしくお願いいたします。



高橋 徹 (インストラクター)

2013年4月より移植グループの方へ配属となり早1年が過ぎました。留学から帰ってきたばかりでもあり、病棟の業務などに慣れるのに時間がかかりました。グループの先生方を始め、医局の先生方にも不手際で色々迷惑をかけたと思いますが、サポートして頂き何とかこなしてきました。来年度は、積極的に取り組み学会発表、論文発表などに尽力して参りたいと存じます。今後ともよろしくお願いいたします。



腰塚 靖之 (インストラクター)

第一外科に入局後、実験させていただいた内容が膵島移植であったことから、移植医療に興味を持ちました。2013年4月より、大学の移植グループに配属となり、日々精進を重ねております。肝・膵移植は、手術を含めた周術期管理の改善が積み上げられ、「いちかばちか」の治療から、より「安全で確実」な治療へと変化してきています。そのため移植後の長期的な患者管理、すなわち、免疫抑制療法と、それにまつわる合併症（糖尿病や高血圧、悪性腫瘍など）が問題となってきました。手術はもちろんのこと、術後の免疫抑制剤や感染症を含めた内科的な患者管理をも必要とされ、勉強しても仕切れないなあつくづく感じてしまいましたが、移植独特の分野でもあり、興味のある自分としては楽しい分野です。まだまだ発展途上で未熟ですが、まだまだ伸びしろがあると逆にプラスに考えて、よいものをスポンジのように吸収していき成長していこうと思います。



太田 稔 (ME)

移植医療に関連する血液浄化療法をはじめとした生命維持管理装置を通じて病態改善およびbridging therapyの役割をデータ解析から明確にし適切な医療を提供できるよう努力いたします。

岡本 花織 (ME)

移植医療に関連する業務に携わらせていただいている臨床工学技士です。まだまだ勉強不足でできることも少ないですが、先生達からいろいろな部分を吸収し、成長してゆけたらと考えています。

現在取り組んでいること

制御性T細胞治療による肝移植における免疫寛容誘導法の開発

2013年診療実績（1月～12月）

| | | |
|---------|---------------|--------------------------|
| 1. 病棟実績 | 入院患者数（延べ人数） | 189名 |
| | 術前評価・待機 | 36名 |
| | 手術（生体ドナー含む） | 17名 |
| | 移植後再入院（精査・加療） | 136名 |
| | 平均在院日数 | 12.2日 |
| | 術後平均在院日数 | |
| | 肝移植 | 52日 |
| | 生体肝移植ドナー | 14日 |
| | 脾・脾腎移植 | 32日 |
| 2. 手術件数 | | |
| | 生体肝移植術 | 5例 |
| | 生体肝グラフト採取術 | 5例 |
| | 脳死肝移植術 | 5例 |
| | 脾移植術 | 2例（脾腎同時移植 1例、腎移植後脾移植 1例） |
| | その他 | 8例 |
| 3. 外来実績 | | |
| | 外来患者数（延べ人数） | 1961名 |
| | 新患外来（紹介） | 58名 |
| | 移植前フォロー患者数 | 66名 |
| | 移植後フォロー患者数 | 238名（ドナー除く） |

2013年業績（学会発表）

《第113回 日本外科学会定期学術集会 福岡(2013.4.11-13)》
移植手術における技術的困難例に対する戦略 多発性肝嚢胞症に対する肝移植手術の工夫
鈴木友己

ヒト化マウス血管移植モデルにおける冷阻血時間と抗体の果たす役割
後藤了一、Fadi Issa、Sebastian Heidt、David Taggart、Kathryn J. Wood

《第113回日本外科学会定期学術集会（2013.4.12 福岡）》
本邦における生体肝移植の軌跡と展望（創始と継志Memorial Lecture）
武富紹信

《第29回学術大会 日本医工学治療学会(横浜)(2013.4.19-21)》

ホール数の異なるイリゲーションカテーテルの比較検討：豚心筋を用いた焼灼特性と冷却効果について
前野幹、太田稔、佐々木亮、岡本花織、加藤伸彦、横式尚司、三山博史、渡邊昌也、水上和也、筒井裕之、佐藤直樹

《American Transplant Congress 2013. Seattle, U.S.A. (2013.5.18-22)》
Successful Reduction and Cessation of Immunosuppressants by A Regulatory T cell-Based Cell Therapy in Living Donor Liver Transplantation: A Pilot Study for Tolerance Induction.
Yamashita K, Zaitzu M, Nagatsu A, Goto R, Oura T, Watanabe M, Aoyagi T, Suzuki T, Shimamura T, Sato N, Sugita J, Hatanaka K, Taniguchi M, Furukawa H, Bashuda H, Okumura K and Todo S.

Delayed anti-CD3 Therapy results in depletion of alloreactive T cells and the dominance of Foxp3⁺CD4⁺ graft infiltrating cells. (Oral Session)
Goto R, You S, Zaitzu M, Chatenoud L, Wood KJ.

《第67回手術手技研究会（2013.5.18 札幌）》
生体肝移植における肝静脈再建の工夫
武富紹信

《第23回学術集会 日本臨床工学会（山形）（2013.5.18-19）》
臓器移植に携わる臨床工学技士の現在と未来：肝移植医療への参画 北海道大学病院における臨床工学技士の役割とチーム医療の構築
太田稔、岡本花織、遠田麻美、佐々木亮、千葉裕基、石川勝清、竹内千尋、寒河江磨、岩崎毅、矢萩亮児、五十嵐まなみ、前野幹、今田英利、鶴田智久、加藤伸彦

《第83回学術集会 北海道透析療法学会（札幌）（2013.6.9）》
個人用ROシステムMIZ-Iの熱水消毒機能の評価
千葉裕基、太田稔、遠田麻美、石川勝清、岡本花織、佐々木亮、矢萩亮児、柴崎跡也、西尾妙織、桂田武彦、堀田記世彦、森田研、野々村克也

オンラインHDFにおける水質管理の課題と対策
矢萩亮児、太田稔、遠田麻美、千葉裕基、石川勝清、岡本花織、佐々木亮、柴崎跡也、西尾妙織、桂田武彦、堀田記世彦、森田研、野々村克也

《19th Annual International Congress of The International Liver Transplantation Society. Sydney, Australia, June

12-15, 2013)

A Pilot Study for Tolerance Induction by a Regulatory T cell-Based Cell Therapy in Living Donor Liver Transplantation. (Plenary session)

Yamashita K, Zaitzu M, Nagatsu A, Goto R, Oura T, Watanabe M, Aoyagi T, Suzuki T, Shimamura T, Sato N, Sugita J, Hatanaka K, Bashuda H, Okumura K and Todo S.

Role of Regulatory T cells in Liver Transplantation. (Symposium)

Yamashita K.

《第31回肝移植研究会 熊本 (2013.7.4-5)》

生体肝移植における制御性T細胞治療を用いた免疫寛容誘導の試み—肝移植後の「より良い」長期生着に向けて—(プレナリーセッション)

山下健一郎、財津雅昭、長津明久、後藤了一、大浦哲、渡辺正明、青柳武史、江本慎、鈴木友己、嶋村剛、佐藤典宏、杉田純一、畑中佳奈子、場集田寿、奥村康、藤堂省

当科における脳死肝移植待機中死亡症例の検討 (シンポジウム)

青柳武史、杉山昂、後藤了一、大浦哲、渡辺正明、高橋徹、腰塚靖之、太田稔、山下健一郎、鈴木友己、山本真由美、古舘馨、坂井絢、嶋村剛、武富紹信、藤堂省

当科におけるアルコール性肝硬変に対する肝移植適応の検討：生体肝移植と脳死待機症例について (ワークショップ)

後藤了一、青柳武史、坂井 絢、山本真由美、太田稔、山下健一郎、鈴木友己、嶋村剛、武富紹信、藤堂省

《第103回日本臨床外科学会 北海道支部総会 室蘭(2013.7.13)》
アスペルギルス抗原陽性肝移植患者2症例に対するアムピゾーム®の使用経験

沢田亮史、後藤了一、深作慶友、腰塚靖之、高橋徹、青柳武史、太田稔、山本真由美、古舘馨、山下健一郎、嶋村剛、武富紹信

手術困難な多発肝嚢胞症に対する肝移植術における工夫

蔵谷勇樹、鈴木友己、坂本讓、後藤了一、青柳武史、山下健一郎、嶋村剛、武富紹信、藤堂省

《第7回北海道地方学会学術集会 日本高気圧環境・潜水医学会 札幌 (2013.7.21)》

第二種装置における制御不能な酸素濃度の上昇を経験して

今田英利、石川勝清、太田稔、遠田麻美、竹内千尋、岡本花織、佐々木亮、前野幹、千葉裕基、平子竜大、加藤伸彦

《第113回日本消化器病学会北海道支部 札幌(2013.8.31-9.1)》

当科で施行した脳死肝/膵腎移植6例の検討

腰塚靖之、加藤紘一、深作慶友、高橋徹、後藤了一、青柳武史、山下健一郎、嶋村剛、堀田記世彦、森田研、野々村克也、近藤琢磨、武富紹信

《第49回日本移植学会 京都 (2013.9.5-7)》

免疫抑制と免疫寛容制御性T細胞治療を用いた免疫寛容誘導 生体肝移植における臨床試験

山下健一郎、長津明久、後藤了一、青柳武史、鈴木友己、嶋村剛、江本慎、場集田寿、奥村康、藤堂省

生体肝移植症例における免疫モニタリングの有用性の検討 (ミニオーラル)

後藤了一、山下健一郎、長津明久、五十嵐瑠美、太田稔、青柳武史、鈴木友己、嶋村剛、武富紹信、藤堂省

《16th Congress of the European Society for Organ Transplantation. Vienna, Austria, September 8-11, 2013》

REGULATORY T CELL-BASED CELL THERAPY FOR TOLERANCE INDUCTION IN LIVING DONOR LIVER TRANSPLANTATION

Yamashita K, Zaitzu M, Nagatsu A, Goto R, Oura T, Watanabe M, Aoyagi T, Suzuki T, Shimamura T, Sato N, Sugita J, Hatanaka K, Bashuda H, Okumura K and Todo S.

《第24回日本急性血液浄化学会学術集会 (2013.9.13 札幌)》

急性肝不全症例の肝移植の適応とタイミング (教育講演)

武富紹信

急性肝不全に対する肝移植手術に向けたbridging therapyとしての血液浄化療法の役割

太田稔、嶋村剛、山下健一郎、青柳武史、後藤了一、高橋徹、腰塚靖之

血液浄化装置ACH-Σのバランス制御の評価と保守管理の経験

千葉裕基、太田稔、藤田讓司、石川勝清、遠田麻美、竹内千尋、岡本花織、佐々木亮、前野幹、今田英利、平子竜大、寒河江磨、岩崎毅、矢萩亮児、法呂まなみ、鶴田智久、加藤伸彦

《第22回組織適合性学会 (福島) (2013.9.14-16)》

生体肝移植における免疫寛容誘導の試み (講演)

山下健一郎

《第61回学術集会 日本心臓病学会学術集会 熊本(2013.9.20-22)》

非侵襲的心拍出量モニターエスロンミニと肺動脈カテーテルの比較検討

岡本花織、榊原守、山田史郎、神谷究、浅川直也、吉谷敬、太田稔、筒井裕之

《JDDW 2013 東京 (2013.10.9-12)》

当科における脳死肝移植待機中死亡症例の検討 (シンポジウム)

青柳武史、山下健一郎、嶋村剛、

《第45回日本小児感染症学会総会・学術集会(2013.10.26 札幌)》

C型肝炎ウイルスに対する肝移植：周術期管理と対策(教育講演)

武富紹信

《3rd ESOT Basic Science Meeting & 13th TTS Basic Science Symposium Paris, France (2013.11.7-9)》

A Clinical Trial of Regulatory T Cell-Based Immunotherapy for Tolerance Induction in Living Donor Liver Transplantation. (Best Oral Presentation Award)

Yamashita K, Zaitzu M, Nagatsu A, Goto R, Oura T, Watanabe M, Aoyagi T, Suzuki T, Shimamura T, Sato N, Sugita J, Hatanaka K, Bashuda H, Okumura K and Todo S.

Roles of CD40-CD40L costimulatory pathway in pancreatic islet transplantation

Koshizuka Y, Watanabe M, Suzuki T, Kamachi H, Ogura M, Yoshida T, Kuraya D, Fukumori D, Shimamura T, Okimura K, Maeta K, Miura T, Sakai F, Todo S, and Yamashita K

《第19回 北海道肝移植適応研究会 札幌 (2013.11.9)》

当院における脳死肝移植30症例の報告

高橋徹、腰塚靖之、後藤了一、青柳武史、太田稔、山本真由美、古舘馨、谷口雅彦、古川博之、山下健一郎、嶋村剛、武富紹信、藤堂省

当科における脳死肝移植待機中死亡例の検討

青柳武史、杉山昂、後藤了一、大浦哲、渡辺正明、高橋徹、腰塚靖之、太田稔、山下健一郎、鈴木友己、山本真由美、古舘馨、坂井絢、嶋村剛、武富紹信、藤堂省

《第48回学術総会 日本高気圧環境・潜水医学会 東京 (2013.11.8-9)》

第2種装置における制御不能な酸素濃度の上昇を経験して

今田英利、石川勝清、太田稔、遠田麻美、稲葉千尋、岡本花織、佐々木亮、前野幹、千葉裕基、平子竜大、加藤伸彦

《第75回日本臨床外科学会総会 名古屋 (2013.11.21-23)》

アスペルギルス抗原陽性肝移植レシピントに対するpreemptive therapyの有効性

沢田亮史、後藤了一、深作慶友、腰塚靖之、高橋徹、青柳武史、太田稔、山本真由美、古舘馨、山下健一郎、嶋村剛、武富紹信

《第84回学術集会 北海道透析療法学会 札幌 (2013.11.24)》

ABO血液型不適合腎移植の術前二重濾過血漿交換 (DFPP) による抗血液型抗体除去の検討

千葉裕基、森田研、太田稔、田邊起、野々村克也

《第104回日本臨床外科学会 北海道支部総会 (2013.12.7)》

常染色体劣性多発性嚢胞腎 (ARPKD) に伴う肝線維症に対し脳死肝移植を施行した一例

大平将史、後藤了一、加藤紘一、腰塚靖之、高橋徹、青柳武史、太田稔、鈴木友己、山下健一郎、嶋村剛、武富紹信

《Liver Transplantation Winter Seminar (東京) (2013.12)》

肝移植後の免疫抑制療法 (セミナーセッション)

山下健一郎

《第13回東日本肝移植周術期研究会 東京 (2014.2)》

当科におけるBasiliximabを用いた導入療法の検討 (一般演題・口演)

後藤了一、山下健一郎、青柳武史、腰塚靖之、高橋徹、武富紹信、嶋村剛

《第100回 北海道外科学会 札幌 (2014.2.22)》

当科における生体・脳死肝移植での血管グラフト併用門脈再建症例の検討

谷道夫、嶋村剛、腰塚靖之、高橋徹、後藤了一、青柳武史、山下健一郎、太田稔、古舘馨、山本真由美、武富紹信

膵腎同時移植後に発症した腸閉塞の一例

松井博紀、嶋村剛、腰塚靖之、高橋徹、後藤了一、青柳武史、山下健一郎、鈴木友己、太田稔、古舘馨、山本真由美、武富紹信

《1st International Workshop for Clinical Tolerance. Boston, USA. Mar 14-15, 2014》

A Clinical Trial of Regulatory T cell-based Immunotherapy for Tolerance Induction in Living Donor Liver Transplantation.

Yamashita K and Todo S.

2013年業績 (論文発表)

嶋村剛、藤堂省

脈管浸潤からみた肝移植成績。肝細胞がんのVascular Invasion. 肝胆膵 6: 967-979, 2013

嶋村剛

肝臓移植における血液製剤の需要と供給
血液事業35: 706-709, 2013

脇坂和貴、青柳武史、阿保大介、後藤了一、山下健一郎、鈴木友己、藤堂省、武富紹信、嶋村剛

小児生体肝移植再移植後の遅発性肝静脈狭窄に対してバルーン拡張術を施行した1例

移植. 48 (4-5): 265-270, 2014

太田稔、岡本花織、加藤伸彦、山下健一郎、嶋村剛

肝移植・腎移植における臨床工学技士の役割

Clinical Engineering24巻11号 Page1136-45 (2013.11)

大浦哲

【最新 肝胆膵脾手術アトラス】肝臓 成人生体肝移植手術 (左肝グラフト)

手術 2013年05月臨時増刊号 (67巻 06号)

武富紹信

HCV肝移植前後の抗ウイルス療法

肝胆膵 67(6):1021-1028, 2013.

Wood KJ, Zaitzu M, Goto R.

Cell mediated rejection.

Methods Mol Biol. 1034: 71-83. 2013

Goto R, Issa F, Heidt S, Taggart D, Wood KJ.

Ischaemia-reperfusion injury accelerates human antibody-mediated transplant arteriosclerosis.

Transplantation. 96: 139-145, 2013

Goto R, You S, Zaitzu M, Chatenoud L and Wood KJ.

Delayed anti-CD3 therapy results in depletion of alloreactive T cell and the dominance of graft infiltrating Foxp3⁺CD4⁺ T cells.

Am J Transplant 13 (7): 1655-64, 2013

Sommacale D, Aoyagi T, Dondero F, Sibert A, Bruno O, Fteriche S, Francoz C, Durand F, Belghiti J.

Repeat endovascular treatment of recurring hepatic artery stenoses in orthotopic liver transplantation.

Transpl Int. 2013 Jun; 26 (6): 608-15.

Kumagai-Braesch M, Jacobson S, Mori H, Jia X, Takahashi T, Wernerson A, Flodström-Tullberg M and Tibell A

The TheraCyte (TM) Device Protects against Islet Allograft Rejection in Immunized Hosts.

Cell Transplant. 22: 1137-1146, 2013.

Nakahashi S, Furukawa H, Shimamura T, Todo S, Gando S

APRV in patients with atelectasis after liver transplantation.

Anesthesia and Intensive Care 42:138-140, 2013

Morooka Y, Umeshita K, Taketomi A, Shirabe K, Maehara Y, Yamamoto M, Shimamura T, Oshita A, Kanno K, Ohdan H, Kawagishi N, Satomi S, Ogawa K, Hagiwara K, Nagano H

Reliability and validity of a new living liver donor quality of life scale.
Surg Today 43: 732-740, 2013

Jorns C, Takahashi T, Callaghan E, Zemack H, Larsson L, Nowak G, Parini P, Ericzon BG and Ellis E

Serum apolipoproteine as a marker to monitor graft function after hepatocyte transplantation in a clinically relevant mouse model.

Transplant Proc. 45:1780-1786, 2013.

■ 消化管グループ

《スタッフ紹介》



高橋 典彦 (チーフ)

当グループでは消化管の悪性・良性腫瘍、炎症性疾患（クローン病、潰瘍性大腸炎など）で手術が必要な疾患を対象としています。積極的な腹腔鏡手術の導入により、患者さんへの侵襲は少なく、手術精度はより高くするとともに、癌の基礎的研究や臨床研究を基盤として個々の患者さんに応じた集学的治療を組み合わせ、一人一人にもっとも適した治療法の提供と実践を心がけています。

スタッフに恵まれて、最近では集客活動に従事しています。皆さん、今後ともよろしく願いいたします。



川村 秀樹 (サブチーフ、胃部門チーフ)

2013年4月から北大消化器外科I消化管グループに勤務しております。前任の札幌厚生病院外科では胃癌治療、特に腹腔鏡下手術に力を入れて診療を行ってきました。今年度は大学内のほか各関連施設でも積極的に腹腔鏡下手術の指導を行ってきました。今後はさらに教室および関連施設全体の鏡視下手術の技術レベル向上と多くの技術認定医の輩出をめざして頑張りたいと考えております。



本間 重紀 (サブチーフ、大腸部門チーフ)

今年度の満足度：70点。手術の定型化、合併症の減少、後期研修医の手術執刀率の増加といった点が充実してきたと思います。

来年度の抱負：上記内容が今年度よりもさらに満足のものとなるように追求していきたいと思えます。特に、グループ全体の手術件数の増加、合併症ゼロを目指した手術、患者満足度No.1などに力を入れていきたいと思えます。



皆川のぞみ (インストラクター)

今年度は、目標とするところを全て達成できた訳ではありませんが、臨床・研究を合わせ国際学会3回、国内学会5回、地方会2回の発表を行いました。内視鏡外科学会技術認定（大腸）をいただき、大学でのda vinci手術導入の手伝いをさせていただき、大変よい経験になりました。直腸癌術前化学療法RNAC-01試験も立ち上げることができ、大学での第一症例を経験できなかったのは残念ですが、この臨床試験が順調にすすみ、次の試験にすすめるといいなと思っています。個人的には、当科に久しぶりに女性が入局してくれた事が嬉しかったです。女性の学生さんや他院の研修医で外科系に興味のある方々とお話する機会もありましたが、みなさん元気で優秀、個性もあり、将来がとても楽しみです。

来年度は、まずは今年度学会発表した分を論文にして形にするのを第一目標とします。臨床は、移動先に合わせてできることを安全第一に行いたいと思います。資格は大腸肛門病学会専門医と消化器病学会専門医の取得を目標にしています。その他、市立札幌病院の若い先生方と大学の若い先生方の中で交流をする機会をつくれるといいなと思っています。尚、今年度の活動を快くサポートして下さいました武富先生、高橋先生をはじめとする消化管グループの先生方、実験のご指導をしていただきました神山先生、崎浜先生、肝グループの先生方、小林さん、小原さん、全員のお名前は書ききれませんが、秘書さんも含めて消化器外科Ⅰのみなさんにこの場を借り、心より御礼を申し上げます。



柴崎 晋 (インストラクター)

今年度より数年ぶりに大学勤務となりました。まずは環境に慣れることと、腹腔鏡下手術の技術を学ぶことを大きな目標としておりました。ただ、腹腔鏡下手術はまだまだ修練が足りないと感じました。論文・学会発表も、思ったよりも成果を残せておらず、物足りないままで終わってしまいました。ただ、教育という点に関しては、腹腔鏡下手術の基本手技を後期研修医中心に指導を行うことができ、こちらは満足できる結果となったと思います。来年度は、腹腔鏡下手術手技の向上、学会・論文発表においては今年度を上回れるようにがんばっていきたいと思います。また、自分だけでなく若い人たちを引っ張っていけるようにしていきたいと思います。今後ともよろしく願い申し上げます。

現在取り組んでいること

〈胃〉

- ・早期胃癌に対するReduced port surgery (Dual-port法)
- ・進行胃癌に対する腹腔鏡下幽門側胃切除 (D2郭清、大網全摘も含む)
- ・進行胃癌に対する腹腔鏡下胃全摘術 (脾摘D2郭清も含む)
- ・残胃癌に対する腹腔鏡下手術 (論文投稿中)

〈大腸〉

- ・手術支援ロボット (da Vinci Surgical System Si) を用いた直腸腫瘍に対する腹腔鏡下直腸切除/切断術の探索的臨床研究 (自主臨床試験)
- ・SILS™ポートを用いた減孔式腹腔鏡下大腸切除術 (自主臨床試験)
- ・直腸癌に対する減孔式腹腔鏡下低位前方切除術 (論文投稿中)
- ・直腸癌に対するストマ孔を利用した単孔式腹腔鏡下直腸切断術 (論文投稿中)
- ・潰瘍性大腸炎に対するストマ孔を利用した単孔式腹腔鏡下大腸全摘術 (論文作成中)
- ・大腸癌同時性肝転移に対する腹腔鏡下大腸・肝同時切除術 (肝グループとの合同臨床研究)
- ・直腸癌術前化学療法RNAC-O1試験 (自主臨床試験)
- ・体外式超音波検査を用いた大腸癌術前診断法の探索的臨床研究 (自主臨床試験、論文投稿中)
- ・腹腔鏡下結腸切除後のOS-1を使用した早期経口摂取療法に関する探索的臨床試験 (申請準備中)

〈鏡視下手術全般、教育関連〉

- ・胃または大腸の悪性腫瘍に対する腹腔鏡下手術におけるエノキサパリンによる術後静脈血栓塞栓症発生予防の検討 (Eno-LAP試験、多施設共同RCT、研究代表者：蒲池浩文)
- ・初期・後期研修医に対する鏡視下基本手技 (縫合結紮手技) の教育
- ・後期研修医の早期からの鏡視下手術執刀経験
- ・北大消化器外科鏡視下手術教育カリキュラムの作成
- ・関連病院での技術認定医取得を目指した技術指導・技術支援出張
- ・Linear-Staplerの至適切離条件の検討

2013年診療実績 (1月～12月)

総入院数：140人

手術：131例

胃癌：28例 (腹腔鏡下手術：24例：85.7%)

大腸癌：52例 (腹腔鏡下手術：46例：88.5%)

炎症性腸疾患：12例 (腹腔鏡下手術：11例：91.7%)

(*) 後期研修医執刀件数：40例 (腹腔鏡下手術：12例)

2013年業績 (学会発表)

《第78回大腸癌研究会(2013/1/18 東京都センターホテル)》
大腸癌の循環腫瘍細胞と骨髄腫瘍細胞は再発予測マーカーとなるか？

皆川のぞみ、崎浜秀康、小林希、下國達志、本間重紀、高橋典彦、
神山俊哉、武富紹信

《第113回日本外科学会総会(2013/4/11-13 福岡 国際会議場)》
胃癌手術に対するReduced Port Surgeryの問題点と当科の対策
川村秀樹、渋谷一陽、谷岡利朗、久慈麻里子、横田健太郎、渡会
博志、田原宗徳、山上英樹、秦庸壮、田中浩一、益子博幸、石津
寛之、岡田邦明、高橋昌宏

大腸疾患に対するReduced Port Surgeryの問題点とその対策
(ビデオシンポジウム)

本間重紀、皆川のぞみ、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、武富紹信

肝細胞癌における血中遊離癌細胞と骨髄癌細胞の同定の試み

皆川のぞみ、崎浜秀康、小林希、若山顕治、柿坂達彦、敦賀陽介、
下國達志、本間重紀、横尾秀樹、蒲池浩文、高橋典彦、神山俊哉、
武富昭信

急性虫垂炎の保存的治療の検討

柴崎晋、戸井博史、津田一郎、中村貴久、長谷泰司

当科における80歳以上大腸癌症例の検討

山田健司、崎浜秀康、皆川のぞみ、下國達志、本間重紀、高橋典
彦、武富紹信

《SAGES 2013 (4/17-20, 2013, Baltimore, USA)》

Dual-ports Laparoscopy-assisted Anterior Resection
Compared With Conventional Laparoscopy-assisted
Anterior Resection for Rectal Cancer.

Homma S, Minagawa N, Shimokuni T, Sakihama H,
Takahashi N, Taketomi A

《第67回手術手技研究会 (2013. 5. 17- 18 札幌)》

人工肛門造設予定部を利用した単孔式腹腔鏡下大腸切除術

本間重紀、皆川のぞみ、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、武富紹信
(第1回ビデオ賞 (下部消化管部門) 授賞)

《ASCO2013 (5/31-6/4, 2013, Chicago, USA)》

A pilot study for cellular detection of circulating tumor
cells and disseminated tumor cells of patients with
hepatocellular carcinoma.

Minagawa N, Sakihama H, Kobayashi N, Wakayama K,
Kakisaka T, Tsuruga Y, Shimokuni T, Homma S, Yokoo H,
Kamachi H, Takahashi N, Kamiyama T, Taketomi A

《第19回北海道内視鏡外科研究会 (2013/6/8 函館)》

大腸癌原発巣および肝転移巣に対する腹腔鏡下同時切除術の検討
皆川のぞみ、本間重紀、柴崎晋、若山顕治、折茂達也、敦賀陽介、
柿坂達彦、横尾秀樹、蒲池浩文、川村秀樹、高橋典彦、神山俊哉、
武富紹信

《21st International Congress of the EAES (2013.6.19-
6.22 Vienna)》

Safety and Feasibility of reduced port laparoscopic

gastrectomy for early gastric cancer.

Kawamura H

Single port laparoscopy-assisted colectomy using the planned site of stoma.

Homma S, Minagawa N, Shimokuni T, Sakihama H, Takahashi N, Taketomi A

《第103回日本臨床外科学会 北海道支部総会(2013.7.13 室蘭)》

脳死肝移植待機中に発症した肛門部尖圭コンジローマに対し、手術による病勢コントロールを為し得た1例

本間友樹、皆川のぞみ、下國達志、崎浜秀康、本間重紀、高橋典彦、鈴木友己、武富紹信、山下健一郎、嶋村剛

《第68回日本消化器外科学会総会(2013/7/17-19 宮崎 シーガイア宮崎)》

次世代の標準手術をめざした胃癌に対するReduced Port Surgery

川村秀樹、渋谷一陽、谷岡利朗、久慈麻里子、田原宗徳、山上英樹、益子博幸、石津寛之、岡田邦明、高橋昌宏

直腸癌に対するReduced Port Surgery

本間重紀、皆川のぞみ、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、武富紹信

開腹歴のない絞扼性イレウスに対する臨床所見ならびに画像所見の検討

柴崎晋、戸井博史、津田一郎、中村貴久、長谷泰司

《第99回北海道外科学会(2013/8/31 札幌)》

急速増大した腹腔内デスマイド腫瘍の1例

谷道夫、川村秀樹、柴崎晋、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、武富紹信

《第34回日本大腸肛門病学会北海道地方会(2013/8/31 札幌)》

大腸癌原発巣および肝転移巣に対する腹腔鏡下同時切除術の検討
正司裕隆、皆川のぞみ、柴崎晋、本間重紀、若山顕治、折茂達也、敦賀陽介、柿坂達彦、横尾英樹、蒲池浩文、川村秀樹、高橋典彦、神山俊哉、武富紹信

《第113回日本消化器病学会北海道支部例会(2013.9.1 札幌)》

胃癌に対する腹腔鏡下胃切除の進歩 - Dual Port Laparoscopic Gastrectomyの実際

川村秀樹、柴崎晋、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、武富紹信、高橋周作、高橋昌宏

《第24回 日本消化器癌発生学会(2013/9/5)》

肝細胞癌における循環腫瘍細胞ならびに骨髄腫瘍細胞と臨床病理組織学的因子の検討

皆川のぞみ、崎浜秀康、小林希、柴崎晋、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、敦賀陽介、本間重紀、横尾秀樹、蒲池浩文、川村秀樹、高橋典彦、神山俊哉、武富紹信

《第108回北海道癌談話会例会(2013/9/21)》

肝細胞癌における循環腫瘍細胞ならびに骨髄腫瘍細胞と臨床病理

組織学的因子の検討

皆川のぞみ、崎浜秀康、小林希、小原美都、柴崎晋、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、敦賀陽介、本間重紀、横尾秀樹、蒲池浩文、川村秀樹、高橋典彦、神山俊哉、武富紹信

《第72回日本癌学会(2013/10/3-5 横浜)》

Cellular detection of circulating tumor cells and disseminated tumor cells of patients with hepatocellular carcinoma.

Minagawa N, Sakihama H, Kobayashi N, Wakayama K, Kakisaka T, Tsuruga Y, Shimokuni T, Homma S, Yokoo H, Kamachi H, Takahashi N, Kamiyama T, Taketomi A

《第11回日本消化器外科学会大会(2013.10.11-12 東京)》

右胃大網動脈を用いた冠動脈バイパス術後の胃癌に対して腹腔鏡下幽門側胃切除を施行した2例

川村秀樹、谷岡利朗、田原宗徳、渡会博志、久慈麻里子、秦庸壮、山上英樹、益子博幸、石津寛之、高橋昌宏

人工肛門造設予定部を利用した単孔式腹腔鏡下大腸切除術の手術成績の検討

本間重紀、皆川のぞみ、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、武富紹信

《第68回 日本大腸肛門病学会(2013/11/15)》

直腸癌に対する腹腔鏡手術(RPS vs MPS)

本間重紀、柴崎晋、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

当院で経験した巨大尖圭コンジローマ3症例の検討

皆川のぞみ、柴崎晋、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

《第75回日本臨床外科学会総会(2013.11.21-23 名古屋)》

進行胃癌に対する腹腔鏡下手術の技術的問題点

川村秀樹、柴崎晋、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、武富紹信、高橋周作、高橋昌宏

《11th Asia Pacific Congress of Endoscopic and Laparoscopic Surgery (ELSA) (Taipei, 11/21-24/2013)》
Feasibility of one-stage, laparoscopic hepatectomy and colectomy for colorectal neoplasm with synchronous liver metastasis.

Minagawa N, Kamiyama T, Homa S, Shibasaki S, Wakayama K, Tsuruga Y, Kakisaka T, Yokoo H, Kamachi H, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A

PTGBD followed by elective laparoscopic cholecystectomy in patients with moderate acute cholecystitis under antithrombotic therapy.

Shibasaki S, Takahashi N, Toi H, Tsuda I, Nakamura T, Hase T, Minagawa N, Homma S, Kawamura H, and Taketomi A

《第26回日本内視鏡外科学会総会(2013/11/27-29 福岡 国際会議場)》

胃癌に対する腹腔鏡下胃切除の長期成績

川村秀樹、柴崎晋、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、武富紹信、高橋周作、高橋昌宏

直腸疾患におけるReduced port surgeryの手法 ~術式に応じた最適なポート配置~

本間重紀、柴崎晋、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

大腸癌原発巣および肝転移巣に対する腹腔鏡下同時切除術の検討
皆川のぞみ、本間重紀、柴崎晋、若山顕治、折茂達也、敦賀陽介、柿坂達彦、横尾秀樹、蒲池浩文、川村秀樹、高橋典彦、神山俊哉、武富紹信

抗血小板/抗凝固療法施行中の中等度急性胆嚢炎に対するPTGBD後待機的腹腔鏡下胆嚢摘出術の有効性

柴崎晋、戸井博史、津田一郎、中村貴久、長谷泰司、皆川のぞみ、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

《第104回日本臨床外科学会北海道地方会（2013/12/7 札幌 札幌医科大学記念ホール）》

抗血栓療法施行中の中等度急性胆嚢炎に対するPTGBD後待機的腹腔鏡下胆嚢摘出術の有効性

柴崎晋、戸井博史、津田一郎、中村貴久、長谷泰司、皆川のぞみ、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

早期胃癌、大腸癌重複例に対してDual Port (DP) 法で腹腔鏡下胃全摘、下行結腸切除術を施行した一例

松井博紀、皆川のぞみ、柴崎晋、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

2013年業績（論文発表）

小丹枝裕二、本間重紀、皆川のぞみ、相木総良、数井啓蔵、武富紹信

直腸脱に対してSingle incision laparoscopic surgeryポートを用いて腹腔鏡下直腸固定術を施行した2例

外科75, 1245-1248, 2013

柴崎晋、戸井博文、津田一郎、中村貴久、長谷泰司

絞扼性イレウスの術前CT所見に関する検討

外科 (in press)

市川伸樹、本間重紀、中西一彰、数井啓蔵、脇坂和貴、武富紹信
噴門部巨大出血性胃ポリープに対し腹腔鏡内視鏡合同手術を施行した1例

北海道外科雑誌58 : 40-44, 2013

Kawamura H, Tanioka T, Shibuya K, Tahara M, Takahashi M.
Comparison of the invasiveness between reduced port laparoscopy-assisted distal gastrectomy and conventional laparoscopy-assisted distal gastrectomy.
International Surgery. Vol 98: 9-12, 2013.

Kawamura H, Tanioka T, Kuji M, Tahara M, Takahashi M.
The initial experience of dual port laparoscopy-assisted total gastrectomy as a reduced port surgery for total gastrectomy.

Gastric Cancer. Vol 16: 602-608.2013.

Kawamura H, Tanioka T, Tahara M, Takahashi M.
Postoperative complication rates and invasiveness of laparoscopy-assisted distal gastrectomy and open distal gastrectomy based on the American Society of Anesthesiologists' classification system.

Asian journal of endoscopic surgery. Vol 6: 170-176, 2013.

Kawamura H, Tanioka T, Shibuya K, Takahashi M.
Neoadjuvant chemotherapy outcomes for clinical para-aortic lymph node metastasis-positive gastric cancer.
Hepato-Gastroenterology (in press).

Kawamura H, Takahashi N, Homma S, Minagawa N, Shibasaki S, Takahashi M, Taketomi A.

Assessment of Postoperative Symptoms after Laparoscopy-assisted Distal Gastrectomy for Stage I Gastric Cancer.

International Surgery (in press)

Shibasaki S, Takahashi N, Toi H, Tsuda I, Nakamura T, Hase T, Minagawa N, Homma S, Kawamura H, Taketomi A.
Percutaneous transhepatic gallbladder drainage followed by elective laparoscopic cholecystectomy in patients with moderate acute cholecystitis under antithrombotic therapy.

J Hepatobiliary Pancreat Sci. 2013 Sep 11. doi: 10.1002/jhbp.28. [Epub ahead of print]

Noguchi K, Kawamura H, Ishizu H, Okada K.
Dramatic resolution of bullous pemphigoid after surgery for gastric cancer: A case report. International Journal of Surgery Case Reports.

Available online 26 February 2014.

■ 小児グループ

《スタッフ紹介》



岡田 忠雄 (チーフ)

診療では、2012年9月に小児に対する鏡視下鼠径ヘルニア手術（LPEC法）を開発された嵩原先生に直接ご指導頂き、北海道で初めて小児LPEC法を導入した後、当院での小児鼠径ヘルニア手術はほぼ全例でLPEC法により施行しています。その結果、整容面や低侵襲度から、ご両親へのニーズに答える体制が創れたことです。また、日頃お世話になっております、小児科の先生方や外科の先生方との学術交流の場としての、第1回北海道小児外科フォーラムが開催できたことです。本フォーラムで小児外科医療の現状と最先端医療をご講演頂くことで、北海道の病める子供達の現在と明日の治療に寄与していきたいと考えます。

来年度（4.1.付）は北海道教育大学教育学部（養護教育専攻医科学看護学分野臨床医学担当）で養護教諭の養成、教育が主となります。養護の現場で小児外科や学校救急に関連する教育研究も視野におきながら、新規一転邁進していきたいと思っております。北大病院には客員・招聘医師として診療と研究に関わる処分ですので、今後とも北大小児外科を何卒よろしくお願い致します。



本多 昌平 (サブチーフ)

北大病院に戻って4年目となり、まだまだ十分とは言えませんが小児外科チームとしての形が少しずつ固まってきた印象があります。後期研修医のローテーターにもう少し手術経験をしてもらいたいと考えながら、疾患の特異性および希少性から満足いくだけの臨床経験には到達できていないことを痛感しています。

臨床と研究とのバランスを取りながらどちらも精一杯取り組んでいきたいと思いつつも時間的制約や研鑽が及ばずなかなか思い通りに進まない面がありました。来年度はチーム体制が一新することもあり、臨床・研究・教育のバランスに尚一層目を配りながら、小児外科チームとして最大限のパフォーマンスを打ち出せるよう頑張っていきたいと思っております。



宮城 久之 (国内学中)

2013年1月から3月まで北大病院小児外科で勤務し、4月より神奈川県立こども医療センターにて外科研修をおこなっています。（※留学生紹介を参照）



湊 雅嗣 (外来医+大学院研究中)

神奈川県立こども医療センターでの外科研修を終え、2013年春より大学院生として肝芽腫の基礎研究に勤しみながら、主に外来診療に携わっています。来年度より臨床面においてより重責を果たす役割となることから、これまでの研究体制を維持しながらどの様に臨床体制を確立していくかを現在熟考しております。

現在取り組んでいること

・2013年度に取得した競争研究費

【本多昌平】

1. 平成24年度 文科省科学研究費補助金（若手研究B）
Genetic・Epigenetic解析を統合した肝芽腫予後予測マーカーの確立 平成24～26年度 3,400千円
2. 平成25年度（公財）川野小児医学奨学財団 川野正登記念研究助成（若手研究者奨励助成）
肝芽腫のDNAメチル化解析による予後予測システムの構築 800千円

【岡田忠雄】

1. 平成24年度 公益財団法人 黒住医学研究振興財団 研究助成金
迅速遺伝子解析T-RFLP法を用いた菌血症・敗血症早期診断への応用 700千円
2. 平成24年度 公益財団法人 ファイザーヘルスリサーチ振興財団 ヘルスリサーチ研究国内共同研究
小児入院支援RAAが患児家族に与える精神的癒し定量的効果研究 1,000千円
3. 第39回（平成24年度分） 大山健康財団学術研究助成
難培養・分離細菌を治療標的としたT-RFLP法による感染症早期診断法の確立 1,000千円
4. 第44回（平成25年度分） 三菱財団社会福祉事業研究助成
小児医療における精神的入院支援を目指したメンタル コミットロボットによる動物介在療法の構築 2,500千円

2013年診療実績（1月～12月）

1. 外来実績

月、金曜日の午前中に上記3名体制でおこなっています。毎月1回（水曜日）、前北海道大学小児外科学講座教授 佐々木文章先生に外来支援をいただいています。

2013年は80施設より194人の新規紹介患者をいただきました。この場をお借りし、日頃から御世話になっております各施設諸先生方に心より御礼申し上げます。

2. 病棟実績

小児外科グループチーフ 岡田、サブチーフ 本多の下、後期研修医ローテーターとの3名で診療に当たっています（時に初期研修医が加わることがあります）。小児外科領域の疾患の大部分は周術期を乗り切ると回復が早く、入院患者の回転が速いことが特徴です。一方で、先天性疾患に伴う短腸症候群など長期入院加療を要する症例にも遭遇することがあり、患児の成長・発達を考慮した環境づくりや家族へのサポートなど、小児外科に特異的な配慮を必要とするこもしばしばです。

3. 手術件数

総手術数 223例、新生児症例 14例

（内訳：小児悪性腫瘍 11例、胆道系疾患 2例、鏡視下手術（LPEC法を含む） 59例）

2013年業績（学会発表）

《第1回北海道小児外科フォーラム 2013.2.22. 札幌》

便秘を主訴に紹介されHirschsprung病と診断された患児に特徴的な画像所見はあるかー便秘患児に対する直腸粘膜生検施行例39例の検討からー

宮城久之、岡田忠雄、本多昌平、武富紹信

胆嚢捻転症の7歳男児例

大島由季代、辻岡孝郎、津曲俊太郎、縄手満、築詰紀子、吉岡幹朗、鹿野高明、高橋豊、岡田忠雄、本多昌平、宮城久之、武富紹信

《日本小児科学会北海道地方会第266回例会 2013.2.24. 札幌》

ω3脂肪酸製剤を使用し中心静脈関連肝障害の著明な改善を得た1症例

高橋俊行、野呂歩、中村雄一、藤本隆憲、高橋大介、小西祥平、鈴木靖人、仲西正憲、永島哲郎、長和俊、本多昌平、宮城久之、岡田忠雄

《第88回日本小児外科学会北海道地方会 2013.3.9. 札幌》

腹腔鏡下摘出術が有用であった遊離卵巣嚢腫（autoamputated ovarian cyst）の1例

豊島雄二郎、岡田忠雄、宮城久之、本多昌平、山田洋介、武富紹信

便秘を契機にHirschsprung病と診断された患児における注腸造影検査診断法有用性の検討ー新規定量的パラメーターを用いてー
宮城久之、岡田忠雄、本多昌平、武富紹信

膵膵部原発リンパ管腫に対し自動縫合器にて切離を行った6歳男児例

本多昌平、岡田忠雄、宮城久之、巖築慶一、脇坂和貴、武富紹信

《第113回日本外科学会定期学術集会 2013.4.13. 博多》

次世代シーケンサーを用いた肝芽腫のメチル化解析による予後予測マーカー確立の試み

本多昌平、岡田忠雄、宮城久之、檜山英三、武富紹信

胆道閉鎖症における移植治療を含めた包括的治療戦略の構築：葛西術を担当する小児外科医の観点から（パネルディスカッション）
岡田忠雄、本多昌平、宮城久之、武富紹信

《第11回日本ヘルニア学会総会 2013.5.10 仙台》

乳児期の食道裂肛ヘルニア14例の検討（シンポジウム）
湊雅嗣、武浩志

《第50回日本小児外科学会総会 2013.5.30 東京》

網羅的メチル化解析による肝芽腫の分化度からみた予後予測マーカーを確立する取組み（口演）

本多昌平、岡田忠雄、宮城久之、檜山英三、武富紹信

当センターにおける13トリソミー・18トリソミーの児に対する外科的治療について（パネルディスカッション）

湊雅嗣、武浩志、大澤絵都子、白井秀仁、浅野史雄、望月響子、北河徳彦、新開真人

臍帯ヘルニアと臍腸瘻を合併した13トリソミーの保存的治療例
(ポスター)

湊雅嗣、武浩志、大澤絵都子、臼井秀仁、浅野史雄、望月響子、
北河徳彦、新開真人

《The 50th Annual Meeting of the Japanese Society of
Pediatric Surgeons. International session 2013.05.30 東京》
Usefulness of Bacterial 16S rRNA Markers for Fecal
Samples to Diagnose Biliary Atresia.(Poster)

Okada T, Honda S, Miyagi H, Minato M, Taketomi A.

13C-ABT in delayed gastric emptying of gastroesophageal
reflux with scoliosis.(Oral)

Okada T, Honda S, Miyagi H, Minato M, Taketomi A.

Effect of Cholangitis after Kasai's Portoenterostomy on
Fecal Bacterial Molecular Profiles.(Oral)

Okada T, Honda S, Miyagi H, Minato M, Taketomi A.

Triangular Cord Sign was not Useful for the Diagnosis of
Type 1 Cystic Biliary Atresia.(Oral)

Okada T, Honda S, Miyagi H, Minato M, Taketomi A.

Outcomes of Infants with Prenatally Diagnosed Cystic
Biliary Atresia.(Oral)

Okada T, Honda S, Miyagi H, Minato M, Taketomi A.

Novel predicting factors by enema contrast examination
for Hirschsprung disease.(Oral)

Miyagi H, Okada T, Honda S, Taketomi A.

Risk factors and treatment for persistent gastrocutaneous
fistula of post-Nissen fundoplication.(Oral)

Miyagi H, Okada T, Honda S, Taketomi A.

《2013 Joint Meeting of 13 th APPSPGHAN and 40 th
JSPGHAN 2013.11.1. Tokyo Poster》

Usefulness of bacterial 16S rRNA genetic markers
for fecal samples to differentiate choledochal cyst
from biliary atresia in early infants with biliary cystic
malformation: A preliminary report.

Okada T, Honda S, Miyagi H, Minato M, Cho K, Taketomi A.

Triangular cord sign as the ultrasonographic finding is
not useful for the diagnosis of cystic biliary atresia.

Okada T, Honda S, Miyagi H, Minato M, Cho K, Taketomi A.

Outcomes are Different between Prenatal and Postnatal
Diagnosed Cystic Biliary Atresia Infants.

Okada T, Honda S, Miyagi H, Minato M, Cho K, Taketomi A.

《第27回日本小児救急医学会総会 2013.6.14 沖縄》

食道粘膜障害を呈した食道停留異物に対する内視鏡下摘出術の
検討

湊雅嗣、武浩志

《第49回日本周産期・新生児医学会総会 2013.7.16. 横浜》
胎児診断された仙尾部奇形腫治療上の問題点 - 難治性胎児水腫
合併例を中心に -

岡田忠雄、本多昌平、宮城久之、長和俊、武富紹信

《第89回日本小児外科学会北海道地方会 2013.8.31. 札幌》
拡張胆管が門脈を圧排・閉塞し門脈圧亢進症を呈した先天性胆道
拡張症の1例

宮岡陽一、本多昌平、岡田忠雄、湊雅嗣、畑中佳奈子、武富紹信

6歳未満の患者に対する胸腔鏡手術の成績

樋田泰浩、加賀基知三、岡田忠雄、武富紹信、平岡圭、本間直健、
久保田(中田)玲子、野口美紗、松居喜郎

右腎無形成を伴った後腹膜原発神経芽腫の1例

本多昌平、岡田忠雄、湊雅嗣、宮岡陽一、武富紹信

《第36回日本膵・胆管合流異常研究会 2013.9.14. 淡路》

出生前診断された先天性胆道拡張症における症状発現予測因子の
検討

岡田忠雄、本多昌平、宮城久之、武富紹信

《第72回日本癌学会学術総会、2013.10.3-5 横浜》

Epigenetic analyses to establish a molecular-genetic
marker for treatment outcome in hepatoblastomas.

Honda S, Okada T, Suzuki H, Minato M, Haruta M,
Kaneko Y, Hiyama E, Taketomi A.

《第33回小児内視鏡外科・手術手技研究会PSJM2013
2013.10.25. 東京》

胆道閉鎖症減黄手術における術後早期合併症の検討

岡田忠雄、本多昌平、湊雅嗣、武富紹信

《第6回日本ヘルニア学会北海道支部総会 2013.11.9. 札幌》

腹腔鏡下経皮的腹膜外ヘルニア閉鎖術(LPEC法)の導入と現状
の問題点

本多昌平、岡田忠雄、湊雅嗣、高橋典彦、武富紹信

《第40回日本胆道閉鎖症研究会 2013.11.16. 水戸》

胆道閉鎖症減黄手術における術後合併症の検討：特に術後肝内胆
管拡張例を除いて

岡田忠雄、本多昌平、湊雅嗣、武富紹信

《第55回日本小児血液・がん学会学術集会 2013.11.30-
12.1. 福岡》

胎児診断された難治性仙尾部奇形腫治療上の問題(ワークショップ)

岡田忠雄、本多昌平、宮城久之、長和俊、武富紹信

放射線併用下のイリノテカン主軸反復化学療法が臨床症状の改善
と進行抑制に有用であった小児膵芽腫症例(口演)

長祐子、杉山末奈子、寺下友桂子、大島淳二郎、佐藤智信、井口
晶裕、宮城久之、本多昌平、岡田忠雄、鬼丸力也

次世代シーケンサーを用いた肝芽腫のメチル化解析による予後予測マーカー確立の試み（口演）

本多昌平、岡田忠雄、湊雅嗣、春田雅之、金子安比古、檜山英三、武富紹信

経肋間静脈中心静脈カテーテル挿入法
小児外科45, 376-380, 2013

白血病治療中に発症した急性虫垂炎の治療方針（ポスター）

湊雅嗣、岡田忠雄、本多昌平、武富紹信

2013年業績（論文発表）

Honda S, Miyagi H, Suzuki H, Minato M, Haruta M, Kaneko Y, Kanako H, Hiyama E, Okada T, Taketomi A
RASSF1A methylation predicts a poor prognosis in hepatoblastoma patients.
Pediatr Surg Int 2013 Nov;29(11):1147-52.

Okada T, Honda S, Miyagi H, Minato M, Taketomi A
Can pH monitoring predict gastric emptying measured by ¹³C-acetate breath test in gastroesophageal reflux with neurological impairment?
Surgical Science (in press).

Okada T, Honda S, Miyagi H, Minato M, Cho K, Taketomi A
Adequate postnatal diagnostic modalities for prenatally diagnosed choledochal cyst.
Italian J Pediatr (in press).

Okada T, Honda S, Miyagi H, Minato M, Cho K, Taketomi A
Postnatal management for prenatally diagnosed biliary cystic malformations.
Italian J Pediatr (in press).

Okada T, Honda S, Miyagi H, Minato M, Kanako C, Kubota, Cho K, Taketomi A
Liver Fibrosis in Prenatally Diagnosed Choledochal Cysts.
J Pediatr Gastr Nutr, Letter to the Editor. 2013 Aug;57(2):e14.

Honda S, Okada T, Miyagi H, Minato M, Suzuki H, Taketomi A
Spontaneous Rupture of an Advanced Pancreatoblastoma: Aberrant *RASSF1A* Methylation and *CTNNB1* Mutation as Molecular Genetic Markers.
J Pediatr Surg 48(4):e29-e32, 2013.

Okada T, Honda S, Miyagi H, Taketomi A
Severe pancreatitis due to an impacted common channel caused by fatty acid calcium stones besides pancreatic protein plugs in a child with pancreaticobiliary maljunction.
Radiology Case Reports (in press).

湊雅嗣、武浩志

2013年教室活動紹介

〈研究部門〉

■ リサーチ統括部長より

消化器外科学分野 I における研究の概要



(リサーチ統括：深井 原)

武富紹信教授の就任とともに臨床診療と連携した研究体制に改組しました。bedsideでの疑問をbenchへ、また研究から得られたデータを臨床における予後予測や治療に結びつけることを目指すものであります。臨床診療グループは、肝胆膵G、消化管G、移植G、小児Gから構成され、研究Gもこれに準じた形となっております。

消化器外科領域（肝胆膵、消化管）では癌が主要な研究対象です。基礎研究においては、臨床検体と患者情報を集積し、悪性度マーカーを見出し、それらの分子生物学的意義を検証し、分子標的治療の可能性を模索しています。小児領域の腫瘍に関しても、同様の手法を用いています。それゆえ、これらの腫瘍の研究においてはグループの垣根を越えて、遺伝子・タンパクの強発現、ノックアウトやそれらの解析、免疫染色などの方法論を共有し、研究を進めている次第です。

一方、移植領域では移植後の免疫状態を制御する方法論の構築、免疫状態のモニタリングを行い、臨床における免疫寛容の誘導を目指しています。実際に免疫抑制剤を減量できる症例では、どのような白血球フェノタイプが関与するのか、質的、時間的な推移を精査しています。特にウイルス性肝炎による肝不全、肝癌症例における、肝炎再発、肝移植後早期の肝線維化、グラフトロスは、免疫制御をさらに困難にしています。

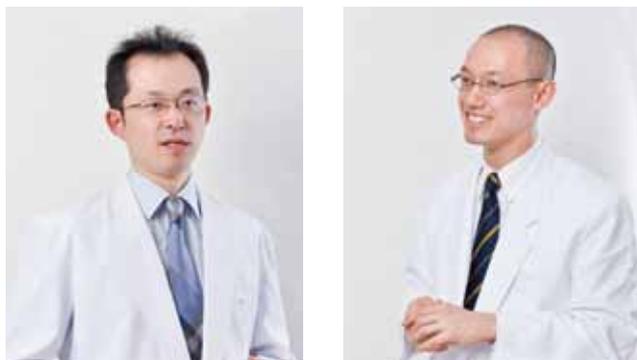
これらの事情に鑑み、ウイルス性肝細胞癌の切除肝組織からウイルス感染肝細胞を初代培養し、肝炎ウイルスの完全駆除を目指した新規治療の確立のための研究にも着手しています。初代培養とともに、継代培養可能な幹細胞様細胞の同定、凍結保存にも着手し、組織バンクのバージョンアップを目指しています。

移植領域では易傷害肝グラフトの安全な利用を可能にするための、臓器灌流修復法の開発を行っています。この方法は単にグラフトの修復法を提供するのみならず、体外でグラフトの遺伝子発現を制御するとともに、既に存在するタンパクのリン酸化やカルモジュリン結合などのpost-translationalな変化を自在に制御する方法論を構築することが最終目標であります。

■ 研究グループ紹介

移植グループ

1. 移植グループの研究テーマ



(左：小野、右：江本)

移植グループの研究は、江本慎、小野仁（ともに2006年卒）が配属しております。江本は移植免疫学の研究を担当しており、樹状細胞を抑制するトリアゾロピリミジン系新規免疫抑制剤NK026680を用いた拒絶反応の抑制を、マウスのアロ心移植モデルを用いて研究を行っています。カルシニューリン阻害剤（Calcineurin Inhibitors：CNIs）の開発・臨床応用で固形臓器移植の成績は目覚ましく改善しましたが、長期にわたるCNIsの服用は、その汎免疫抑制効果により、悪性腫瘍や感染症のリスクを高めます。そこでCNIsに代わる新しい免疫抑制療法の開発が望まれています。NK026680はin vitroで樹状細胞の成熟やT細胞の増殖・分化を抑制する効果を認めますが、単剤ではラットのアロ移植心の生着延長効果は十分とは言えません。そこで、免疫修飾効果が期待されるdonor specific transfusion (DST) をNK026680と併用することで、マウスのアロ移植心の著明な生着延長を認めました。現在その機序解析を進めている段階です。

小野は膵島移植の研究を担当しております。臓器移植に代わる細胞治療として、膵島移植が注目されています。膵島移植は1型糖尿病に対する根本的治療法であり、同じく1型糖尿病の根治療法である膵臓移植と比較した時、低侵襲で合併症も少なく、理想的な治療法です。しかし、インスリン離脱を達成するには、複数回の移植が必要であり、移植後長期のインスリン離脱の維持は難しいのが現状です。膵島移植の成績不良の主な原因は、移植後早期のグラフト障害およびそれに引き続く進行性の膵島喪失です。移植後早期のグラフト障害は、移植された膵島と血液が接触することにより惹起されるInstant blood-mediated inflammatory reaction (IBMIR) によって起きます。IBMIRは主に補体、凝固、自然免疫反応によって引き起こされる血栓性および炎症性の反応で、これにより移植後72時間以内に移植膵島の約50～70%が破

壊されます。IBMIRにはマクロファージが大きな役割を果たしており、そのマクロファージの活性化には、転写因子NF- κ Bが深く関与しています。われわれは、転写因子NF- κ BやPPAR γ に着目し、移植後早期のグラフト障害の抑制を目指し研究を行っています。

2. 今後の方向性

NK026680とDSTを併用したマウスの心移植実験では、無治療群、単独治療群と比較して、併用治療群で著明な移植心の生着延長を認めました。移植直前の免疫状態として、ドナー抗原に対する増殖反応およびインターフェロン γ (IFN- γ)産生が増加していました。また、in vivoでの抗原刺激により、他群に対して併用治療群でFoxp3陽性T細胞の割合の増加を認めました。移植後7日目では逆に、IFN- γ の産生は併用治療群で抑制され、Foxp3陽性T細胞の割合は各群で変わらないという結果でした。以上の結果から、サイトカインの産生や各細胞の割合がグラフトに及ぼす影響は、移植後のタイミングにより異なると考えられました。今後は移植後の免疫状態のタイムコースを把握しつつ、根本的な機序解析を進める予定です。

膵島移植に関しては、現在、マウス同種同系膵島移植マージナルモデルにおいて、Proteasome inhibitorを用いた早期グラフト障害抑制効果の有効性および、その機序解析を行っております。(文責：江本慎)

3. 2013年業績 (学会発表)

《第113回日本外科学会総会 (2013.4.11-13 福岡)》

抗CD80抗体、抗CD86抗体下共培養により誘導される免疫抑制性細胞の同定

長津 明久、山下 健一郎、財津 雅昭、江本 慎、旭 よう、小倉 正臣、小野 仁、常俊 雄介、後藤 了一、五十嵐 瑠美、場集田 寿、奥村 康、武富 紹信、藤堂 省

イヌ自家膵島移植モデルにおけるProliferator-activated receptor(PPAR)- γ agonistによる早期グラフト傷害抑制効果の検討

旭 輝、山下 健一郎、渡辺 正明、小倉 正臣、小野 仁、江本 慎、長津 明久、吉田 雅、腰塚 靖之、蒲池 浩文、武富 紹信、藤堂 省

《American Transplant Congress 2013. Seattle, U.S.A. (2013.5.18-22)》

Ex-vivo Generation of Immunosuppressive Human Cells by Co-culture of Recipient and Irradiated Donor PBMCs under CD80/CD86 Costimulation Blockade.

Nagatsu A, Yamashita K, Zaitzu M, Emoto S, Asahi Y, Ogura M, Ono H, Tsunetoshi Y, Goto R, Bashuda H, Taketomi A, Okumura K, Todo S.

Prevention of early graft loss by Proliferator-activated receptor-gamma agonist, pioglitazone, in canine islet autotransplantation.

Asahi Y, Yamashita K, Watanabe M, Ogura M, Ono H, Erika D Handy, Emoto S, Nagatsu A, Yoshida T, Koshizuka Y, Kamachi H, Taketomi A, Todo S.

《第46回日本移植学会総会 (2013.9.5-7 京都)》

NK026680とDonor specific transfusionによる免疫抑制効果

江本 慎、柴崎 晋、長津 明久、小野 仁、後藤 了一、青柳 武史、深井 原、嶋村 剛、武富 紹信、藤堂 省、山下 健一郎

膵島移植の成績向上を目指して イヌ自家膵島移植における Peroxisome proliferator-activated receptor(PPAR)- γ agonistのグラフト保護効果の検討

旭 燁、山下 健一郎、渡辺 正明、小倉 正臣、小野 仁、江本 慎、長津 明久、腰塚 靖之、武富 紹信、藤堂 省

Improvement of normoglycemic rate by proliferator-activated receptor-gamma agonist, pioglitazone, in canine islet autotransplantation

Asahi Y, Yamashita K, Watanabe M, Ogura M, Ono H, Emoto S, Nagatsu A, Yoshida T, Koshizuka Y, Taketomi A, Todo S.

《16th Congress of the European Society for Organ Transplantation. Vienna, Austria, September 8 - 11, 2013》

Ex-vivo generation of human regulatory t cells by cd80/cd86 costimulation blockade

Nagatsu A, Yamashita K, Zaitzu M, Emoto S, Asahi Y, Ono H, Goto R, Bashuda H, Taketomi A, Okumura K, Todo S.

4. 2013年業績 (論文発表)

Kuraya D, Watanabe M, Koshizuka Y, Ogura M, Yoshida T, Asahi Y, Kamachi H, Nakamura T, Harashima H, Ozaki M, Umezawa K, Matsushita M, Yamashita K, Todo S.

Efficacy of DHMEQ, a NF- κ B inhibitor, in islet transplantation: I. HMGB1 suppression by DHMEQ prevents early islet graft damage.

Transplantation 2013 Sep 15;96(5):445-53

Watanabe M, Yamashita K, Kamachi H, Kuraya D, Koshizuka Y, Shibasaki S, Asahi Y, Ono H, Emoto S, Ogura M, Yoshida T, Ozaki M, Umezawa K, Matsushita M, Todo S.

Efficacy of DHMEQ, a NF- κ B inhibitor, in islet transplantation: II. Induction DHMEQ treatment ameliorates subsequent alloimmune responses and permits long-term islet allograft acceptance.

Transplantation 2013 Sep 15;96(5):454-62.

Watanabe M, Yamashita K, Suzuki T, Kamachi H, Kuraya D, Koshizuka Y, Ogura M, Yoshida T, Aoyagi T, Fukumori D, Shimamura T, Okimura K, Maeta K, Miura T, Sakai, F, Todo S.

ASKP1240, a fully human anti-CD40 monoclonal antibody, prolongs pancreatic islet allograft survival in nonhuman primates.

Am J Transplant. 2013 Aug;13(8):1976-88.

Shibasaki S, Yamashita K, Goto R, Wakayama K, Tsunetoshi Y, Zaitzu M, Igarashi R, Haga S, Ozaki M, Umezawa K, Todo S.

Immunosuppressive effects of DTCM-G, a novel inhibitor of the mTOR downstream signaling pathway.

Transplantation 2013 Feb 27;95(4):542-50.

■ 研究グループ紹介

保存グループ

1. 研究テーマ・概要

ドナー不足による移植待機患者の死亡が深刻な問題である。心臓死 (Donation after Cardiac Death; DCD) や脂肪肝、長期冷保存などのドナーは、ECD (expanded criteria donor) と総称され、安全に活用できれば約20-25%のドナー源拡大が見込まれる。単純浸漬冷保存の限界が認知され、近年、臓器灌流の研究が精力的に行われている。

単純冷保存は冷却による代謝抑制法である。エネルギー消費を減少させ、再灌流後に正常化を目指すものである。しかし、4℃では約10%とはいえ代謝活性が残るので、冷保存時間の遷延によって不可逆な機能失調を来す。

臓器灌流は低温 (4℃)、常温 (37℃)、あるいはその間の温度で臓器を酸素化灌流し、グラフト機能の正常化を目指す方法である。1) 好気代謝の維持・促進、2) 代謝老廃物の除去、3) 血栓の除去、4) 体外治療、5) viability/injuryの移植前評価、などの利点があり、多面的な臓器保護・修復が期待される。近年、臨床腎移植、Standard Criteria Donor (SCD) 肝グラフト、ECD肝グラフトにおける有用性が報告された。しかし、長期予後は明らかではなく、至適条件が模索されている段階である。

当グループでは単純浸漬冷保存および灌流保存における新規保存液やガス投与の効果を小動物で検討している。病態の分子生物学的解析、障害性および保護性反応の時間的、空間的推移を精査し、細胞内シグナルの動態と治療標的を探索している。

2. 大学院生紹介



藤好 真人

研究テーマ：肝移植におけるsiRNAを用いた体外グラフト治療法の確立

マウス肝移植モデルにおいてドナーマウスへのsiRNAのInVivo導入を行い、遺伝子ノックダウングラフトの有効性を確認した。次に冷保存下グラフトへの体

外siRNA導入を試みるも困難であったので、非冷温保存法を確立するべく灌流装置の開発およびドナー術式の改変を行い、マウス機械灌流+肝移植モデルを確立した。灌流装置にはピエゾポンプ、膜型人工肺および温度調節機構が実装されてい

る。冷温機械灌流+肝移植モデルにてこの実験系を技術的に安定化させた後、非冷温機械灌流保存を施したグラフトを用いたマウス肝移植モデルの確立に成功した。現在、最終段階であるsiRNA体外導入の準備中である。

島田 慎吾

2年間で以下の実験を行い、論文を作成中である (釧路労災HP)。

- ① マウス肝温阻血再灌流障害に対する硫化水素の保護効果 (revise中)
- ② ラット肝冷保存再灌流における水素ガスの保護効果 (投稿準備中)
- ③ ラット肝冷保存再灌流における重水含有保存液の保護効果 (投稿準備中)

* 研究の合間に臨床論文の投稿、消化器外科学会専門医、肝臓学会専門医を取得した。



石川 隆壽

研究1年目で、ほとんど傷害を与えずラット肝を摘出、冷保存し、単離肝灌流装置で評価ができるようになった。現在、肝低温酸素化体外灌流修復の条件検討を行っている。

3. 今年度の満足度/来年度の抱負/今後の方向性

藤好：研究テーマは“小動物肝における肝体外灌流によるグラフト修復の至適条件の検討”、である。マウス、ラットの肝移植モデルを作成し、体外灌流によるグラフト修復、体外でのsiRNA投与モデルの作成が可能になった。今後、易傷害肝における効果の検証とメカニズム解析を進め、臨床応用へ向けたさらなる検討を行う。

石川：研究テーマは“ラット肝における低温酸素化灌流による肝グラフト修復の至適条件の検討”、である。必要とされる実験モデルのうち、ラット肝の冷保存、単離肝灌流による再灌流、については十分な安定性、再現性を有するモデルを構築し得た。現在、低温酸素化体外灌流の至適条件を検討中である。

総じて、H25年度の研究は当初実験計画と比較し、概ね予

定通りの進行状況である。動物実験棟本館の閉館、プレハブ舎への移動、医局実験スペースの改組などに伴い、実験をできない期間があったことを考慮すると上出来であろう。H26年度は低温酸素体外灌流および水素ガス併用低温灌流を行い、画期的な臓器修復法を創出するべく探索研究を継続する。現在はラット肝によるex vivo実験だが、今後は小動物、大動物の肝移植モデルでのProof of Conceptを得ることを目指し、基礎固めを行わなければならない。

また、本グループの仕事を加速させるためには深井が中心となって開発している臓器灌流液の特許出願が必須であり、権利化とともに産学連携を模索していくことが喫緊の課題である。

4. 2013年業績（論文発表）

深井 原、島田 慎吾、若山 顕治、嶋村 剛、山下 健一郎、藤堂 省、武富 紹信
臓器保存液の現状と今後～単純冷保存は役割を終えたのか？
Organ Biology 20(2): 176-180, 2013

5. 2013年業績（学会発表）

《CAST2013 (Congress of Asian Transplantation Session: Symposium (SY07)) 4th/Sep/2013, Kyoto》
“Organ preservation and resuscitation from marginal donors -current progress-” Organ preservation and resuscitation -current progress in deuterium oxide (heavy water) and hydrogen gas as cytoprotectants.
Fukai M

《American Transplant Congress (Seattle, WA), 18-22 May 2013》
Heavy Water and Hydrogen Gas Confer Protection

Against Hepatic Cold Ischemia and Reperfusion Injury in Isolated Perfused Rat Liver.

Shimada S, Fukai M, Wakayama K, Yamashita K, Taniguchi M, Suzuki T, Shimamura T, Kamiyama T, Furukawa F, Todo S, Taketomi A.

《International Congress of European Society for Organ Transplantation (Vienna), 8-13 Sept. 2013》

Heavy Water and Hydrogen Gas Ameliorates Cold Preservation and Reperfusion Injury in Rat Liver.

Shimada S, Fukai M, Wakayama K, Yamashita K, Taniguchi M, Suzuki T, Shimamura T, Kamiyama T, Furukawa F, Todo S, Taketomi A.

《第40回 日本臓器保存生物医学会学術集会 2013.11.9（新宿）》

より良い臓器灌流のための臓器保存法と再灌流時治療：重水、水素の可能性

深井 原、島田 慎吾、若山 顕治、石川 隆壽、山下 健一郎、嶋村 剛、武富 紹信

《第113回日本外科学会定期学術集会、福岡、2013.4.11》

ラット冷保存肝における再灌流時水素ガス投与の効果 (Young Researcher Award & Traveler's Grantセッション)

島田 慎吾、深井 原、山下 健一郎、鈴木 友己、嶋村 剛、尾崎 倫孝、神山 俊哉、藤堂 省

低温下でエネルギー産生を賦活化させる新しい方法～有効性と普遍性

深井 原、若山 顕治、山下 健一郎、廣方 玄太郎、谷口 雅彦、古川 博之、島田 慎吾、小倉 正臣、鈴木 友己、嶋村 剛、尾崎 倫孝、神山 俊哉、藤堂 省

■ 研究グループ紹介

腫瘍(肝)グループ

大学院生紹介：



大畑 多嘉宣 (H18卒)



相山 健 (H19卒)



水上 達三 (H19卒)

肝細胞癌、胆管癌、膵癌が主な研究対象です。

肝細胞癌

肝細胞癌切除後の予後向上のためには、外科的切除後に起きる多中心性再発の抑制、肝内転移の抑制のほか、転移巣が形成されたあとの腫瘍増殖を抑制することが重要です。肝内転移再発は原発巣の悪性度に依存し、AFP、AFPL3、PIVKA IIが悪性度マーカーとされています。しかし、これらのマーカーでは肝内転移再発を予測する能力が十分とは言えません。現在は脂肪酸結合タンパクの1つであるFABP5、およびAPC結合タンパクの1つであるEB-1について、原発巣の免疫組織化学染色による発現強度と予後・再発との相関性を確認、さらに肝癌細胞株を用い各因子のタンパク発現レベルと浸潤・増殖能といった悪性度との相関性を確認した後、新たな分子標的治療法の開発を行うことを目指しています。

膵 癌

癌幹細胞形質変化を標的とした革新的膵癌治療法の開発癌細胞における様々な分子生物学的変化の解明や分子標的治療薬の実用化、診断技術の向上にもかかわらず、膵癌はいまだに最も予後不良な癌の一つです。本研究では治療抵抗性の原因として、癌の多様性の根源となる癌幹細胞に着目し、実際に術前放射線化学療法(NACRT)を施行し切除し得た膵癌臨床検体を用いて、免疫組織化学的に術前治療による癌幹細胞形質変化を検討した後、癌幹細胞を標的とした治療法の開発を行うことを目指しています。

今後の抱負

大畑：現在のところ、肝細胞癌初回切除例におけるFABP5の免疫組織化学染色において、FABP5強染色群で5年累積生存・無再発生存いずれにおいても有意に不良であることを確認しております。また、肝癌細胞株においても、FABP5高発現株に対しRNAi法を用い増殖能・浸潤能の差を検討したところ、RNAi群がコントロール群と比較して増殖能、浸潤能いずれにおいても有意な低下を認めました。今後はFABP5が転移・浸潤を引き起こすメカニズムを分子レベルで解明していきたいと思っています。

相山：今年度から研究を始めたばかりなので想定していた結果はまだ出せておらず、学会発表などの業績もありませんが、指導医や先輩方の導きで最近ようやく研究に関する知識が少しずつ増え、自分の扱っているタンパクに関連する論文だけでなく、あまり関わりのない論文についても行間を読むことができるようになってきた印象です。来年度は身につけた知識を活かし、早く学会で発表できるような結果を出せるよう頑張りたいと思います。

水上：当研究では、まずNACRTを施行し切除し得た膵癌症例における、癌幹細胞の多様性を表面マーカーにて分類し、それらの比率等を検討し無再発・再発症例における形質の違いを明らかにし、その結果を参考にして、ヒト膵癌細胞株から各表面マーカーを用いて癌幹細胞を分離し、免疫不全マウスを用いた皮下移植モデルを作成する予定です。最終的には癌幹細胞を標的とした治療法の開発を行うことを目的としておりますが、その一環として他癌種の報告で癌幹細胞の抗癌剤感受性や放射線感受性増強作用を有する2型糖尿病の経口治療薬であるmetforminを用い、膵癌における抗癌剤gemcitabineおよび放射線療法との併用効果の検討を行う予定です。

2013年業績（学会発表）

《第113回日本外科学会定期学術集会(2013/4/11-13 福岡)》
肝細胞癌における予後再発因子としてのFABP5発現の検討
大畑 多嘉宣、横尾 英樹、柿坂 達彦、敦賀 陽介、蒲池 浩文、
神山 俊哉、武富 紹信

《第68回日本消化器外科学会総会（2013/7/17-19 宮崎）》
肝細胞癌における予後再発因子としてのFABP5の有用性
大畑 多嘉宣、横尾 英樹、柿坂 達彦、敦賀 陽介、蒲池 浩文、
神山 俊哉、武富 紹信

《第24回日本消化器癌発生学会総会（2013/9/5-6 金沢）》
肝細胞癌における予後再発因子としてのFABP5の有用性につ
いて
大畑 多嘉宣、横尾 英樹、柿坂 達彦、若山 顕治、敦賀 陽介、
蒲池 浩文、神山 俊哉、武富 紹信

《第72回日本癌学会学術総会（2013/10/3-5 横浜）》
肝細胞癌における予後再発因子としてのFABP5の有用性
大畑 多嘉宣、横尾 英樹、若山 顕二、柿坂 達彦、敦賀 陽介、
蒲池 浩文、神山 俊哉、武富 紹信

《AASLD Liver Meeting 2013（10/31-11/5/2013, Washington D.C.）》
Utility of Fatty Acid Binding Protein 5 expression as
a recurrence and prognostic factor in hepatocellular
carcinoma.
Ohata T, Yokoo H, Kamiyama T, Wakayama K, Orimo T,
Kakisaka T, Tsuruga Y, Kamachi H, Taketomi A

■ 研究グループ紹介

腫瘍(消化管)グループ

1. 大学院生紹介



山田 健司



大野 陽介



小丹枝 裕二

2. 現況報告

現在、消化管Gでは山田健司(2005年卒)、小丹枝裕二(2006年卒)、大野陽介(2006年卒)の3名が大学院生としてリサーチを行っております。

山田健司は、北海道大学大学院歯学研究科、口腔病態学講座血管生物学教室に所属し腫瘍血管の異常性を標的とした癌治療開発を目的とした研究を行っております。腫瘍血管内皮細胞に高発現するCXCR7の機能解析を行い、臨床応用への可能性を探索しております。小丹枝裕二は、北海道大学大学院医学研究科病理学講座腫瘍病理学分野に所属し、近年の癌治療の進歩による生存期間の延長の結果、増加しつつある消化器癌の脳転移の責任遺伝子の同定、およびそれらを標的とした治療法の開発を目的とした研究をおこなっています。消化器癌の細胞株を使用しマウス脳転移モデルを作成、オリジナルの細胞株と脳転移巣を形成した細胞との違いを次世代シーケンサー、PCR arrayを用いて遺伝子発現の違いを網羅的に解析することを目指しています。

大野陽介は北海道大学遺伝子病制御研究所免疫制御分野に

おいて、腫瘍内に存在するミエロイド系細胞による免疫抑制機構の解明と、その制御によるがん免疫治療への応用を目指して研究を行っております。マウスの担癌モデルを中心としたミエロイド系細胞の腫瘍増殖に関わる役割がヒトにおいても相同性があるかを確認するために、大腸癌、胃癌の手術検体の一部よりミエロイド系細胞を単離し解析しております。

それぞれ、癌の基礎研究を通して、それぞれの研究結果がどのように臨床へと応用できるかという視点を大事に研究に取り組んでおります。

3. 今後の発展性

今年度は、各講座において研究を遂行し外科学会、癌学会を始めとしたいくつかの学会にてその研究成果を報告してきました。山田は、CXCR7のin vitroでの解析をすすめ、現在はその内容を論文として投稿するための準備を行っております。また、臨床応用へのさらなる可能性を模索するために、マウスを用いたin vivoにおけるCXCR7を標的とした癌治療モデルの作成と、その治療効果の解析を目指しています。小丹枝は、マウス脳転移モデル作成の手技を確立させており、脳転移を形成した癌細胞から高転移株の作成を現在行っております。この高転移株から責任遺伝子の探索とその機能解析を行うことにより、分子標的治療や予後予測などのBiomarkerとしての臨床応用への可能性を探索していく予定であります。

大野は、腫瘍内ミエロイド系細胞に対するIL6の役割を中心に研究をすすめ、IL6が樹状細胞の機能を負に制御するというマウスで得られていた知見がヒトでも再現されること、その効果が実際の大腸癌微小環境下においても認められることを確認しました。今年度は、この内容を論文として投稿することを目標とするとともに、手術検体を用いた解析を継続することでさらなる知見の蓄積を目指していく予定である。

癌治療への応用を目指した基礎研究を、それぞれの視点から行っており、ここで得られた知見を学会発表、論文投稿の形で積極的に発信していけるように日々努力していきたいと考えております。

4. 2013年業績(学会発表)

《第8回Needlescopic Surgery Meeting (2013/2/16 仙台)》

当科における細径鉗子を使用した単孔式腹腔鏡下虫垂切除の経験

小丹枝 裕二、小池 雅彦、正司 裕隆、三野 和宏、片山 知也、

桑原 昭博、今 裕二、田村 元、赤坂 嘉宣

《第113回日本外科学会定期学術集会、福岡、2013/4/11-13》

革新的癌ワクチンH/K-HELPロングペプチドによる癌特異的T細胞免疫応答の増強機構

大野 陽介、大竹 淳也、高橋 典彦、北村 秀光、西村 孝司、武富 紹信

《第102回日本病理学会、2013/6/6-8、札幌》

腫瘍血管内皮におけるCXCR7の機能解

山田 健司、間石 奈湖、大賀 則孝、秋山 廣輔、川本 泰輔、Alam Mohammad Towfik、大村 瞳、鳥居 ちさほ、高橋 典彦、樋田 泰浩、進藤 正信、武富 紹信、樋田 京子

《第21回日本血管生物医学会学術集会、大阪、2013/9/26-28》

腫瘍血管内皮細胞におけるCXCR7の機能解析

山田 健司、間石 奈湖、大賀 則孝、秋山 廣輔、樋田 泰浩、川本 泰輔、Alam Mohammad Towfik、高橋 典彦、神山 俊哉、武富 紹信、樋田 京子

《第72回日本癌学会学術総会（2013/10/3-5 横浜）》

The role of a chemokine receptor CXCR7 in tumor endothelial cells

Yamada K, Maishi N, Ohga N, Akiyama K, Kawamoto T, Alam MT, Shindoh M, Takahashi N, Kamiyama T, Hida Y, Taketomi A, Hida K

■ 研究グループ紹介

小児グループ

研究テーマと概要

＝肝芽腫におけるDNAメチル化異常の関与＝

私たちは主にDNAの異常メチル化と肝芽腫との関連について研究しています。遺伝子はプロモーター領域がメチル化すると発現が不活化されます。従って、たとえば癌抑制遺伝子のプロモーター領域が異常にメチル化されてしまった場合、その機能を発現することができないために細胞は癌化の方向へ導かれてしまいます。

また肝芽腫は3大小児悪性固形腫瘍の一つですが、100万人に1-1.5人の発症と言われており、希少がんに分類されます。その5年生存率は70%と比較的良好であるものの、予後予測可能な分子マーカーは十分なものがないのが現状です。

上記背景があり、現在の研究に至っておりますが、この研究テーマは本多先生が埼玉県立がんセンター研究所で行っていたもので、これを引き続き北大で行っています。日本小児肝癌スタディーグループからの検体の供与や、札幌医科大学分子生物学講座などの様々なバックアップのもと研究をさせていただいております。

今年度は肝芽腫における癌抑制遺伝子のDNAメチル化による予後予測因子を探求しています。具体的には、次世代シーケンサー・発現アレイ等を用いての候補遺伝子の抽出、臨床検体におけるDNAメチル化率の計測・mRNA/たんぱく質の発現解析、臨床像との関連の検討などを行っています。また、並行して強制発現株の作成およびin vitro解析を行っています。

大学院生紹介



湊 雅嗣(みなと まさし)
平成18年卒

今年度の満足度：小児グループ初の大学院生として、今年度より研究を開始いたしました。開始にあたり、中期的目標として（大学院在学中の目標）は、①まず無事学位を頂けるような研究を遂げること、②小児グループ

としての研究システム基盤を完成させること、③後代へ研究手法を指導できるようになること、以上を目標として研究に勤んでおります。短期的目標としては、研究に関する言語・手技・手法を理解するという低めの目標を掲げ、これは概ね達成できたと思っております（満足度90%）。

今後の抱負：大きくはやはり小児グループとしての研究システムを構築すること。個別にはin vivo解析の開始、新たな研究分野への応用、および学会での研究者との名刺交換10回を今年度の短期目標として考えています。

今後の方向性：これまでの予後予測因子としてのDNAメチル化異常の探索と検証に加え、新たに肝芽腫の化学療法耐性メカニズムを研究テーマとして一部開始いたしました。（詳細はまだ公表できません）。

2013年業績

臨床小児グループ参照

2013年教室活動紹介

〈留学生〉

国内留学

廣方 玄太郎

卒業年：平成14年（2002年）

留学先：国立がん研究センター東病院 上腹部外科 がん専門修練医

近況報告

平成14年入局の廣方玄太郎です。現在、千葉県柏市にある国立がん研究センター東病院にある上腹部外科にてがん専門修練医として臨床に従事しております。

リサーチを3年間した後、帯広協会病院にて及能先生、阿部先生のもと臨床を2年間させて頂いているうちに、肝胆膵外科領域に関心が出てきました。ちょうど、その頃、帯広協会病院にがんセンター東病院で働いておられた肝胆膵内科の先生がおられたので、色々話を伺い、症例の豊富ながんセンター東病院で勉強をしたいという思いが強くなり武富教授のご許可頂き国内留学させて頂きました。

国立がん研究センター東病院（以下、東病院）の上腹部外科は、肝胆膵外科と胃外科の両方の科が一つの科として機能している国内でも稀な形態をとっており、肝胆膵外科の手術も学べる、一方で胃の手術も学べ非常に良い勉強をさせて頂いております。肝胆膵外科は、膵頭十二指腸切除（今年度は60例）を始め肝胆膵外科の症例が豊富にあり、また開腹のみならず腹腔鏡下の肝切除も積極的にこなされており、非常に刺激を受けております。また、胃外科はより積極的に腹腔鏡手術を導入しており、腹腔鏡手術の手法につき熱い指導を受ける毎日です。残念ながら2014年度からは胃外科と肝胆膵外科が分離することは決定しているため、今のがん専門修練医が両方の科を学ぶ最後の学年となってしまいました。両方を学ぶ貴重な経験を得ることが出来、非常に幸運だと感じています。役職は、がん専門修練医となっておりますが、実質的にはレジデントと変わりなく、他のレジデントとともに朝から手術患者のルート確保や、手術場での尿カテ挿入、手術機械のセッティングなど、10年前の大学病院での生活を思い出し、久しぶりのレジデント生活に当初は若干戸惑いも感じましたが、今はもうそれに慣れ下仕事しつつ各々の手術を学んでおります。

東病院は、柏の葉といって柏市の外れにありますが、幸いにしてつくばエクスプレス沿線のため秋葉原まで30分で到着

出来ます。平日は、朝7時の病棟業務から夜遅くまで仕事があり、家に帰るのはただ寝るためという生活ですが、がんセンターのため臨時手術等で休日に呼ばれることはあまりなく当番でなければある程度遠出も出来るため、土日はつくばエクスプレスを利用し、家族でスカイツリーを観に行ったり、浅草に食事にいったりと都内の生活を楽しんでおります。また、趣味のラグビーは今年は封印しているのですが、その代わりにラグビーの聖地秩父宮球技場まで、2回乗り継ぎで着きますので、ラグビー日本代表の試合には出来るだけ駆けつけるようにしており、昨年は歴史的なWales戦の勝利や、All blacksの来日など観戦ライブを満喫しております。

当初、東病院では、最初の1年は臨床、次の1年は研究と2年の予定でしたが、今年1年こちらで仕事をするうちに自分の症例のビジョンがおぼろげながら見えて参りましたので、こちらを1年で終え再び北海道に戻り外科医として研鑽を積む予定にしております。東病院で得た知識・技術を教室に貢献出来るように頑張りたいと思います。

2013年の業績

なし（2014年度に消化器外科学会、肝胆膵外科学会にて発表予定）



日本代表の試合のときに、元日本代表の大畑大介氏（右）と一緒に記念撮影

宮城 久之

卒業年：平成15年（2003年）

留学先：神奈川県立こども医療センター外科

近況報告

平成23年4月より、武富教授、岡田先生、本多先生をはじめ教室の先生方に御迷惑をおかけし、神奈川県立こども医

療センター外科へ国内留学させて頂いております。当センターは国内有数の手術症例数を持つ小児に特化した病院で、シニアレジデントとして全国から様々な科の医師が各科に勉強に来ています。横浜市南区にあり、京急線「弘明寺駅」も

しくはJR線「東戸塚駅」からタクシーで10分程度。小児心臓血管外科、小児循環器内科、小児内分泌・代謝科、小児整形外科、小児脳神経外科、小児形成外科、小児耳鼻咽喉科、…などがあり、「小児〇〇」は当たり前なので「小児外科」ではなく「外科（一般外科）」と称されます。病院は1970年に発足し、病床数419床、医師92名、外科の手術件数は、912例（内、鼠径ヘルニア308例）（2010年度）です。現在、指導医4名、研修医3名の計7名体制で、1週間の内、月、水、金が手術日、火、木が外来日ですが、臨時手術も平行して行われているような状況です。じっくり研鑽を積んで参ります。

■ 2013年の業績

《第59回神奈川小児腫瘍研究会(2013.09)横浜、「奨励賞」受賞》
門脈腫瘍栓に伴いcavernous transformationを来した肝芽腫に対する肝切除の工夫

宮城 久之（神奈川県立こども医療センター 外科）、北河 徳彦、新開 真人、武 浩志、望月 響子、臼井 秀仁、浅野 史雄、田中 水緒、田中 祐吉

《第48回日本小児外科学会関東甲信越地方会(2013.10)水戸》
年長児に発症した腸回転異常を伴わない腸捻転の検討
宮城 久之（神奈川県立こども医療センター 外科）、新開 真人、武 浩志、北河 徳彦、望月 響子、臼井 秀仁、浅野 史雄

《第55回日本小児血液・がん学会学術集会(2013.11)福岡》
Denys-Drash症候群に伴う両側Wilms腫瘍に対する治療戦略
宮城 久之（神奈川県立こども医療センター 外科）、北河 徳彦、新開 真人、武 浩志、望月 響子、臼井 秀仁、浅野 史雄、高橋 英彦、吉田 美和、後藤 裕明、田中 祐吉



新生児手術風景。左：宮城、右：望月先生

野口 慶太

卒業年：2003年

留学先：国立がん研究センター 東病院

■ 近況報告

現在、国立がん研究センター 東病院に留学させていただいている野口慶太と申します。北海道の医師が不足している中で留学させていただき皆様には大変感謝しております。私は、大腸外科メインで勉強させていただくために留学させていただいているのですが、食道外科、呼吸器外科、胃外科、肝胆膵外科を勉強する機会



もいただき大変貴重な経験をさせていただいております。特にそれぞれの科に内視鏡手術において日本を代表する素晴らしい術者がいて、基本的には左手の使い方、用いるdeviceの選択、術野の展開、リンパ節廓清の考え方などを日々勉強しております。なかなか術者をできる症例は少ないのですが、それはどの施設でも同じと考えますので1例1例を大切にすることで1つでも多くの事を学ぼうと心がけております。個人

の最低限の目標としては大腸外科手術での内視鏡技術認定医取得と思っております。また、論文も数編は作成する予定であります。論文に関しましては最近少なまけ気味ですので、もう一度気合いをいれて作成します。大変貴重は経験をさせていただいているのできちんと北海道の医療に還元できたらと考えております。また、北海道で医療する時はよろしくお願いたします。

■ 2013年の業績

《第78回 大腸癌研究会、東京、一般演題、2013/1/18》
細径鉗子を用いた腹腔鏡下ISRの妥当性

野口 慶太、伊藤雅昭、西澤雄介、小林昭広、杉藤正典、斎藤 典男

《第113回日本外科学会定期学術集会、一般演題、福岡、2013/4/11-13》

高齢者のISR術後の肛門機能の検討

野口 慶太、斎藤典男、伊藤雅昭、西澤雄介、小林昭広、杉藤 正典

《第68回日本消化器外科学会総会、一般演題、宮崎、2013/7/17》

ISR術後の長期排便機能の危険因子の検討

野口 慶太、斎藤典男、伊藤雅昭、西澤雄介、小林昭広、杉藤正典

海外留学

大浦 哲

卒業年：2001年

留学先：Massachusetts General Hospital, Surgery Transplant Center, Harvard Medical School

近況報告

同門会の皆様、私は2001年卒業の大浦哲です。2012年11月からBostonにおいてMassachusetts General Hospital, Surgery, Transplant Center, Harvard Medical School 所属のResearch Fellowとして勤務しております。私の直属のBossであるDr. Kawaiから与えられたテーマは『膵島移植の成績向上』、『脳死移植患者への免疫寛容の誘導』の2点です。これを実現する為に日々カニクイザルと戯れて、人間・サルを検体を解析しております。臨床の時と同じように早朝からサル回診をして藤堂方式で働く生活していたら、最近まで奇妙な日本人と思われました。しかし1年経ち北海道大学泌尿器科から同世代の同僚が参戦して同じような生活してくれるので、現時点では『こういう種類の日本人達。』と認識してくれるようになりました。テーマのハードルが高くて中々結果の出ないきつい一年でしたが、北大第一外科と一緒に臨床・研究に励みサル膵島移植のプロである同期の渡辺正明先生 (Karolinska Institute) に貴重なアドバイスを貰って少しずつ結果が出るようになりました。持つべきものは優秀な同期であると再確認しました。

生活面では、開墾して種まきの時期であったおかげで(?)、アメリカの4大スポーツ(野球・バスケットボール・アメリカンフットボール・アイスホッケー)が揃っており結構強いものにも拘らず(野球はチャンピオン、ボストン牛角で上原選

手に会いました)、現時点では観戦に行けておりません。今年の目標として其々最低一試合ずつは少なくとも観戦しようと思います。ただ郊外での生活で念願の自宅でBBQが出来たのは感激でした。もしアメリカ東岸にいらっしゃる事が有れば連絡を頂けると幸いです。季節によってお勧めのレストランか自宅でのBBQに招待させていただきます。

最後に、外科医不足の中、留学に行かせて頂ける自分の立場を自覚し、背中を押して頂いた藤堂先生・山下先生をはじめ、お世話になっている同門の先生方に深く感謝しております。

2013年の業績

第49回日本移植学会移植学会賞(2013年9月7日京都)



渡辺 正明

卒業年：2001年

留学先：カロリンスカ研究所移植外科学部門

近況報告

Sweden、Stockholmに来て、1年と数ヶ月が過ぎました。少しずつではありますが、仕事の幅を広げています。カロリンスカ研究所移植外科学部門は、欧州屈指の臨床移植外科部門であると同時に、移植医療の教育、及び研究の中心的施設です。年間約80例の肝臓移植、約100例の腎移植、約20例の

膵臓移植をはじめ、その他、膵島移植や肝細胞移植を実施しています。世界で初めてFAPに対する肝移植を実施し、また、肝細胞移植も世界に先駆けて施行するなど、先進的な移植医療を行っています。臨床では、上記移植手術、ドナー手術へ参加するとともに、周術期管理を行っています。基礎研究では、細胞移植(膵島移植、肝細胞移植、幹細胞移植)に関する研究に従事しています。カロリンスカ研究所内の幹細胞移植部

門、免疫学部門と肝細胞移植研究部門との共同研究により新たな再生医療を構築する研究を進めています。膵島移植及び、先天性代謝疾患や急性肝不全に対する肝細胞移植は、既に臨床応用され、多くの移植が施行されていますが、これらに共通する問題点として、移植された細胞が移植直後に傷害を受け、生着率が非常に低いことが挙げられます。これら“early graft loss”の克服は、移植成績向上、その後のgraft lossの制御には非常に重要です。これまでの膵島移植におけるNF- κ Bの制御の重要性をさらに発展し、肝細胞移植等その他の細胞移植にもこの方法論が応用できるという仮説のもと、研究を進めています。また細胞を臓器から単離精製過程で影響を受ける細胞基底膜に注目し、Lamininの有用性やspheroid hepatocyteの可能性も検証しています。

言葉の壁や文化の差異に戸惑いながらも、たくさんの方々に支えていただいています。あっという間に毎日が過ぎてゆきますが、いただいた機会を十分に活かせるよう目の前の仕事に一生懸命取り組んでゆこうと思っています。

■ 2013年の業績

Watanabe M, Yamashita K, Suzuki T, Kamachi H, Kuraya D, Koshizuka Y, Ogura M, Yoshida T, Aoyagi T, Fukumori D, Shimamura T, Okimura K, Maeta K, Miura T, Sakai F and Todo S

ASKP1240, a Fully Human Anti-CD40 Monoclonal Antibody, Prolongs Pancreatic Islet Allograft Survival in Nonhuman Primates

American Journal of Transplantation. 2013 Aug;13(8):1976-88.

Watanabe M, Yamashita K, Kamachi H, Kuraya D, Koshizuka Y, Shibasaki S, Asahi Y, Ono H, Emoto S, Ogura M, Yoshida T, Ozaki M, Umezawa K, Matsushita M and Todo S

The efficacy of DHMEQ, a NF- κ B inhibitor, in islet transplantation: II. Induction DHMEQ treatment ameliorates subsequent allo-immune responses, and permits a long-term islet allograft acceptance Transplantation. 2013 Sep 15;96(5):454-62

Kuraya D, Watanabe M, Koshizuka Y, Ogura M, Yoshida T, Asahi Y, Kamachi H, Nakamura T, Harashima H, Ozaki M, Umezawa K, Matsushita M, Yamashita K and Todo S

The efficacy of DHMEQ, a NF- κ B inhibitor, in islet transplantation: I. HMGB1 suppression by DHMEQ prevents early islet graft damage Transplantation. 2013 Sep 15;96(5):445-53



財津 雅昭

卒業年：2003年

留学先：Transplant Research Immunology Group (TRIG), Nuffield Department of Surgical Science (NDS), University of Oxford

■ 近況報告



お久しぶりです。早いもので留学して2年が過ぎました。私自信の力ではこのような貴重な体験をさせていただくことはできなかったため、今までご指導していただいた先生や助けていただいた先生にこの場を借りてお礼申し上げます。

さて、私のいるオックス

フォードはロンドンから車で1時間のところにあるsmall

townです。Collegeあちこちにあり、歴史を感じる雰囲気のある街並みです。家賃が高いせいか、治安は日本とほぼ変わりません。町の中心から少し離れた高台のJohn Radcliffe Hospitalがあり、その敷地内にTRIGラボがあります。TRIGにはSenior Researcher；1人、PhD；8人、PhD student；5人+ α の大所帯で研究を行っています。+ α とは、大学生やレジデントが数ヶ月単位でラボのノウハウを習得するために研修しにやってきます。最近、近所のラボが閉鎖していく傍ら不自由なく研究できる環境に、Prof. Kathrynの力をひしひと感じています。基本的な日課はJournal ClubとPresentationが週に1度行われ、1時間を目標にミーティングを行います。

私の研究テーマは下記の業績のごとく副刺激を刺激する

ことなく遮断するCD28アンタゴニスト抗体のpre-clinical studyを行っています。少し理解のある方だと何を今更そのような実験をと思われるかもしれませんが、実はCD28副刺激経路をselectiveにかつ刺激を加えずに遮断する抗体は今まで存在していませんでした。また、反対のCD28 super-agonist抗体 (TGN1412) の臨床試験が悲惨な結果を生み出したことから非常にハードルの高いテーマになっていると思います。Pre-clinical studyと書きましたが、大動物を使用するのではなくHumanised mouseを用いて行っています。臨床検体を用いて実験しているのになかなか思うようには進まない根気のいる実験になっています。傍らで、Transplant arteriosclerosisの治療法の確立を目指してマウスで実験を行っています。あとはmicro surgeryが必要なヒトのお手伝いをしながら実験に関わっています。

最後に留学についての私見ですが、もちろん大変なことは色々ありますが、国内にいるだけでは間違いなく得られないものがあると思います。もし、機会があり悩んでいるのであれば、ご相談いただければ自分の経験を伝えることはできます。お気軽にご連絡ください。

■ 2013年の業績

(学会)

《International Basic Science, Mentee-Mentor Awards, 7-9 Nov, ESOT/TTS BSM2013 Meeting @ Paris》

Prolongation of human skin allograft survival with FR104, an antagonistic anti-CD28 monovalent Fab antibody

Zaitzu M, Fadi I, Joanna H, Kate M, Bernard V, Wood K.

(論文)

Wood KJ, Zaitzu M, Goto R.

Cell mediated rejection.

Methods Mol Biol. 2013

Goto R, You S, Zaitzu M, Chatenoud L, Wood KJ.

Delayed anti-CD3 therapy results in depletion of alloreactive T cells and the dominance of Foxp3+ CD4+ raft infiltrating cells

Am J Transplant 2013

川村 典生

卒業年：2003年

留学先：Cleveland Clinic

■ 近況報告

2012年7月より、アメリカのオハイオ州にあるCleveland Clinicという病院で肝移植・肝臓外科に関する臨床留学をさせて頂いております。私のポジションはClinical fellowといまして、一般外科の研修を終えた者が進む専門医養成コースです。肝移植のClinical fellowは、肝移植、脳死ドナーの手術 (procurementといいますが)、肝切除がメインの仕事です。Cleveland Clinicでは年間約130-150例の肝移植が行われております。これに加え、年間約80例程度の肝切除、それにprocurementが加わり、これを3人のclinical fellowでカバーします。肝移植のclinical fellowは2年間のコースなのですが、1年目はprocurementと肝移植の第一または第二助手、2年目に進むと自分が術者として執刀が始まります。現時点(2年目開始から6カ月)では、自分で執刀した症例は30例弱で、標準的な肝移植は何とかなりそうですが、複雑な血行再建を必要とする症例や重症患者の執刀などはまだまだ、と言ったところでしょうか。日本とは違いほとんどの症例が脳死肝移植なので、手術時間は平均7~8時間と生体肝移植に比べると短いのですが、その代わり一度脳死ドナーがでる

と真夜中や早朝に手術をすることが多いので、ライフスタイルはとても不規則です。真夜中に肝移植をし、それが終わってから入れ替えて肝切除、という状況もよくあります。それに加え勿論回診・外来・カンファレンスもあり、とても忙しいですが、日々肝移植・肝臓外科に関することに集中してトレーニングを受けられるので充実した毎日です。

私の留学先であるCleveland Clinicを少し御紹介させて頂きますと、Cleveland Clinicは全米屈指の大病院の一つで、毎年US news & world reportの病院ランキングでは全米2~4位にランクされています。特に心臓手術が有名で、年間4000例の開心術が行われております。その他、世界初の輸血・血液透析・開心術・心臓カテーテル等々、様々な革新的な試みを成功させてきた病院でもあります。肝移植も症例数・生存率共に全米トップクラスの成績をキープしています。機会がございましたら帰国した後に、また詳しく御報告させて頂ければ、と思っております。

最後になりましたが、このような素晴らしい環境に留学できたのも、藤堂前教授、旭川医大古川教授、移植医療部嶋村準教授の御尽力と、快く送り出してくださった武富教授のおかげです。この場をお借りして御礼申し上げます。

2013年教室活動紹介

〈2013年入局後期研修医〉



大平 将史

今年度は、大学病院というどちらかというと特殊な環境で、よりacademicな内容が勉強できたと思います。来年度からは、市中病院なので、より一般的な診察能力や手術手技を身につけたいと思います。今現在で、興味のある専門分野はまだ決まってません。今後ゆっくりと考えたいと思っています。



加藤 紘一

今年度は大学勤務ということで緊張して4月を迎えましたが、大学の先生方がやさしく指導していただき楽しく勤務できました。肝切除や肝移植・膵臓移植など市中病院でみることができない患者をみることができ、大変ではありましたが大変勉強になりました。来年度は市中病院にて研修するにあたり、多くの手術を経験・執刀することになるとと思いますが、毎症例で改善点・良かった点を検討し次につながるようになっていきたいです。今後ですが、最近大学で始めたロボット手術や腹腔鏡手術といった低侵襲手術に興味があります。



金沢 亮

学生、初期研修医でお世話になり、大きく変化したわけではないため、期待通りの研修でした。消化管グループでの研修がなかったのは残念でした。来年度の抱負として、帯広協会病院は手術症例が豊富であり、appe、ヘルニア、乳癌、胆摘に関する技術をしっかり身につけたいと思います。胃・腸管も術者として経験出来たらしたいです。どこの分野も魅力があり一つに絞れない状態です。経験を積んだ後に今後の専門分野をゆっくり考えたいです。



沢田 堯史

他大学出身なのでどんな医局なのかと期待と不安で働き始めましたが、良い仲間と上司に出会えて良かったと思っています。大学以外では見ることのない疾患や手術を学ぶことも出来て非常に勉強になりました。また、ICUでは移植患者の周術期管理を経験できたこともとても勉強になりました。来年度は北海道社会保険病院で働かせて頂く予定です。なんでもやるつもりで頑張りたいと思います。専門分野としては、肝胆膵、消化管、移植いずれも面白い分野だと思っていますので、今後いろいろと経験した上で考えようと思っています。今年一年お世話になりました。ありがとうございました。



渋谷 一陽

今年は3年間いた病院を出て、はじめて別の病院に来たことで緊張もありましたが、いろいろな先生や同期に出会えて非常に有意義でした。次は今までの経験を生かして、手術も含めて外科医としてのスキルアップをできればと思います。今後は肝胆膵に興味があるので知識を深めていきたいと思っています。



正司 裕隆

個人的には大学ではKKRで出会わなかった高難度手術（特に肝胆膵の手術）をみる機会が得られたことが一番大きかったと思います。いままで出会わなかったため肝胆膵領域にあまり興味がなかったのですが、先生たちの手術や周術期管理を勉強させていただいて純粋にこの分野をもっと勉強してみたいと感じました。また、地域の病院では日常業務に追われてルーチンワークですらおざなり（やっつけ仕事）になりがちでしたが、大学では新たな取り組み（小児外科領域ではLPEC、消化管領域ではダヴィンチetc）を精力的に行ってらっしゃる姿をみて、自分も現状に満足してはいけなと感じました。将来的には消化管にすすみたいと考えていますが、各領域をローテーションさせてもらったことで今後地域病院にもどったときも興味をもって各症例をみることができそうな気がします。



谷 道夫

プレゼンをいろんな先生に見てもらいいろいろ意見されたのは自分のためになったと感じます。また内視鏡での基礎のトレーニングは時間をかけると上達するのが自分でわかって楽しかったです。病棟では一番下の立場であったせいか、責任感が足りなかったなと感じます。来年は実際に手術をさせてもらう機会が増えると思うので楽しみです。経験をじぶんのものとしてきちんと積み上げられるように一例一例を大切にしたいです。現時点ではまずはどの病院でも一人前の外科医として働くことが目標なので消化器分野全体に興味を感じています。



深作 慶友

市中病院で6年間、初期・後期研修をしてきた自分にとっては、初めての大学病院での勤務は不安と期待の入り混じった状態でのスタートでした。研修が開始すると、自分の足りなかった部分を実感し、今までとは違った視点で病気や患者さんのことを考える時間ができたように感じます。実際、病棟勤務だけでなく、さまざまな手術やプレゼンテーション、勉強の仕方などを学ぶことができた1年であったと思います。来年からは、研究という今までとまったく違ったことをすることになり、これまでの経験や、この1年で学ばせていただいたことを十分に生かせるようにしたいです。現在は、消化管手術や肝・胆・膵手術に興味があり、今後も研鑽をつめればよいと思います。



松井 博紀

大学は下働きばかりで、楽しくなく、給料も安いと聞いていましたが、実際は病棟業務もやりやすく、手術も術者としてそれなりにやらせていただき、さらに給料も想像以上によく、満足できる一年間でした。また、アニマルラボ、ウェットラボ、学会参加などの教育面でも非常に熱心であり、勉強になった一年間だったと思います。来年度は、特に開腹手術を多く行い、基本的な手術手技を確実に身につけて行きたいです。消化管の腹腔鏡下手術に興味があるので、中標津と場所は遠いですが、札幌や本州で勉強する機会があったら積極的に参加していきたいです。



宮岡 陽一

多くの同期と知り合え、また腹腔鏡下での手術、肝臓や膵臓の移植、肝の葉切など前の病院では経験できなかった多くの事を学ぶ事が出来て本当に勉強になりました。来年度は地域の中核病院で働くことになるので、その一員として精一杯頑張りたいのと、初期研修医と行動を共にする機会が増えると思うので、指導しつつ自分も一緒に勉強していきたいです。一般外科、特に消化管についてもう少し研鑽を積んでいきたいと考えています。

2013年教室活動紹介

〈秘書・クラーク〉

2013年教室紹介 / 秘書・クラーク

■ 医局秘書

川口 菜穂子

教授関連業務を担当しています。宜しくお願いします。

中澤 有紀

担当業務：研究費に関する申請・管理業務、教室費の管理業務
どうぞよろしくお願いたします。

塩田 優貴子

担当業務は関連病院への医師派遣関連、先生方の労務管理関連、北海道外科学会、小児外科関連です。宜しくお願い致します。

小原 美都

担当業務：医局長秘書、同門会担当、学部・大学院学生関連業務、業績関連業務等
平成25年12月より医局秘書として勤務させていただいております。まだまだ至らぬ点はございますが、精一杯頑張りますのでどうぞ宜しくお願い致します。

■ 実験助手

三好 早香

Tissue bank 検体の処理と管理、vitro実験のお手伝いをさせていただきます。皆様のお役にたてるよう、日々勉強中です。どうぞよろしくお願いたします。

五十嵐 瑠美

移植患者さんの免疫モニタリングアッセイ、実験のお手伝いをさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

小林 希

主にvitro実験のサポートを担当しております。修士号を取らせていただいた御恩をお返ししている真っ最中です。どうぞよろしくお願いたします。

堀米 正敏

動物実験などを手伝っています。只今、実験棟改修工事中ですが完成後どのような実験が始まるのか楽しみです。宜しくお願いします。

■ 病棟クラーク

鈴木 愛

病棟での様々な仕事をサポートいたしております。よろしくお願いたします。

2013年の年表・年間行事

2013年の年表・年間行事

| 月 | 医局行事 | 学会 | 研究会・特別講演・セミナーなど |
|------------|---|---|---|
| 1月 | | 1.18 第78回大腸癌研究会 | 1.22 第2回消化器外科I・モーニングセミナー |
| 2月 | 2.2 消化器外科I・ウェットラボ開催 | 2.24 第226回日本小児科学会北海道地方会 | 2.9 第1回札幌VTRカンファレンス 2.22 第1回北海道小児外科フォーラム |
| 3月 | 3.2 第7回医局対抗バスケットボール大会 3.19-20 第2回北海道アドバンスセミナー 3.29 北大病院に手術支援ロボット (da Vinci Si-Surgical System) が設置 (人事異動) | 3.9 第88回日本小児外科学会北海道地方会 | |
| 4月 | (人事異動) 後期研修医10名が入局 4.17 7-2病棟歓迎会 | 4.11-13 第113回日本外科学会総会 4.17-20 SAGES2013 4.19-21 第29回日本医工学治療学会 | 4.16 第3回消化器外科I・モーニングセミナー 4.19 第15回十勝消化器癌化学療法談話会 4.20 北海道消化器癌学術セミナー |
| 5月 | 5.24 第1回縫合結紮講習会 | 5.10 第11回日本ヘルニア学会総会 5.17-18 第67回手術手技研究会 5.18-22 ATC2013 5.18-19 第23回日本臨床工学会 5.30-6.1 第50回日本小児外科学会総会 5.31-6.4 ASCO2013 | 5.25 第1回北海道ヘルニアセミナー |
| 6月 | 6.1 北海道大学第一外科同門会「楡刀会」 総会 平成25年度新入会員歓迎会 6.17 縫合トレーニングプログラム 6.22 医局対抗野球 | 6.8 第19回北海道内視鏡外科研究会 6.9 第83回北海道透視療法学会 6.12-14 第25回日本肝胆膵外科学会総会 6.14 第27回日本小児救急医学会総会 6.19-22 The 21st EAES2013 | 6.4 第4回消化器外科I・モーニングセミナー 6.17 北海道大腸癌シンポジウム |
| 7月 | 7.6 アニマルラボ | 7.4-5 第31回肝移植研究会 7.11-12 第49回日本肝癌研究会 7.13 第103回日本臨床外科学会北海道支部総会 7.16 第49回日本周産期・新生児医学会総会 7.17-19 第68回日本消化器外科学会総会 | 7.2 第5回消化器外科I・モーニングセミナー 7.15 北海道大学外科系講座合同研修説明会 7.23 第6回消化器外科I・モーニングセミナー 7.26 第1回北海道消化器癌カンファレンス |
| 8月 | 8.30 第1回鏡視下縫合結紮コンペ | 8.30-31 第40回日本膵切研究会 8.31 第99回北海道外科学会 8.31 第89回日本小児外科学会北海道地方会 8.31-9.1 第113回日本消化器病学会北海道支部例会 8.31 第34回日本大腸肛門病学会北海道地方会 | |
| 9月 | 9.13 消化器外科I・医局説明会 | 9.5-6 第24回日本消化器癌発生学会 9.5-7 第49回日本移植学会総会 9.7 第99回北海道外科学会総会 9.13-14 第24回日本急性血液浄化 9.14 第36回日本膵・胆管合流異常研究会 9.20-21 第15回SNNS研究会学術集会 9.21 第108回北海道癌談話会例会 | 9.7 第2回北海道サージカルフォーラム 9.27 札幌静脈血栓塞栓症フォーラム |
| 10月 | 10.26 第3回北海道アドバンスセミナー 10.30 縫合結紮講習会 | 10.3-5 第72回日本癌学会 10.9-10.12 第21回JDDW2013 10.25 第33回小児内視鏡外科・手術手技研究会PSJM2013 | 10.18 第1回北海道周術期管理フォーラム |
| 11月 | 11.9 関連病院院長・医長会議 11.9 縫合結紮講習会 | 11.1-5 AASLD Liver meeting 2013 11.2 第37回北海道膵臓研究会 11.7-9 3rd ESOT Basic Science Meeting 11.9 第19回北海道肝移植適応研究会 11.9 第6回日本ヘルニア学会北海道支部総会 11.15-16 第68回日本大腸肛門病学会 11.16 第40回日本胆道閉鎖症研究会 11.20 第7回肝臓内視鏡外科研究会 11.21-23 第75回日本臨床外科学会総会 11.21-24 ELSA 2013 11.24 第84回北海道透視療法学会 11.27-29 第24回日本内視鏡外科学会総会 11.30-12.1 第55回日本小児血液・がん学会学術集会 | 11.1 第1回 North Japan Cancer Forum 11.2 札幌大腸癌フォーラム |
| 12月 | 12.7 医局サッカー大会 12.7 北海道大学第一外科同門会「楡刀会」忘年会 12.12 第2回鏡視下縫合結紮コンペ 12.13 北海道大学病院手術室忘年会 12.17 7-2病棟忘年会 | 12.7 第104回日本臨床外科学会 北海道支部例会 | |

1/22

消化器外科 I 第2回 モーニングセミナー

2013年1月22日（火）午前7時30分から消化器外科 I 医局カンファレンスルームにて、第2回モーニングセミナーが開催されました。

北海道大学大学院 歯学研究科 血管生物学教室 特任准教授 樋田京子先生から、「腫瘍血管内皮細胞の異常性がもたらすがん治療への影響」の御講演がありました。

**消化器外科 I
第2回モーニングセミナー**

北海道大学大学院 歯学研究科
血管生物学教室 特任准教授
樋田京子先生

「腫瘍血管内皮細胞の異常性がもたらすがん治療への影響」

日時：2013年1月22日（火） 7:30 - 8:30
場所：第一外科医局カンファレンスルーム
お問い合わせ：大畑

2/2

ウェットラボが開催

平成25年2月2日（土）13:00～17:00、消化器外科 I 医局にて、北海道大学消化器外科 I ウェットラボが開催されました。来年度、消化器外科 I に入局予定者および、再来年以降、外科志望の初期研修医と、今年度大学病棟勤務の後期研修医を中心に豚の臓器を用いた実習をおこないました。

真皮縫合、消化管吻合、門脈再建をおこないました。

**北海道大学消化器外科 I
ウェットラボのご案内**

日時：2013年2月2日（土）13:00～17:00
場所：消化器外科 I 医局内

- ☆ステージ1 真皮縫合・開腹縫合
- ☆ステージ2 外傷真皮縫合
- ☆ステージ3 消化管吻合
- ☆ステージ4 門脈再建縫合

腸吻合体験コーナー、LisaSure体験コーナーも準備




2/9

「第1回 札幌VTRカンファレンス」が開催

2013年2月9日にホテルオークラ札幌で、第一回札幌VTRカンファレンスが開催されました。

がん研有明病院消化器センター上部消化管担当副部長の比企直樹先生にお越しいただき腹腔鏡下胃切除術の郭清と再建のポイントについて御講演いただきました。

その後、各演者の先生方に、LAGの6番郭清を中心に動画を供覧してもらい、比企先生を中心にディスカッサーの先生方に様々なアドバイスをいただきました。



2/22

「第1回 北海道小児外科フォーラム」が開催

2013年2月22日に札幌パークホテルで、第1回北海道小児外科フォーラムが開催されました。

KKR札幌医療センター小児科 大島由季代先生に『胆嚢捻転症の7歳男児例』、北海道大学消化器外科 I 宮城久之先生に『便秘を主訴で紹介されHirschsprung病と診断された患児に特徴的な画像所見はあるか—便秘患児に対する直腸粘膜生検施行例39例の検討から—』で一般講演を頂きました。また特別講演として、九州大学小児外科 田口智章教授による「小児外科の最近の進歩」のご講演を賜り、新生児から思春期例にわたり研究領域も含めて小児外科50年間の歴史における最新の情報を熱意にあふれ御講演いただき、参加者一同、得るものが大きかったです。

多くの小児科の先生にもご参加頂き、また田口先生、大島先生、宮城先生、誠にありがとうございました。

第1回 北海道小児外科フォーラム

日時 平成25年 2月22日(金) 18:45-20:30

会場 札幌パークホテル 1階 「光華」
札幌市中央区南一条西1丁目1番1号 Tel:011-411-2120

「フィニバックス」 貴社の財源
北野製菓株式会社 専務取締役 渡辺 潤二 氏

一般講演 18:00-19:30
座長：北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野 I 講師 岡田 忠雄 先生

「胆嚢捻転症の7歳男児例」
KKR札幌医療センター 小児科 大島 由季代 先生

「便秘を主訴で紹介されHirschsprung病と診断された患児に特徴的な画像所見はあるか—便秘患児に対する直腸粘膜生検施行例39例の検討から—」
北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野 I 教授 宮城 久之 先生

特別講演 19:30-20:30
座長：北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野 I 教授 武富 紹信 先生

「小児外科の最近の進歩」
九州大学大学院医学研究科 小児外科学分野 教授
日本小児外科学会 理事長 田口 智章 先生

協賛：北野製菓株式会社
主催：北野製菓株式会社

FINIBAX



3/2 第7回医局対抗バスケットボール大会

2013年3月2日（土）、白石区体育館にて第7回医局対抗バスケットボール大会が行われました。

あいにく当日は、消化器病学会や他の学会とも日程が重なったため人数集めにかなり難渋しましたが、なんとか参加可能な人間で大会に臨みました。

関連病院からは恵庭南病院の西部先生、苫小牧市立病院の石黒先生、吉田先生にも参加していただきました。

以下に、結果をご報告いたします。

◎予選

vs 精神科 18-9 ○

vs 麻酔科 20-15 ●

→予選リーグ2位で決勝トーナメントへ

◎決勝トーナメント

準決勝 vs 整形外科・スポーツ医学診療科 23-12 ●

3位決定戦 vs 形成外科 16-23 ●

→4位入賞

年々レベルが上がっている医局対抗バスケにおいて、今年は人数的にも体力的にもかなり厳しい戦いとなり、決勝トーナメントには進出することはできませんでしたが、結果的には4位となってしまいました。

しかし、学会発表を控えた先生方も、試合に出てすぐタクシーで会場に向かって発表し、また急いで戻ってきて試合に出る、といった、かなり多忙なスケジュールをこなしてくださり、感謝の気持ちでいっぱいです。なんでも頑張る一外の気概に触れました。

お忙しい中指揮をとってくださった西部先生、神山先生、厳しい時間帯に何度も踏ん張ってくれた若山先生、猛吹雪の中応援に駆け付けてくださった秘書の方々、病棟看護師の方々、誠にありがとうございました。

また、打ち上げから来てくださった蒲池先生や病棟看護師の方々にも、大変感謝いたしております。

最後になりましたが、病棟業務、出張業務にご配慮頂きました各グループの先生方（特に後藤先生ありがとうございます!!）、大会中に当直にあたって頂いた先生方に感謝申し上げます。



3/19

茨城県にて『第2回北海道アドバンスセミナー』が開催されました。

3月19日（1日目）は、総合司会に武富先生（北大消化器外科I・教授）、コーディネーターに川村先生（札幌厚生病院外科部長）、ディスカッサーに本間先生、下國先生（北大消化器外科I）をお招きして、VTRカンファレンスが行われました。内容としては、今年度入局した後期研修医がそれぞれに大学で経験した腹腔鏡手術を供覧し、皆でディスカッションを行うというものでした。年目の同じあるいは近い同期が行う手術をみて、注意点やよかった点などを活発に議論する中で、これから手術をさせていただく身として大変勉強になったのはもちろんのこと、自分も頑張らねばと非常にいい刺激を受けることができました。

3月20日（2日目）は、小美玉市にあるSTEC（昭和大学・医療技術内視鏡手術トレーニングセンター）にて、アニマルラボが開催されました。川村先生、本間先生、下國先生に講師となっただき、腹腔鏡下幽門側胃切除術、腹腔鏡下S状結腸切除術等を行いました。ここでは1班3～4人となり、1日中腹腔鏡にみっちり接して修練することができて、それぞれに大変貴重な経験を得ることができました。

また、1日目の夜には、先生方と後期研修医であんこう鍋を食べに行き、様々な話をしながらとても楽しく過ごしました。そしてなにより有難かったのが、今年度入局の10名が全員揃い（10名全員が揃うことは今までもこれからも恐らくないかもしれない）、旅行も兼ねて有意義な会に参加することができ、一生の思い出となりました。この経験を糧として、同期切磋琢磨し今後の診療や研究に精進して参ります。

最後になりましたが、この会を開いて下さったSTECの方々、検体となった動物、そして、年度末という大変忙しい時期に遠くまで来てくださった上記先生方と御配慮いただいた各グループの先生方に、この場を借りて深く感謝申し上げます。



3/22

川野小児医学奨学財団 若手枠研究助成金 内定

川野小児医学奨学財団 平成25年度 第24回の若手枠研究助成交付者に、消化器外科I 本多昌平先生が内定いたしました。



3/29

北海道大学病院に手術支援ロボット daVinci Si がやってきた！

2013年3月29日、北海道大学病院手術室に手術支援ロボット daVinci Si が配置されました。

まだ保険適応は前立腺摘出のみですが、骨盤腔などの狭く固定された部位の手術には威力を発揮しそうです。当科では直腸癌に対する手術支援として積極的に使用していくつもりです。



4/11 医局対抗Q1グランプリで決勝進出！

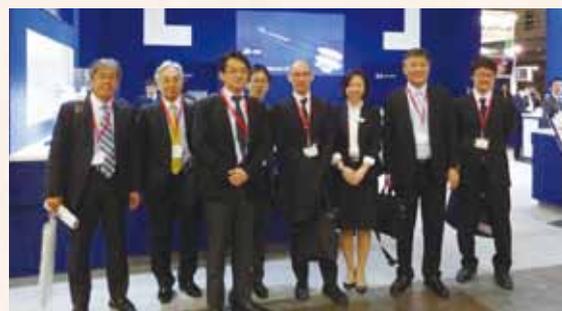
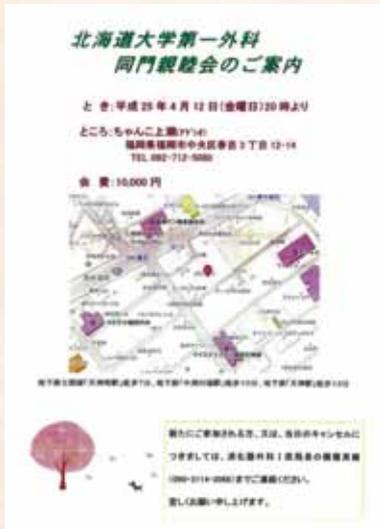
福岡で開催された第113回日本外科学会定期学術集会で前原会頭杯争奪医局対抗Q1グランプリが開催され、北大一外科から2チームが出場しました。卒後10年以下の各病院からの精鋭たちが外科学に関する問題の解答を競います。全国から107チームが参戦し、北大Aチームは見事決勝（8チーム）に進出しました。残念ながら優勝は果たせませんでしたが、北大一外科を代表して奮闘してくれた江本君、山田君、大野君、小野君、大畑君、相山君、ご苦労様でした。



4/11 第113回日本外科学会定期学術集会在福岡で開催

平成25年4月11日から13日まで福岡で「第113回日本外科学会定期学術集会」が開催されました。教室（32演題）および関連施設（18演題）から日頃の臨床や研究成果を発表してきました。貴重な討論を経験し、いろいろな意見を聞くことができ、今後の活動に活かしていきたいと考えています。皆様、お疲れ様でした。

また、学会2日目には北大一外科同門懇親会を開催したところ、50名を越す先輩方にご参集いただき、楽しい時間を過ごすことができました。どうも有り難うございました。



4/11

日本外科学会でYoung Research Awardと研修医優秀演題賞を受賞

平成25年4月11日から13日に福岡で行われた第113回日本外科学会定期学術集会で島田慎吾先生、旭火華先生、大野陽介先生がYoung Research Awardを、加藤紘一先生が研修医優秀演題賞を受賞しました。おめでとうございます。今後の益々のご活躍を期待しています。

Young Research Award

島田慎吾 先生「ラット冷保存肝における再還流時水素ガス投与の効果」

旭火華 先生「イヌ自家腓島移植モデルにおけるProliferator-activated receptor (PPAR)- γ agonistによる早期グラフト傷害抑制効果の検討」

大野陽介 先生「革新的癌ワクチン、H/K-HELPロングペプチドによる癌特異的T細胞免疫応答の増強」

研修医優秀演題賞

加藤紘一 先生(指導医:日鋼記念病院 浜田弘巳先生)「腸間膜静脈腫瘍栓を伴う大腸癌症例の治療方針」



4/16

消化器外科 I 第3回 モーニングセミナー

4月16日(火)午前7時30分から消化器外科 I 医局 カンファレンスルームにて、第3回モーニングセミナーが開催されました。

北海道大学遺伝子病制御研究所 免疫制御分野 准教授 北村秀光先生から、「癌免疫治療の現状と次世代癌ワクチンの開発にむけて」の御講演がありました。

**消化器外科 I
第3回モーニングセミナー**

北海道大学遺伝子病制御研究所
免疫制御分野 准教授

北村秀光 先生

「癌免疫治療の現状と次世代癌ワクチンの開発にむけて」

日時：2013年4月16日(火) 7:30 - 8:30
場所：第一外科医局カンファレンスルーム
お問い合わせ：大塚

4/17 SAGES2013 in Baltimore

SAGES (Society of American Gastrointestinal and Endoscopic Surgery) 2013がMaryland州Baltimoreにて2013.4.17～4.20の日程で開催され、当科からは本間、柴崎の2名が参加いたしました。参加人数は2300名を超え、演題数は800題を超えておりました。日本からも数多くの演題が採択されており、国別で2番目に多かったようで、日本の内視鏡外科の勢いも感じることができました。当科からは本間先生が『Dual-ports laparoscopy-assisted anterior resection compared with conventional laparoscopy-assisted anterior resection for rectal cancer.』という演題でポスター発表をされました。

大腸癌関連のセッションはかなり充実しており、Laparoscopic colorectal surgeryの現状はもちろんのこと、周術期管理、合併症のリスク、neoadjuvant chemotherapyやrobotic surgeryの話まで幅広く勉強することができ、知識の整理もできました。今後の診療に生かしていきたいと思っております。



4/17 消化器外科 I 7-2病棟 歓迎会

平成25年4月17日、「消化器外科 I 7-2病棟 歓迎会」を開催いたしました。



4/19

第15回 十勝消化器癌化学療法懇話会

平成25年4月19日（金）18:30～20:30に、北海道ホテル2階『ポロシリ』にて、第15回十勝消化器癌化学療法懇話会が開催されました。



4/20

北海道消化器癌学術セミナー

4月20日（土）東京ドームホテル札幌にて、「北海道消化器癌学術セミナー」が開催されました。弘前大学大学院医学研究科消化器外科学講座・小児外科学講座教授・袴田健一先生より『大腸癌肝転移治療を巡る外科側の課題』につきご講演がありました。



5/1

当科消化管グループの 皆川のぞみ先生が 「日本内視鏡外科学会技術認定医」 資格を取得

技術認定医についてはこちら↓

<http://www.jses.or.jp/member/gijutsu.html>



5/15 第1回縫合結紮講習会が開催

平成25年5月15日（水）17:00～19:00、消化器外科I医局にて、学生さん、初期研修医の皆様を対象とした、縫合結紮講習会が開催されました。総勢30名弱が参加され、両手結び、片手結び、縫合の基礎、器械結びなど、基礎的な実習が行われました。外科系に興味のある5年生、6年生が中心でしたが、中には4年生で参加される方もおられました。みな非常に熱心でかつ上達も速く、講師陣も非常に熱の入った指導となりました。

その後は懇親会が開かれ、実習の熱気もそのままにみなで楽しい一時を過ごすことができました。



5/17 本間重紀助教が第67回手術手技研究会ビデオ賞（下部消化管部門）を受賞！

平成25年5月17-18日に札幌で開催された第67回手術手技研究会（当番世話人：札幌医大消化器総合外科教授平田公一先生）にて教室の本間重紀助教が第1回ビデオ賞（下部消化管部門）を受賞しました。演題は「人工肛門造設予定部を利用した単孔式腹腔鏡下大腸切除術」です。同賞は本年から開始されたもので、全国からの応募の中、見事下部消化管部門で第1位となりました。おめでとうございます。これからの益々の研鑽を期待したいと思います。



5/18 手術手技研究会ビデオ賞受賞

5月18日に開催された第67回手術手技研究会で、第1回ビデオ賞を本間重紀が受賞しました。下部消化管領域で研究課題は「人工肛門造設予定部を利用した単孔式腹腔鏡下大腸全摘術」でした。

手術手技研究会は、昭和48年から続く歴史ある会で、第18回（昭和57年）を葛西洋先生、第38回（平成4年）を内野純一先生が開催され、藤堂省先生が特別会員をつとめられる当科とも関係の深い研究会です。手術手技研究会には3つの賞があり、奨励研究賞、

指定研究賞、そして今回新設されたビデオ賞があります。奨励研究賞の第1回受賞者は、中西昌美先生（昭和55年）「自動縫合器によるクリップ吻合の実験的研究—とくに絹糸1層、2層と対比して—」、第7回受賞者は、西村昭男先生（昭和59年）「COMPRESSION RINGによる消化管吻合の研究」、指定研究賞の第1回受賞者は、佐野文男先生（昭和59年）「悪性腫瘍に対するレーザー手術の有効性に関する研究」、第10回受賞者は、近藤啓史先生（平成9年）「鏡視下手術における鉗子型およびピストル型直針縫合器の開発」でした。本研究会すべての賞の第一回受賞者の中に北海道大学第一外科の名を刻めたことは望外の喜びです。これもひとえに第一外科諸先輩方の築き上げた伝統と匠の技の継承のおかげです。深く感謝申し上げます。また、長時間の手術に付き添っていただきました高橋典彦先生、下國達志先生、後期研修医の皆様、いつも温かく見守ってくれる消化管グループをはじめとする教室の皆様、本ビデオ賞への応募を薦めていただきました武富紹信教授、誠にありがとうございます。今後ともご指導のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



5/25 第1回北海道ヘルニアセミナーを開催

平成25年5月25日（土）センチュリーロイヤルホテルにて、「第1回 北海道ヘルニアセミナー」を開催しました。ビデオクリニックでは、KKR札幌医療センターの今裕史先生、西札幌病院の森田恒彦先生がご発表されました。医療法人豊田会刈谷豊田総合病院副院長の早川哲史先生から実際の手術手技に対するアドバイスをいただきました。その後、腹腔内から見た理想的な腹腔鏡下ヘルニア修復（TAPP法）～ソケイ部膜解剖から大腸癌手術への拡がりを考える～と題して、御講演されました。第一外科関連施設の若手外科医を中心に総勢約50名が参加しました。北海道内で「ラパヘル」のより一層の普及が期待されます。



5/30 学会報告（第50回日本小児外科学会学術集会）

第50回日本小児外科学会学術集会が2013.5.30.～6.1.に東京で開催され、武富教授、岡田、本多、宮城、湊が参加し発表してきました。また50周年ということで盛会の開催となりました。今回、将来小児外科を希望しています、北大6年次則内友博君も参加され、また神奈川県立こども医療センター外科の新開先生、北河先生と食事会も行いとても有意義な時間を過ごしました。以下は、則内君の学会参加記です。

6年次「選択実習Ⅰ」で6週間、消化器外科Ⅰで実習させて頂きました則内友博です。この度、「第50回日本小児外科学会学術集会」に参加させて頂きました。学会に参加するのは初めての経験でしたが、朝から夕方まで、日本語の発表から英語での国際パネルディスカッションまで、テーマも幅広く多彩な発表があり、とても刺激的で充実しあつという間に過ぎた3日間でした。

数ある発表の中で特に印象に残っていますのは「Intestinal failure」の国際パネルディスカッションです。実習期間中に本テーマについて勉強する機会があったので、欧米における本領域の現状について更に学ぶことができとても興味深かったです。また夜は神奈川県立こども医療センターの先生方ともお話しをする機会を作って頂き、楽しい時を過ごさせて頂きました。

小児外科医を目指す私にとって、日本や世界の小児外科の現状を知ることができ、将来を考えるうえでとても貴重な機会となりました。このような機会を作って頂きました武富教授、小児グループの先生方、医局の方々に大変感謝致しております。今後は医師としてこのような場で活躍できるように努力していきたいと思っております。



6/1 平成25年度 新入会員歓迎会

平成25年6月1日（土）ニューオータニイン札幌にて北海道大学第一外科同門会「楡刀会」総会 新入会員歓迎会が開催されました。今年度は9名が入局しました。



6/4 消化器外科 I 第4回 モーニングセミナー

6月4日（火）午前7時30分から消化器外科 I 医局カンファレンスルームにて、第4回モーニングセミナーが開催されました。

北海道大学大学院環境医学分野准教授 若尾 宏先生から、「MAIT細胞：ヒトで豊富な自然免疫型T細胞」の御講演がありました。

消化器外科 I 第4回モーニングセミナー

北海道大学大学院
環境医学分野 准教授

若尾 宏 先生

**「MAIT細胞：ヒトで豊富な
自然免疫型T細胞」**

日時：2013年6月4日（火） 7:30 - 8:30
場所：第一外科医局カンファレンスルーム

お問い合わせ：大塚

6/12 第25回日本肝胆膵外科学会 in 宇都宮

6月12日から14日まで宇都宮で肝胆膵外科学会が開かれ、武富教授をはじめ肝胆膵グループスタッフ全員が参加して参りました。また、今回は6週間実習にきていた6年生の五月女慧人君、吉田拓人君、中野康弘君の3名も一緒に参加しました。

日光への観光も出来、3人にとってすばらしい実習であったのではないかと思います。

以下、3人の学会参加の感想です。

五月女慧人君

6年次の選択実習で消化器外科Ⅰを選択した五月女慧人です。今回、先生方の御好意で日本肝胆膵外科学会・学術集会に参加させていただくことが出来ました。私は学会に参加するのが初めてだったので、当日はずっと気分が高揚していました。

様々な発表の中で特に面白かったテーマは、「腹腔鏡下肝切除」と「高難度手術のState of art」です。見たこともないような手技・方法で手術が行われており、夢中で発表に聞き入ってしまいました。同様のテーマが並行して発表されるため、全てを聞くことが出来なかったのが非常に残念です。

私はもともと消化器外科医を志しているもので、今回の学会に参加して、より一層消化器外科医になろうという決意が高まりました。今回の経験をしっかりと自分のものにして、今後の医療に役立てて行こうと思います。参加させていただき、ありがとうございました。

吉田拓人君

この度は、選択実習の一環として栃木で開催された肝胆膵外科学会に参加させていただきました。学会に参加するのは今回が初めてで、日本全国の大学から多くの先生が来て、最新の研究発表をしている雰囲気にとっても刺激を受けました。自分が想像していたよりも学会の雰囲気は華やかで、発表の他にも新しい手術の機械などが展示されていてとても楽しかったです。北大の第一外科の先生の発表をいくつか聞かせていただきましたが、他の大学の先生にも一目置かれている印象を受け、自分も将来は、他の大学や他の病院の人にも認められるような発表をしっかりと発信できる医師になりたいと思いました。

学会に参加する前は、おそらく内容はほとんど理解できないのではないかと懸念がありましたが、興味のある分野ということもあってか、これまで受けてきた授業の話よりもしっかり頭に入ってきて良く話を聞けたなと思います。一番、印象に残っている発表は、膵臓・膵島移植の日本と世界の現状についてのミニシンポジウムです。選択実習の自分の担当患者さんが1型糖尿病に対して膵腎同時移植をした患者さんということもあって、あらかじめ自分でいくつか膵臓移植の論文を読んでいたため、とても内容が理解できました。それと同時に、発表の内容はすでに論文で読んで知っていることも多々あり、普段から論文を読むことで最新の知識に触れることができるということを実感でき、改めて論文を読むことの大切さを感じました。

栃木の滞在期間には、先生方ともたくさんお話ができ、また栃木の観光もできてとても楽しかったです。初めて行った華厳の滝は圧巻でした。3日間、本当にありがとうございました。

中野康弘君

6年次「選択実習Ⅱ」で6週間、消化器外科Ⅰで実習させて頂きました中野康弘です。この度、「第25回日本肝胆膵外科学会学術集会」に参加させて頂きました。学会自体ははじめてではなかったのですが、全国から先生方が集い、様々なシンポジウムやセミナーが行われている会場の雰囲気は刺激的で大変興味深いものでした。なかでも教育セミナーは学生である私にも理解しやすいものが多く、特に学ぶこと多いものとなりました。

今回の経験を有意義に生かしたいと思うとともに、このような機会を設けて頂いたことに御礼申し上げます。



6/17 縫合トレーニングプログラムが開催

平成25年6月17日（土）13:00～17:00まで、『ほくたけトレーニングセンター Village Plus』にて、今年度初となる縫合トレーニングプログラム（応用編）が開催されました。外科系に興味のある初期研修医や今年度入局した後期研修医を中心に約30名が参加されました。2部構成となっており、第1部では豚の皮膚や腸管を用いての真皮埋没縫合や腸管吻合など、臨床に近い基本的な手技を学ぶことができました。第2部では鏡視下での縫合結紮だけでなく、LAP-mentorやDaVinci mimicなども体験することができました。瞬間に時間が過ぎてしまい、放っておけば何時間でも続けてしまいそうなほど参加者全員が熱中しておりました。

その後は近くの焼肉店で疲れを癒し、親睦を深めるとともに楽しい一時を過ごすことができました。ご参加されました先生方の明日からの臨床に少しでも生かされることを期待するばかりです。今後もこのような機会を積極的に開催していきたいと思っておりますので、今回ご参加された先生方はもちろんのこと、今回参加できなかった外科系に興味がある先生方も次回は是非ご参加をお待ちしております。



6/29 北海道大腸癌シンポジウム2013

2013年6月29日（土）16:30より、札幌グランドホテル東館3階GINSENにて、中外製薬株式会社主催のHokkaido Colorectal Cancer Symposium2013が開催されました。国立がん研究センター東病院消化器内科・外来病棟医長・吉野孝之先生より、『進行大腸癌の治療戦略～ASCO before-and-after～』、大阪大学大学院医学研究科・外科学講座消化器外科学・助教・竹政伊知朗先生より『大腸癌に対する最新の腹腔鏡手術：低侵襲と機能温存への取り組み』のご講演がありました。



6/22 医局対抗野球大会

2014年6月22日、8月6日に医局対抗野球大会が行われました。人数確保が難しい中、後期研修医を中心に細田先生、関連病院の研修医の先生方（志智先生、平田先生、永井先生、横山先生、吉田先生、山田先生）、病棟の看護師さんにも参加をいただき大会に臨みました。

結果

6月22日 1回戦 (vs眼科) 7-3 ○

8月06日 2回戦 (vs第1内科) 3-9 ×

1回戦は勝つことができましたが、2回戦は第1内科の機敏なチーム力に敗れました。しかし、会場は遠方であったにも関わらず、応援に秘書の方々、病棟看護師の方々に来て頂きました。本当にありがとうございました。打ち上げの飲み会も盛り上がり、第一外科の結束力を感じた一日となりました。

最後に病棟業務、出張業務にご配慮頂きました各グループの先生方（特に後藤先生ありがとうございます）、野球大会中に当直にあたって頂いた先生方に感謝申し上げます。



7/2 第5回モーニングセミナー

7月2日（火）、医局カンファレンスルームにて第5回モーニングセミナーが開催されました。北海道大学病院病理部・同コンパニオン診断学研究部門（兼任）特任講師・畑中豊先生より、『FFPE検体を使った最近の研究について』について講演がありました。

消化器外科 I
第5回モーニングセミナー
北海道大学病院病理部・同コンパニオン診断学研究部門（兼任）特任講師
畑中 豊 先生
「FFPE検体を使った最近の研究について」
日時：2013年7月2日（火） 7:30 - 8:30
場所：第一外科医局カンファレンスルーム
お問い合わせ：大畑

7/6 アニマルラボが福島県須賀川市で開催

2013/7/6（土）新入医局員を対象としたアニマルラボが福島県須賀川市で開催されました。消化管グループの先生方の熱いご指導のもと、腹腔鏡下幽門側胃切除術、腹腔鏡下胆嚢摘出術、小腸切除等を行いました。非常に内容の濃い一日となりました。動物への感謝及び畏敬の念を抱きつつ、日々の診療に生かしていきたいと思えます。



7/15 外科合同研修説明会が開催

7月15日（月祝）16時より、ロイトン札幌ホテルにて、北海道大学外科系講座合同研修説明会、及び親睦会が開催されました。

この命を救うために
**北海道大学外科系講座合同
 研修説明会・懇親会**
 -オールラウンド研修説明会-

～メスで己の未来を切り開こう！～

主 催：消化器外科I、消化器外科II、循環器・呼吸器外科、乳腺・内分泌外科

日時：2013年7月15日（月祝） 16:00～18:00
 （二次会あり）

場所：ロイトン札幌ホテル
 札幌市中央区北1条西3丁目 電話：011(271)2711(代)

参加費：無料

対象：研修医、医学生（事前登録が必要です）

登録先：消化器外科I 教室秘書 担当：hi-yokoo@med.hokudai.ac.jp
 または各教室まで

7/23 第6回 モーニングセミナー開催

7月23日（火）、7:30AMより第一外科カンファレンスルームにて、消化器外科I第6回モーニングセミナーが開催されました。札幌医科大学・病理学第一講座・助教・廣橋 良彦先生より、『治療抵抗性ヒトがん幹細胞を標的とする免疫応答』について講演がありました。

**消化器外科 I
 第6回モーニングセミナー**

札幌医科大学・病理学第一講座・助教

廣橋 良彦 先生

**「治療抵抗性ヒトがん幹細胞を
 標的とする免疫応答」**

日時：2013年7月23日（火） 7:30 - 8:30
 場所：第一外科医局カンファレンスルーム
 お問い合わせ：大畑

7/26

第一回北海道 消化器癌カンファレンスが開催

7月26日に札幌グランドホテルにて第一回北海道消化器癌カンファレンスが行われました。

聖マリアンナ医科大学 臨床腫瘍学講座准教授の中島貴子先生、ならびに千葉大学臓器制御外科学教授 宮崎勝先生にご講演をいただき、カンファレンス終了後懇親会を開き貴重なお話を聞きすることが出来ました。



第1回北海道消化器癌カンファレンス

2013. 7. 26 (FRI.) 18:30-20:30

【場所】札幌グランドホテル 3階「GINSEN」

基調講演

【座長】

北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野 I

講師 高橋 典彦 先生

「胃癌化学療法～UP TO DATE」

聖マリアンナ医科大学 臨床腫瘍学講座

准教授 中島 貴子 先生

特別講演

【座長】

北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野 I

教授 武富 紹信 先生

「進行胆道・膵ガンの新たな外科治療戦略」

千葉大学大学院医学研究院 臓器制御外科学

教授 宮崎 勝 先生

主催 大鵬薬品工業株式会社

8/30

第1回 鏡視下縫合結紮Competitionが開催

2013/08/30 第一外科医局内カンファレンスルームにおいて、第一回鏡視下縫合結紮Competitionが開催されました。当科後期研修医10名、初期研修医1名、学生（6年生）2名が参加されました。教授以下多数の教室員が見守り、巨大スクリーンを見ながら、普段以上の緊張感の中で行われました。3分以上は打ち切り、普段と違う状況下、遠近感をつかみづらい、という難しい条件下でしたが、予想以上の熱戦が繰り広げられ、記録なしは3名のみでした。優勝者は学生（6年生）の西尾君でした。おめでとうございます。賞品であるネーム入り術衣が近日中にプレゼントされる予定です。これを機会におのおのが研鑽を重ねて、今後の飛躍のきっかけになればと願うばかりです。



8/31 杉山昂先生（現砂川市立病院外科勤務）が日本消化器病学会専修医奨励賞を受賞！

平成25年8月31－9月1日に札幌で開催された第113回日本消化器病学会北海道支部例会（当番世話人：旭川医科大学病態代謝内科学教授羽田勝計先生）にて昨年度教室に勤務していた杉山昂先生（現砂川市立病院外科勤務）が日本消化器病学会専修医奨励賞を受賞しました。演題は「当科における脳死肝移植登録患者待機死亡78症例の検討」です。おめでとうございます。これからの益々の研鑽を期待したいと思います。



9/5 川俣太先生が平成25年日本消化器癌発生学会研究奨励賞を受賞

平成25年9月5-6日に金沢で開催された第24回日本消化器癌発生学会にて同門の川俣太先生（市立稚内病院外科）が平成25年度日本消化器癌発生学会研究奨励賞を受賞しました。研究内容は「大腸癌浸潤・転移における chorionic gonadotropin- β の機能解析とその臨床応用」です。おめでとうございます。これからの益々の研鑽を期待したいと思います。



9/7 工藤岳秋先生が平成25年度北海道外科学会奨励賞を受賞！

平成25年9月7日に札幌で開催された第99回北海道外科学会にて同門の工藤岳秋先生（苫小牧智立病院外科、現はまなす医院）が北海道外科学会奨励賞を受賞しました。演題は「経皮経肝胆嚢ドレナージ施行後、妊娠17週で腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した胆石性胆嚢炎の1例」です。おめでとうございます。これからの益々の研鑽を期待したいと思います。



9/7 第2回北海道サージカルフォーラム

9月7日（土）17:00PMよりロイトン札幌にて、第2回北海道サージカルフォーラムが開催されました。

特別講演として東北大学大学院消化器外科学分野の海野倫明教授に「膵癌・胆道癌治療の新しい戦略」と題してご講演頂きました。



9/7 第99回北海道外科学会が開催

平成25年9月7日に第99回北海道外科学会（会長：武富教授）が北大学術交流会館にて開催されました。今回は95演題を集め活発な議論が展開され、また、はまなす医院の工藤先生が学会奨励賞に輝きました。おめでとうございます。

おかげさまで無事学会を終了することが出来、スタッフとして働いてくれた皆様に感謝申し上げます。



9/13 消化器外科 I 医局説明会

平成25年9月13日 18:00より、北海道大学消化器外科 I 医局にて、主に初期研修医・後期研修医を対象とした医局説明会が行われました。各関連施設より多くの方が参加され、研修医約30名、6年目の学生が約10名参加され、医局長・横尾英樹より消化器外科 I 入局後の研修プログラム、教育方針などにつき説明がありました。また、その夜は親睦を深めるために懇親会が開催されましたが、総勢約80名と、大盛況の中行われました。当日に入局の決意表明された研修医もあり、熱い一夜となりました。ご参加頂きました研修医・学生の皆様のご活躍を期待するとともに、当日にご尽力頂きました関連施設の諸先生方にもこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。



9/13 第24回日本急性血液浄化学会 学術集会在札幌で開催

第24回日本急性血液浄化学会学術集会在2013年9月13日～14日に京王プラザホテル札幌で開催されました。教室同門の札幌北榆病院理事長、米川元樹先生（昭和46卒）が会長を務めました。

<http://www.24jsbpcc.hkdo.jp/>



9/20 第15回SNNS研究会 学術集会在釧路で開催

第15回SNNS研究会学術集会在2013年9月20日～21日に釧路プリンスホテルにて開催されました。教室同門の釧路労災病院院長、草野満夫先生（昭和45年卒）が当番世話人を務めました。

<http://www.snns15.com/>



9/27

札幌静脈血栓塞栓症フォーラム2013が開催

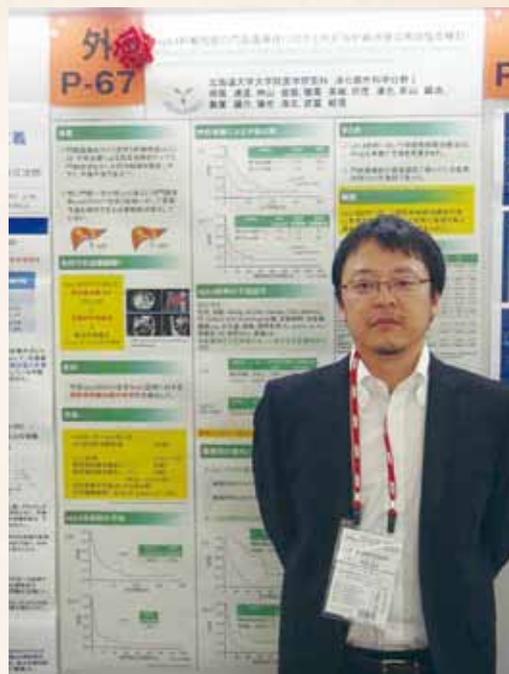
2013年9月27日（金）19:00より札幌プリンスホテルにて、札幌静脈血栓塞栓症フォーラム2013が開催されました。札幌医科大学 原田敬介先生、北海道大学 柴崎晋先生からのケーススタディに加え、藤田保健衛生大学上部消化管外科教授の宇山一朗先生に「消化器外科におけるロボット手術の最前線」という演題で特別講演をいただきました。近年導入されつつあるロボット手術の現状ならびに今後の展望について、素晴らしいビデオと貴重なお話を伺うことができました。満席盛況で会を終えることができ、道内の消化器外科医のロボット手術への関心が高まっていることを感じました。お忙しい中、遠方よりご参加いただいた先方方に心よりお礼申し上げます。



10/9

第21回JDDWが開催

先日、10月9日から12日まで品川にて第21回JDDWが開催され、神山俊哉先生、柿坂達彦先生がポスター優秀演題賞に選ばれました。



10/30 縫合結紮講習会・医局説明会

2013年10月30日、消化器外科 I 医局で、医学生を対象とした縫合結紮講習会と医局説明会が開催されました。

主に5年生を中心に学生が参加し、縫合結紮講習会のおち、医局長・横尾英樹より消化器外科 I 入局後の研修プログラム、教育方針の説明がありました。また、その夜は親睦を深めるために懇親会が開催されました。参加いただきました学生の皆様のご活躍を期待いたします。

北海道大学 消化器外科 I
～縫合結紮講習会
& 医局説明会のご案内～

今から外科医への第一歩を
踏み出してみませんか？

日時：平成25年10月30日(水)
17:00～ 縫合結紮講習
18:00～ 医局説明会 → 懇親会
場所：北海道大学消化器外科 I 医局内カンファレンスルーム
対象：学生（4～6年生）当日参加でも大歓迎!!!
連絡先：本岡 011-706-5927 homma_s@nifty.com



11/1 第1回North Japan Cancer Forumが開催

平成25年11月1日に札幌グランドホテルにて第一回North Japan Cancer Forumが開催されました。

富山大学医学部 消化器・腫瘍・総合外科教授の塚田一博先生をお招きして肝・胆・膵癌＝化学療法と外科治療の変化＝についてご講演をいただきました。

肝胆膵領域の多岐にわたる内容で非常に参考になりました。

第1回
North Japan Cancer Forum

日時：平成25年11月1日(金) 19:00～20:30
場所：札幌グランドホテル 本館3階 「新緑」
住所：札幌市中央区北1条西4丁目 TEL:011-261-3311

19:00～19:10 情報提供 中外製薬株式会社

19:10～19:30 【基調講演】
題目 北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野！
特任助教 川村 秀樹 先生

『胃癌の二次化学療法における分子標的薬（仮）』
演題 北海道大学病院 腫瘍センター 佐々木 尚英 先生

19:30～20:30 【特別講演】
題目 北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野！
教授 武高 昭信 先生

『肝・胆・膵癌 = 化学療法と外科治療の変化 =』
演題 富山大学 医学部 消化器・腫瘍・総合外科
教授 塚田 一博 先生

※詳細は後、情報交換会を予定しております。
主催 中外製薬株式会社



11/8

第二回北海道サージカルインフェクションフォーラムが開催

平成25年11月8日に札幌グランドホテルにて第二回北海道サージカルインフェクションフォーラムが開催されました。

基調講演には名古屋第二赤十字病院第二総合内科臨床研修部部長・横江正道先生に急性胆管炎、胆嚢炎のガイドラインについて、また特別講演に東邦大学大橋医療センター外科・がんセンター主任教授・草地信也先生に外科系感染症に対する抗菌薬治療法についてご講演いただきました。アメリカで行われている医療の現状を踏まえながらの身近な話題であったため非常に活発な議論が展開されました。



第2回北海道サージカル・インフェクション・フォーラム

運営 幹事、先方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
 昨年度、外科系感染症の研究と臨床応用を目的として北海道サージカル・インフェクション・フォーラムを開催しました。第2回フォーラムでは急性胆管炎・胆嚢炎診療ガイドライン2013作成ワーキンググループメンバーであります東邦大学大橋医療センター・草地信也先生/名古屋第二赤十字病院横江正道先生へより、急性胆管炎・胆嚢炎ガイドライン/外科系感染症に対する抗菌薬治療法の最新の情報をご講演を頂きます。ご多忙中とは存じますが、万障お繰り合わせの上、ご出席頂きますようお願い申し上げます。 謹啓
 代表幹事人 武富 昭信

日時:平成25年11月8日(金) 19:00~
場所:札幌グランドホテル 別館2階 グランドホール西
 札幌市中央区北1条西4丁目 TEL.011-261-3311

【懇話会】18:50~19:00 B-ラクタマーセ階審判配合医生物質製剤 ソシオン特設席
 大正富山医薬品(株) 学術研修センター

【基調講演】19:00~19:30
 司会:北海道大学大学院医学研究科消化器外科学分野 1 准教授 神山 信哉 先生
「急性胆管炎・胆嚢炎の診断基準と重症度判定基準は どう変わったのか？」
 名古屋第二赤十字病院 第二総合内科
 臨床研修部 部長 横江正道 先生

【一般演題】19:30~20:00
 司会:市立札幌病院 外科 部長 三澤一己 先生
「終末期患者のsepsisに対し、TAZ/PIPCが有効であった一例」
 旭川厚生病院 外科 阿田 尚樹 先生
「これまで行ってきた胆道疾患の周術期感染対策」
 市立函館病院 消化器外科 倉内 宣明 先生

【特別演題】20:00~21:00
 司会:北海道大学大学院医学研究科消化器外科学分野 1 教授 武富 昭信 先生
「外科系感染症に対する抗菌薬治療法」
 東邦大学大橋医療センター 外科・がんセンター
 主任教授 草地信也 先生

※研究会参加費として500円申し受けます。
 ※講演会終了後、意見交換会の場をご用意しております。
 共催: 北海道サージカル・インフェクション・フォーラム
 大正富山医薬品株式会社

11/9

関連病院院長・医長会議が開かれました

平成25年11月9日13時より関連病院院長・医長会議が開かれました。

乳腺内分泌外科学と消化器外科学 I の現状についての説明を行い、その後に出席された先生方より関連病院の現状についてお話をいただきました。教室としましてもご要望に応えるよう努力して参りたいと思います。



11/9 縫合結紮講習会が開催

11月9日土曜日、14時から18時まで初期、後期研修医を対象とし、ほくたけメディカルトレーニングセンターにて縫合結紮講習会を開催致しました。総勢26名の多数の参加をいただきました。参加者を2グループに分け、交互に生体材料を用いた腸管吻合と鏡視下の結紮縫合のトレーニングを行いました。縫合結紮のtime trial上位3名、腸管吻合上位1名ずつに賞品を贈呈致しました。研修医のみなさんの熱意、上達の早さを目の当たりにし、指導医も刺激を受ける有意義な会となりました。今後も定期的で開催していく予定ですので、今回参加されなかった先生方、学生さんもぜひご参加ください。お待ちしております。



12/7 医局サッカー大会優勝!!

12月7日、医局対抗サッカー大会決勝トーナメントが行われました。大学病院の後藤先生、後期研修医、リサーチの先生を中心に第一外科の総力を挙げて大会に臨みました。

関連病院からは西さっぽろ病院の森田先生、北海道社会保険病院の脇坂先生他、多数の先生に参加していただきました。

◎決勝トーナメント

- 1回戦 vs 麻酔科 4-0 ○
- 準決勝 vs 循環器内科 7-3 ○
- 決勝 vs 整形外科 3-2 ○

決勝は、昨年と同カードの対整形外科。

序盤先制点を許し苦しい展開となりましたが、好セーブを連発した森田先生を中心に守備を固め、カウンターで同点に追いつき、後半ロスタイム谷先生の鋭いシュートがゴールに突き刺さり劇的な勝利を飾ることができました。

7年ぶりの優勝です!!!

同日は、同門会が開催されていましたが、快く送り出してくださった武富教授をはじめ、病棟業務ならびに当直業務を担当してくださった先生方に感謝申し上げます。



12/7 同門会忘年会が開催

12月7日にホテルニューオータニにて同門会忘年会が行われました。129名と例年より多い出席者数で盛会のうちに終了いたしました。また忘年会の前に講演も行われスウェーデン留学から帰国された高橋徹先生から「Sverigeに住む人々に触れてー北欧のArchipelagoからー」という演題名で講演していただきました。



12/12 第2回 鏡視下縫合結紮 Competitionが開催

2013/12/12 第一外科医局内カンファレンスルームにおいて、第2回鏡視下縫合結紮Competitionが開催されました。当科後期研修医8名、学生（6年生）1名が参加されました。前回同様多数の教員が見守り、巨大スクリーンを見ながら、普段以上の緊張感の中で行われました。普段の練習と違う状況かつ遠近感をつかみづらい、という難しい条件に変わりはありませんでしたが、タイムを縮めるものが多く、秒差の接戦となりました。見た目も皆非常にスムーズになっており、日々の努力の後が見受けられました。優勝者は正司先生でした。おめでとうございます。賞品であるネーム入り術衣が近日中にプレゼントされる予定です。今回タイムに反映させることができなかった人、あるいは悔いの残る結果となってしまった人も、確実に上達はしています。これにめげることなく、次回につなげていきましょう。更なる成長を期待したいと思います。



12/19 前田好章先生（北海道がんセンター）が日本臨床外科学会優秀論文賞を受賞！

このたび前田好章先生（北海道がんセンター消化器外科、平成5年入局）が平成25年日本臨床外科学会優秀論文賞を受賞されました。論文タイトルは「消化器外科における進行・末期癌患者に対する症状緩和手術165例の検討」です。平成25年発行の日本臨床外科学会雑誌に掲載された計522編の中から原著1編、臨床経験1編、症例6編が選考されています。おめでとうございます。これからの益々の研鑽を期待したいと思います。



関連病院紹介

関連病院紹介

2012年関連病院手術数



▼施設名▼

| 施設名 | | 総病床数 | 外科病床数 | 全身麻酔 | 脊髄麻酔 | 局所麻酔 | 食道癌 | 胃癌 | 結腸癌 | 直腸癌 | 原発性肝癌 | 転移性肝癌 | 膵癌 | 胆道癌 | 乳癌 | 甲状腺癌 | 肺癌 | 胆石癌 | 虫垂切除 | 小腸切除 | 最後ヘルニア根治術 | その他 |
|---------------|-------|------|-------|------|------|------|-----|------|-----|-----|-------|-------|-----|------|-----|------|------|-----|------|------|-----------|-----|
| がんセンター 北海道 | 消化器外科 | 407 | 27 | 286 | 0 | 31 | 8 | 59 | 53 | 44 | 5 | 15 | 9 | 3 | 0 | 0 | 0 | 16 | 2 | 9 | 22 | 72 |
| | 呼吸器外科 | 460 | 24 | 261 | 0 | 16 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 166 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 乳腺外科 | 460 | 30 | 300 | 0 | 150 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 280 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 市立札幌 | 776 | 50 | 617 | 48 | 223 | 4 | 48 | 67 | 26 | 10 | 20 | 14 | 9 | 60 | 0 | 0 | 76 | 35 | 16 | 83 | 421 | |
| 岩見沢市立 | 484 | 42 | 328 | 75 | 35 | 4 | 21 | 50 | 22 | 3 | 2 | 5 | 3 | 28 | 3 | 14 | 50 | 30 | 6 | 83 | 102 | |
| 市立苫小牧 | 334 | 21 | 355 | 18 | 22 | 0 | 16 | 44 | 15 | 9 | 2 | 0 | 2 | 22 | 0 | 10 | 61 | 35 | 11 | 54 | 74 | |
| 釧路労災 | 450 | 52 | 629 | 1 | 43 | 7 | 61 | 78 | 38 | 9 | 5 | 6 | 7 | 58 | 0 | 13 | 104 | 38 | 19 | 89 | 141 | |
| 札幌厚生 | 519 | 75 | 953 | 1 | 38 | 1 | 110 | 100 | 73 | 68 | 16 | 24 | 8 | 46 | 50 | 26 | 157 | 28 | 28 | 62 | 195 | |
| 旭川厚生 | 539 | 53 | 702 | 0 | 0 | 4 | 74 | 98 | 45 | 0 | 10 | 24 | 6 | 70 | 0 | 68 | 71 | 45 | 9 | 113 | 246 | |
| 帯広協会 | 360 | 40 | 459 | 10 | 10 | 0 | 31 | 63 | 23 | 2 | 2 | 7 | 5 | 39 | 1 | 0 | 77 | 58 | 11 | 90 | 70 | |
| KKR札幌 | 450 | 45 | 720 | 0 | 6 | 1 | 38 | 60 | 22 | 1 | 6 | 12 | 1 | 112 | 5 | 45 | 65 | 73 | 22 | 66 | 197 | |
| 社保総合 | 276 | 34 | 383 | 0 | 22 | 0 | 17 | 40 | 17 | 4 | 2 | 2 | 4 | 25 | 15 | 0 | 59 | 35 | 20 | 91 | 74 | |
| 日鋼記念 | 479 | | 514 | 35 | 22 | 4 | 34 | 34 | 18 | 6 | 4 | 6 | 3 | 42 | 0 | 14 | 39 | 37 | 4 | 50 | 276 | |
| 函館市立 | 834 | 40 | 703 | 32 | 72 | 4 | 50 | 72 | 43 | 16 | 5 | 5 | 11 | 54 | 0 | 0 | 91 | 51 | 38 | 67 | 295 | |
| 北海道医療センター | 500 | 35 | 440 | 12 | 49 | 0 | 26 | 79 | 20 | 8 | 4 | 4 | 5 | 7 | 6 | 0 | 77 | 45 | 3 | 63 | 154 | |
| 市立稚内 | 362 | 41 | 225 | 11 | 0 | 1 | 11 | 19 | 11 | 1 | 1 | 4 | 3 | 13 | 0 | 2 | 48 | 22 | 10 | 55 | 35 | |
| 市立士別 | 150 | 30 | 147 | 1 | 91 | 0 | 16 | 18 | 4 | 0 | 1 | 0 | 3 | 5 | 0 | 0 | 25 | 18 | 18 | 22 | 109 | |
| 砂川市立 | 506 | 34 | 430 | 5 | 34 | 1 | 38 | 42 | 24 | 1 | 6 | 1 | 1 | 43 | 8 | 0 | 74 | 30 | 29 | 82 | 89 | |
| 市立小樽 | 185 | 23 | 276 | 29 | 135 | 1 | 18 | 26 | 6 | 0 | 0 | 0 | 5 | 11 | 0 | 0 | 18 | 18 | 7 | 33 | 0 | |
| 千歳市民 | 190 | 20 | 201 | 25 | 5 | 1 | 22 | 28 | 9 | 0 | 2 | 0 | 0 | 11 | 0 | 0 | 45 | 30 | 5 | 46 | 34 | |
| 網走厚生 | 366 | 34 | 316 | 6 | 22 | 0 | 23 | 38 | 12 | 2 | 0 | 0 | 5 | 32 | 2 | 0 | 53 | 33 | 6 | 61 | 84 | |
| 北海道社保 | 322 | 25 | 385 | 2 | 3 | 0 | 31 | 54 | 11 | 5 | 10 | 6 | 2 | 10 | 3 | 26 | 61 | 53 | 4 | 43 | 35 | |
| 天使 | 260 | 38 | 407 | 0 | 12 | 0 | 12 | 20 | 11 | 2 | 4 | 1 | 2 | 14 | 0 | 7 | 29 | 33 | 22 | 118 | 149 | |
| 溪和会江別 | 200 | 51 | 253 | 50 | 127 | 1 | 28 | 33 | 12 | 1 | 2 | 5 | 1 | 10 | 4 | 13 | 62 | 30 | 14 | 40 | 164 | |
| 北楡 | 231 | 60 | 479 | 20 | 720 | 0 | 36 | 31 | 17 | 4 | 5 | 5 | 4 | 0 | 2 | 0 | 96 | 31 | 23 | 31 | 827 | |
| 恵み野 | 200 | 40 | 329 | 1 | 20 | 0 | 29 | 37 | 11 | 4 | 2 | 4 | 5 | 9 | 3 | 3 | 49 | 40 | 11 | 57 | 66 | |
| 苫小牧日翔 | 168 | 40 | 213 | 4 | 102 | 0 | 8 | 25 | 9 | 1 | 0 | 1 | 0 | 4 | 0 | 0 | 26 | 25 | 6 | 36 | 178 | |
| 市立美唄 | 98 | 53 | 1 | 4 | 120 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 121 | |
| 市立三笠 | 196 | 24 | 50 | 16 | 98 | 0 | 2 | 6 | 1 | 0 | 2 | 1 | 1 | 4 | 1 | 0 | 8 | 1 | 5 | 6 | 131 | |
| 斜里町国保 | 111 | 30 | 16 | 10 | 23 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 7 | 2 | 3 | 4 | 31 | |
| 中標津町立 | 199 | | 218 | 3 | 4 | 0 | 13 | 27 | 13 | 0 | 1 | 1 | 1 | 9 | 2 | 0 | 36 | 40 | 11 | 41 | 32 | |
| 森町国保 | 60 | 30 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 200 | |
| 西さっぽろ | 56 | | 166 | 56 | 142 | 0 | 8 | 8 | 8 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 24 | 29 | 10 | 33 | 243 | |
| 静和記念 | 95 | 47 | 144 | 2 | 14 | 0 | 11 | 13 | 12 | 25 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 33 | 3 | 16 | 46 | |
| 対ガン協会 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 洞爺協会 | 280 | 50 | 69 | 9 | 100 | 0 | 1 | 6 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 6 | 4 | 1 | 5 | 12 | |
| 網走中央 | 86 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 北クリニック | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | |
| 北札幌病院 | 95 | 35 | 0 | 3 | 28 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | |
| すずかけセントラル | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | |
| 長万部町立 | 54 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| はまなす医院 | 19 | 19 | 2 | 1 | 20 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | |
| 静仁会静内病院 | 199 | 60 | 83 | 6 | 66 | 0 | 8 | 3 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 9 | 9 | 2 | 11 | 149 | |
| 合計 | | | 12060 | 496 | 2625 | 42 | 900 | 1274 | 585 | 187 | 130 | 147 | 100 | 1023 | 107 | 407 | 1620 | 995 | 386 | 1678 | 5072 | |

旭川厚生病院



後列左から稲垣光裕、正村裕紀、赤羽弘充、濱田えりか、柳田尚之、庄中達也
前列左から木村鐘康、岡田直樹、中野詩朗、豊島雄二郎

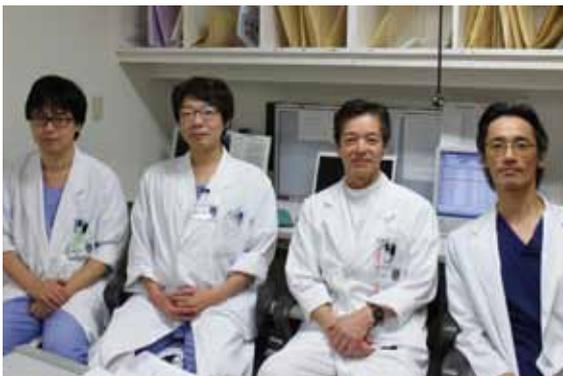
旭川厚生病院外科です。北大一外から7名、旭川医大二外から2名、他1名で構成されています。(正村先生と若手医師1名(適宜ローテーション)は呼吸器外科兼任)。外来患者は1日平均約70名を診察しています。外科病棟は59床で入院患者は1日平均51名です。当院の診療圏は道北全般に及び、旭川周辺の市町村のみならず遠くは稚内市や紋別市、遠軽町などからも患者が訪れます。

主な診療対象は消化器外科全般で、上下部消化管、肝胆膵、ヘルニア、乳腺、と多岐にわたります。食道がん、膵・胆道がん、肝がんなど高難度手術も少なくなく、特に膵・胆道がんに対する膵頭十二指腸切除術・膵体尾部切除術などは年間30例近くあります。

ここ数年の年間手術症例数は700例余りです。アッペ、ヘルニアなど以前は腰椎麻酔で行っていた手術も最近ではほぼ全例全身麻酔下で行っていますのでこれら700例余りがそのまま全麻症数と考えてよいです。当科がLACやLADGなど腹腔鏡手術に本格的に取り組んだのは平成19年頃からで現在では胃がん、大腸がん手術のそれぞれ40%が腹腔鏡手術です(あまり、ガイドラインから外れるような適応の拡大はしていませんので“中庸”でしょうか)。従来からのLCに加えてLAC、LADG、ラパアッペ、ラパヘルも手がけています。今後、食道や肝切を腹腔鏡下に行うかどうかは検討中です。

(文責：柳田尚之)

網走厚生病院



【スタッフ数】4人(西川真副院長、下國達志、葛西弘規、巖築慶一)(2013年度)

【病床数】309床(うち外科34床)

【年間手術件数】324件(全身麻酔306件、局所麻酔18件)(2013年1月～12月)

【病院の特色】当院は網走市で一番高い建造物であり、各病棟から知床連山とオホーツク海の美しい景色を望むことができます。斜網地区(網走市、美幌町、大空町、斜里町、小清水町、清里町)における拠点病院としての役割を担い、現在当科・消化器内科・循環器内科・産婦人科・小児科・整形外科・眼科・耳鼻科が外来・入院対応をとっております。地域のニーズに応えるべく、当科では消化器・呼吸器・乳腺内分泌ほぼ全領域の手術治療、化学療法、内分泌療法を行っています。

【近況】他の地域と同様、当科でも鏡視下手術に力を入れております。2011年より日本内視鏡外科学会技術認定医の先生方に定期的な手術応援をいただき、鏡視下手術の導入・定着を図ってきました。総手術件数に対する鏡視下手術の割合は2011年の22.7%から2012年40.1%、2013年42.9%と増加傾向にあり、現在は胃癌・大腸癌・胆石症・ヘルニア(鼠径・大腿・腹壁癒痕)・イレウス等を適応疾患としています。(文責：下國達志)

岩見沢市立総合病院



岩見沢市立総合病院外科は中島院長、伊藤副院長、上泉部長、横山医長、吉田医長、本間医長の6人が在籍しております。当院はベッド数484床(うち外科42+透析40)で、内科、消化器科、脳外科、整形外科、小児科、泌尿器科、産婦人科、眼科、皮膚科、麻酔科、精神科と外来のみですが耳鼻科と血液内科を有する南空知の中核病院として毎日忙しくも楽しく仕事しています。外科の特徴として透析も担当しており、のべ250人前後の患者様の透析を行っています。最近では周辺地域の事情もあり手術件数は増加傾向で、本年度は全麻327件、腰麻39件、局麻50件の症例数になる見込みです。また鏡視下手術も本格的に開始しており件数、内容とも右肩上がりの状況です。昨年度は大学医局、三笠市立、美幌市立の緒先生方の御助力を賜り、無事に業務を遂行できましたこと、この場をお借りしまして改めて深謝致します。今後とも宜しくお願い致します。(文責：横山良司)

帯広協会病院



前列左から永生、濱口先生、及能先生、阿部先生、
後列左から鈴木先生、松澤先生

帯広協会病院は1937年（昭和12年）開設以来、第一外科における帯広・十勝地区の基幹病院として現在院長の及能先生、副院長の阿部先生、外科部長の濱口先生、主任医長の永生、医員の松澤先生、鈴木先生の合計6名で外科診療を行っています。病床数は360床（うち外科40床）、平成25年の手術件数は463件とここ最近は大体年間500件前後で推移しています。当院の特色は定期手術に加えて虫垂炎、上下部消化管穿孔などの臨時手術症例数も数多いことと、近年肝胆膵の手術件数および乳癌症例に関しても増加傾向であり多彩な症例を数多く扱っているところです。若手外科医のローテーション病院としてかなり豊富な手術件数を経験することができると思いますが、大学院を卒業した直後の勤務地としても最適な病院ではないかと私自身感じています。病院は及能院長、阿部副院長がいらっしゃることから外科医としてとても働きやすく、気候は一年を通じて晴天の日が多く雪も少ないことから帯広は最高（フードバレー十勝といわれるように野菜・肉・乳製品のすべてがとてもおいしい）ですので私は手術・グルメ・温泉など思いっきり今を楽しんでいます。当院の伝統として患者を診るだけではなく学会発表に関しても地方・全国学会に必ず演題を出してアクティビティーを高く維持するよう努力しており発表した内容はできるだけ論文化するように日々頑張っています。（文責：永生高広）

北札幌病院



医療法人社団北札幌病院は1963年（昭和38年）に開業し、昨年開院50周年を迎えました。一般病床35床、療養病床60床で、外科スタッフは院長の小川秀彰（昭和63年卒）1人です。現在、医局から外来診療や当直の多大なる応援を頂いており、心より感謝申し上げます。年間手術件数は30例前後で、2008年までは医局からの応援医師とで全身麻酔の手術も年間数例施行していましたが、最近ほとんどが局所麻酔の小手術（CVポート留置、胃瘻造設など）です。当院の特色としては、JR学園都市線新琴似駅と地下鉄南北線麻生駅のいずれからも徒歩数分と公共交通アクセスが良好です。また、医局の関連病院で北大病院より北に位置する病院は少ないため、札幌市北部や石狩市の患者さんの受け入れに適しています。関連病院としての北札幌病院の役割は、北大病院での手術後の療養継続、入院や外来での癌化学療法、入院で北大病院通院放射線療法（送迎あり）、癌終末期緩和ケアなどと考えています。今後も医局との連携を維持しながら、地域医療に貢献していきたいと考えておりますので、宜しくお願い申し上げます。（文責：小川秀彰）

KKR札幌医療センター



当院は札幌市豊平区平岸にある病床数450の総合病院です。外科は赤坂嘉宣院長を筆頭に8名のスタッフで年間約700例の手術を行っています。消化器外科では胃癌が年間30～40例、大腸癌が70～80例で鏡視下手術がほぼ半分を占めています。また、最近では腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術も導入し良好な成績を収めています。乳腺外科は田村元部長を中心に年間120～130例の手術を行い、診断困難な石灰化病変にはマンモトーム生検を用いています。また本年3月より乳腺デジタルトモシンセシスを導入予定です。呼吸器外科は桑原博昭部長を中心に年間約100例の手術を主にVATSで行っています。

ほかに当科では血液浄化センターの管理も担当しています。当センターは札幌北楡病院の川村明夫会長が昭和46年に開設された40年以上の歴史を持つセンターで50～60名の維持透析患者や術後急性腎障害に対する血液透析はもちろんのこと、潰瘍性大腸に対するG-CAP（顆粒球吸着療法）など各種アフエーシスも行っています。（文責：今 裕史）

溪和会江別病院



溪和会江別病院は昨年開院25周年を迎えた。

1988年に故品田佳秀先生が中心となりスタートした急性期病院である。江別市、当別町、新篠津町、南幌町地区を主な医療圏とし、現在は外科、小児外科、乳腺外科、肛門科、脳神経外科、麻酔科、消化器内科、循環器内科、呼吸器内科、整形外科、人工透析科を標榜し、中核病院として地域医療を担っている。

外科は理事長／院長である南田猛（50期）の元、副院長である大森一吉（60）を中心に部長／野村克（69）、医長／佐々木彩実（77）、医長／佐藤正法（78）の5人体制で外来（化学療法含む）、透析、手術、病棟業務を担っている。手術は週3日が定期枠で年間総手術件数は約500件、全麻症例が約250例程度である。胃癌20例、大腸癌50例、肝／胆道系癌10例、肺癌5例、食道癌、肺癌、乳癌、甲状腺癌が各々数例程度とバラエティーに富んでいる。

外来受診者の増加、各種検査（特に内視鏡）、外来化学療法、理学療法拡充の必要性から昨年末より新棟の増築も始まり益々の医療の充実を目指している。

病床数：総数200、外科51、透析63 研修施設認定：日本外科学会専門医、消化器外科学会専門医、がん治療認定医、臨床研修医他（文責：野村 克）

独立行政法人労働者健康福祉機構釧路労災病院



阿寒ならびに釧路湿原国立公園に隣接する釧路市は道東の中核都市です。花粉がなく、雪も少ない住みやすい気候です。開設50周年を迎えた当院は、稼働450床で地域医療を支えています。

当科は、消化器・一般外科を中心として乳腺・呼吸器を含む幅広い分野を診療しています。小笠原副院長以下8名のスタッフで、定数52床の入院と1日平均80名の外来診療を行っています。2013年の手術実績は708件（全身麻酔663件）で、主な疾患は食道癌10例、胃癌48例、大腸癌123例、肝胆膵癌21例、乳癌74例、肺癌17例、虫垂炎50例、胆石症107例でした。悪性疾患の手術が299例と多く、消化器・血液・腫瘍内科を標榜する内科と連携して、道東のがんセンターを目指しています。緩和ケア病床も担当し、予防・診断・治療からEnd of Life Careまで診療できる総合的な臨床外科医の育成に努めています。

全国の労災病院とも共同研究を通じて連携を図りつつ、産業医や各学会専門医の資格取得のための環境も整っています。熱き心を持つ外科医が集うことを願っています。（文責：副院長・小笠原和宏）

札幌北クリニック



今 忠正先生（35期）は、本場クリーブランド・クリニックで人工腎臓を学ばれ帰国した昭和45年4月、この療法の黎明期に岩見沢市立総合病院に人工腎臓センターを開設されました。本格的な透析療法のわが国における先駆者のお一人であり、日本透析医会でも長年活躍された。札幌北クリニックは昭和49年11月11日の開院であり、透析で元気になった患者達の社会復帰を促進するため職場の多い札幌をクリニック開設の地に選んだと聞き及んでいます。当クリニックは本道の透析療法の中心的な存在として長年活動しており、今 忠正・京子両先生を中心に大平および増子佳弘医師（64期）が補佐して約150名の維持血液透析患者を治療してきました。透析を要する患者背景が近年大きく変貌いたしました。患者の高齢化と基礎疾患としての糖尿病性腎症の増加などが、維持血液透析に必須のバスキュラー・アクセスの作製や修復を困難にしています。また、このグループの患者は手術対象となる機会が大きく、ここでも外科系出身の透析医が関与する領域が大きく広がっています。一外教室の研修の中に血液浄化法を組み入れていただきたい所以です。

今 先生も私も後期高齢者の仲間入りをした最近では当クリニックの中心は増子先生であり、新たな体制作りが始まってきております。写真は福岡市開催の第18回日本アクセス研究会のポスター会場で撮ったもので、今 先生の左に大平、後ろに増子先生がいます。（文責：38期・大平整爾）

札幌厚生病院



2014年度は、高橋（昌）、高橋（弘）、石津、益子、田中、秦、高橋（周）、山上、田原、植木、久慈、松本、谷岡のスタッフ14名と、後期研修医の福田、北大1外から1ヶ月交代での先生の計15名で診療しています。

胃は高橋（昌）・高橋（周）、大腸は高橋（昌）・益子・山上、甲状腺は高橋（弘）、乳腺は秦・田中、呼吸器は田中、肝胆膵は石津・田原・植木と臓器別に中心となる医師を決めています。

2012年の手術症例数は992例でした。主要な疾患の手術数は胃癌114例、大腸癌178例、甲状腺疾患63例、乳癌、乳腺腫瘍56例、肺癌・肺腫瘍43例、肝腫瘍88例、膵腫瘍34例、胆道悪性腫瘍10例、胆のう良性疾患160例、炎症性腸疾患31例、虫垂炎23例、そ径ヘルニア62例でした。鏡視下手術は、肺、胆嚢、胃、大腸、鼠径ヘルニアなどで標準的に行われるようになりました。肝では鏡視下手術を部分切除、外側区切除に加え、症例によっては葉切除も鏡補助下で行うようになりました。

今後の課題としては、2013年度の手術室増室により手術件数が1067件と増えたことでマンパワー不足の問題が顕在してきたことです。

（文責：谷岡利朗）

札幌社会保険総合病院



今回の病院紹介は病院名変更を控えた時期に当たるため、当院の歴史を記します。

開院は明治時代に遡ります。創立者は関場不二彦氏で、明治26年の「開場医院」の開業後、明治31年に「北辰病院」と改称しています。昭和22年、政府に移管されて「北海道健康保険北辰病院」となり、札幌市の中心部（中央区北1条西4丁目）の基幹病院として親しまれてきました。その後、新さっぽろに1990年新築移転し、名称も「札幌社会保険総合病院」と改められました。さらに、2014年4月より「JCHO 札幌北辰病院」として新機構下で再出発することとなりました。歴代の院長は第一外科出身者が就任しており、現在は小児外科教授であった佐々木文章院長が第八代院長（新機構では初代院長）として、病院運営のかじ取りを行っています。その他、松岡副院長、外科スタッフ4人の体制です。

担当する医療圏は比較的広く、札幌厚別区はもちろんのこと、札幌東部に位置する北広島市・南幌町・長沼町・夕張市などから患者を受け入れています。外科診療は消化管、肝胆膵、乳腺・甲状腺が中心で、全身麻酔件数は年間400件前後で推移しています。最近では胃癌・大腸癌手術の半数以上は腹腔鏡下で行っています。肝胆膵領域の悪性疾患の手術も積極的に行っており、PTPE併用の肝門部胆管癌手術なども手掛けています。（文責：高橋秀徳）

士別市立総合病院



当院の外科は平成元年卒の山賀と三國の同期2名で診療しています。総病床数150床のうち外科は30床で透析センターも外科が担当しています。

2013年の手術件数は208件で、そのうち全身麻酔は106件でした。手術は主に二人で行いますが、必要な場合は当院の前副院長であさひクリニック院長の澤谷先生にお手伝いをお願いしています。

2013年の主な手術件数は、胃癌9件、結腸癌10件、直腸癌6件、肝切除3件で、全体的に昨年より減少しています。医師不足のため病棟再編を余儀なくされ、一時検査や入院を制限していた影響と考えています。

当院で外科に紹介されるのはほとんどが進行癌か遠隔転移を有する症例です。進行症例では、術前術後化学療法、切除、ラジオ波焼灼などを組み合わせて、なるべくQOLを維持しながら延命を図ることを心がけています。

また、80歳以上の高齢者の手術が多いため、感染対策（ICT）、栄養管理（NST）、循環管理（循内Dr.へのコンサルト、エコーを用いた輸液量管理、病棟でCHDFやHD）、早期からのリハビリ、認知症対策など合併症予防に力を入れてきました。

その他にMSWや訪問看護師と連携して高齢者や終末期の患者さんが安心して退院できるよう在宅医療も行っています。（文責：山賀昭二）

市立小樽病院



現在小樽市の自治体病院は「市立小樽病院」と「小樽市立脳・循環器・こころの医療センター」の2つに別れていますが、2016年12月から総病床数388、21診療科を有する画期的新病院に統合されることになりました。屋上にはヘリポートを有し、癌診療および災害時には北海道がん診療連携指定病院、災害拠点病院、初期被ばく医療機関として指定され小樽後志医療圏の拠点病院として地域を牽引する役割を担っています。ハイブリッド手術室、BCR（バームイオクリーンルーム）、さらに3テスラMRI、最新PET-CTを完備、高度医療の実践の場としての期待が高まります。

外科の年間手術件数は575件（全身麻酔は440件）、最近では腹腔鏡手術の割合が増加しています。現在外科スタッフは正職員4名（権藤寛副院長、越前谷勇人主任医療部長、渡辺義人医療部長、旭火華外科医長）、嘱託医1名（川俣孝前副院長）で手術のほか、研修医7名（前期研修1年目5名このうち大学のたすきがけが北大1名札幌医大1名、2年目2名）の教育と指導に当たっています。新病院の担い手となる若いエネルギーを期待しています。

（文責：越前谷勇人）

市立札幌病院



外科スタッフ8名と後期研修医2名で診療を行っております。病院全体の病床数810床のうち、一般消化器外科として46床・乳腺外科として6床の計52床を任されております。2013年の手術件数は、全麻609件、腰麻38件でした。主なものとして、成人の鼠径または大腿ヘルニアは成人：51例、小児鼠径ヘルニア：31例、ヘルニアを除く小児手術は27例、乳腺疾患：85例、胃癌：53例（腹腔鏡下15例を含む）、大腸癌：90例（腹腔鏡下53例を含む）、胆摘：67例、肝切除：35例（原発13、転移19、その他3）、PD：10例（膵癌8、乳頭部癌1、胆管癌1）、DP：5例（膵癌2、IPMN 2、NET 1）、食道癌：4例（亜全摘2、下部2）でした。CVポート留置は他科からの依頼も多く、2013年は年間206件でした。病院の特色としては、市内の透析病院通院中の患者さんの手術、血液疾患・膠原病治療中の患者さんの急性腹症が多い印象があります。＜近況＞急性腹症への対応は、もともと、三次救急と院内発生がメインでしたが、2013年の途中から、消化器二次救急の受け入れがはじまりました。また、2013年8月29日に地域医療支援病院に承認されたことも、少しずつ認知されるようになり、市中発生の急性腹症の患者さんが増えつつあります。＜特に力を入れている（入れたい）分野＞として、腔鏡手術を増やしたいと考えています。（文責：大島隆宏）

市立千歳市民病院



市立千歳市民病院外科は、副院長川向、診療部長福島、主任医長安念の3名による常勤医体制のもとで、消化器、呼吸器、乳腺、小児外科疾患等、外科領域全般の疾患を扱っており、腹腔鏡や胸腔鏡による身体に優しい手術も積極的に行っています。平成26年4月からは外科定数が1名増えて4名体制となり、新たに谷先生が勤務する予定です。

外科病床数は15床、年間手術数は約250件（全麻220件）で、月曜日から金曜日まで毎日手術を実施しています。

化学療法が必要な患者様に対しては、通院治療を原則に、化学療法認定看護師と共に治療ガイドラインに基づいた有効で安全な診療を行っています。あわせて、緩和ケアにも積極的に取り組んでおり、緩和ケア認定看護師と共に疼痛をはじめとする症状の緩和に努め、訪問看護ステーションと連携して日常生活の支援も行っています。

また、千歳市の外科救急体制の中心的役割を担っており、2次救急患者様に対しては24時間体制で受け入れを行っています。（文責：川向裕司）

市立函館病院



(向かって左から)

坂本 (初期研修医2年目→平成26年4月入局)、常俊、木村、倉内、砂原、柴田 (初期研修医2年目→平成26年4月入局)

市立函館病院は、27診療科、734床からなる自治体病院です。道南全域と下北半島北部を診療圏とし、診療対象人口約50万人、地域の基幹病院としての役割を担い、地域がん診療連携拠点病院、災害拠点病院、臓器提供施設等の指定を受け、平成26年度には、ドクターヘリの基地病院としての運用開始が予定されています。

医師数は113人(うち初期研修医22人)、消化器外科・乳腺外科は10名で、うち4名が教室、6名が弘前大学第2外科からの派遣です。スタッフは北大が肝胆膵、弘大が消化管・乳腺を担当し、若手はローテートします。初期研修医1年目は8週間の必修になっています。手術数年間800件前後、三次の救命救急センターを併設しているので、緊急・重症症例が多い傾向にあります。臨床研究を医療者の必須の業務と考え、全職種に対し病院として積極的に支援する環境整備に努めています。現在、消化器外科では「胃がんに対するセンチネルリンパ節生検の臨床導入」等に取り組んでいます。2013年は、論文発表(和文)5本、外科学会、JDDWなどの全国学会・研究会発表は34題、内4題が、ワークショップパネルディスカッション等の特別演題での発表でした。

「多くの症例を経験したい」、その上で「市中病院での臨床研究にも取り組みたい」と考える医師を、市立函館病院は求めています。

(文責: 病院長・木村 純(昭和55年北大卒))

市立三笠総合病院



外科精鋭スタッフ



病院外観

三笠市は、空知地方の南部に位置し石炭産業で栄えた街です。閉山後は少子高齢化が進み、現在は一万人弱の人口です。そんな中、市立三笠総合病院は基幹病院として、急性期、慢性期を問わず、総合的な医療サービスを提供し続けております。当院は、199床(一般91床、療養43床、精神科65床)で、常勤医12人、うち外科医は3人(石黒先生、羽田先生、および私)で診療を続けています。年間手術件数は、平成25年4月～平成26年3月6日現在、59例(全身麻酔46例、脊椎麻酔12例、硬膜外麻酔1例、局所麻酔除く)で、うち癌疾患26例(乳癌4例、胃癌5例、結腸癌7例、直腸癌5例、その他5例)でした。当院の患者さんは高齢者が多く、手術自体に問題がなくても、感染症(呼吸器、尿路)、せん妄、食欲不振やADLの低下、さらに、家族の援助が得られないなどの理由で入院期間は延長傾向にあります。個々の全身状態に応じた治療なり看護が必要で、そういう点では先進医療と思えます。最後に、三笠市は、どちらかと言うと田舎ですが自然には恵まれています。きつねやふくろうや鹿、時には熊が出てきたりします。また、近くにはナイター設備のあるスキー場やテニスコート、さらに温水プールや温泉もあります。住めば都と言いますが、考えようによっては健康的で良い街です。

(文責: 内藤昌明)

市立稚内病院



3月3日はれ

きょうはけいさつからでんわがありました。こわいけいじさんのくるまにのせられて、けいさつしょにつれていかれました。ねてるおじさんの、しんぞうけつと、せきずいえきと、おしっこをとられました。おじさんはうごかなかったけど、ほくこわくなかったよ。

こんなことがねんに80かいもあるんだ。

3月6日ゆき

きょうはどうせきのかんごふさんからでんわがありました。しんぞうのわるいおじさんやおばさんたちのけんさをみせられて、おくすりのちょうせいをさせられました。

おじさんやおばさんは、うでからちをぬかれていたけど、ほくこわくなかったよ。

こんなひとたちが100にんもいるんだ。

3月7日ぶき

きょうはないかのせんせいからでんわがありました。しんぞうのけっかんがつまったおじさんをなよろまでつれていくんだって。ほかのせんせいにたのんだけど、だれもいってくれなくて、ほくがきゅうきゅうしゃではこんだよ。とちゅう、きゅうきゅうしゃがすべてひっくりかえってどうろのしたにおちたよ。あたまにおおげがをしたけど、ほろのべのきゅうきゅうしゃのりかえて、ちゃんとなよろまでおくれたよ。

きょうはこわかったなあ。

それがいいにもほくたち、しゅじゅつもやってるんだ。

かんごふさんもやさしいから、たのしいところだね。

へいせい6ねんそつきょう はしもとたく

すずかけセントラル病院



すずかけセントラル病院 消化器外科 今井です。当病院は静岡県浜松市南区で2012年11月に開院した病床数309床、うち急性期病床88床、外科20床の病院です。消化器外科は2013年4月より鈴木友己先生と自分の2人で頑張っています。始め準備期間が必要だったため6月より実質稼働し2013年度の手術件数82件でした。手術内容は消化器外科、乳癌と扱っており、消化器手術に関しては積極的に腹腔鏡手術を取り入れております。浜松市は人口約80万人の政令指定都市で、年間を通して暖かく雪は全く降りません。ここには7つの大きな総合病院があり、これらの外科の派遣大学も浜松医大、名古屋、京都、慶応、長崎、神戸などいろいろな医局から派遣されており、うちの病院もついに北海道からもやってきたかと思われています。救急体制も今では当たり前の3次救急体制も昭和49年から採用しており進んでる地域です。この中で北海道大学第一外科の一つの楔を打ち込むために日夜頑張っています。鈴木先生と早く3人体制にしようを合言葉の一つでも多くの手術をこなし、浜松になくってはならない病院にするために今後も頑張っていく次第です。雪に嫌気をさした若い先生方に希望されるように頑張りたいと思います。(文責：今井 敦)

砂川市立病院



スタッフは湊 正意、田口宏一、横田良一、菊地弘展、杉山 昂の5名です。病床数は506床（外科34床）、年間手術数は427件（緊急手術150件：35%）です。当院は札幌の北東約80kmに位置する、がん診療拠点病院・地域救命救急センターで、2010年10月新病院に移転し24時間365日救急疾患にも対応しています。緊急手術の割合が多い一方、特に力を入れている分野は緩和医療・腹腔鏡手術・進行下部直腸癌に対する術前化学放射線療法です。

温熱療法機器を導入、他院や他科で治療されていた方の希望にも応じて緩和治療を行っています。腹腔鏡手術は年間150件（胃大腸70・胆摘50・虫垂20・ヘルニアなど10）、緊急手術を含めて行っており、徐々に適応を拡大・若手指導にも力を入れています。進行下部直腸癌に対する術前化学放射線治療は良好な局所制御成績ですが、さらなる予後改善は今後の課題とも考えています。

近況としては30年にわたり当院に貢献してこれ、御指導御鞭撻を頂いた湊先生が、今年3月で定年退職されます。地方病院にも関わらず当院に多くの臨床研修医が集まり、この中から第一外科にも入局するようになったのは研修管理委員長として以上に、日々親身な教育的指導をしてこられた湊先生のご尽力によるところが大きいと思います。これからも良い流れが続くよう皆で力を合わせていきたいと考えています。(文責：横田良一)

静和記念病院



常勤医師は、外科2名、内科4名、整形2名、脳神経外科1名、麻酔科1名の10名ですが、加えて、北大や市内の病院から来ていただいている非常勤の先生達等よってもかなりの部分が維持されており、特に北大第一外科の同門の先生方、研修医の先生方には、外来、手術、当直と多岐に渡って多くの助けを頂いており、この場をお借りして、日頃の多くのご援助に対し、心から感謝させていただきます。病床は90床ですが、外科は、その3-4割程度です。外科の全麻手術件数は150例/年程度で、虫垂炎、大腸癌、胆石症等の手術が多いです。超高齢者の手術が比較的多く、症例毎に根治性と治療の安全性のバランスを熟慮する必要があり、オーダーメイドの診療を大切にしているつもりであります。大学や市内の大病院からの化学療法や緩和医療目的の患者様転院の依頼も少しずつ増えてきているようです。川上雅人先生（現在は内科担当）は、法人理事長として日夜グループの病院の診療と経営の刷新に励んで、多忙な日々を送られているようです。村上泰先生は、相変わらず、お年を感じさせない程、エネルギッシュに手術に励んでおられます。私、中村は、手術症例は、ポチポチですので、一つ一つの症例と丁寧に向き合い、ベストの治療を模索していくと共に、緩和医療、血液透析、ICDとして院内感染対策の充実、褥瘡の予防策・診療の改革等、その他のエリアも手広くカバーし、この位置での自身の任務を全うしようと心がけております。(文責：中村健児)

町立中標津病院



みなさんこんにちは。こちらは道東根室管内、町立中標津病院です。この病院は全199床、12の科を擁しており地域の中核病院、災害拠点病院の役割を担っています。

外科スタッフは長洲院長を始め4人、その中で年間200件前後の手術をこなしています。周辺に外科手術に対応できる病院が他に無いため、カバーする医療圏も半径100km程度と広く、必然的に症例は集まってきます。

地域柄、交通外傷や臨時手術は多く経験できます。またここ数年は腹腔鏡手術にも力を入れており、胃癌や大腸癌に対して積極的にを行っています。とは言えやはり地域柄か、進行癌で適応から外れる例も多く、まだまだ症例は少ないのが現状です。しかしこれから少しずつ症例を重ね、また今後は単径ヘルニアや虫垂炎に対しても導入していく予定です。それ以外にも月に2回感染症の勉強会をしたり、救急医療にも力を入れたり、地域医療のために日夜研鑽に励んでいます。

この地域は日本一の医療過疎地であり日々の業務は忙しいですが、病院スタッフの対応も良く、非常に働きやすい病院です。休みの日には地元の豊富な観光資源や自然を満喫したり、車で10分の中標津空港から東京や札幌に遊びに行ったりと、皆公私共に充実した日々を送っています。(文責：寺崎康展)

社会医療法人 母恋 天使病院



当院は札幌市東区北12条東3丁目、地下鉄東豊線北13条東駅近く、北大からは創成川を渡ってまもなくに位置し、総病床数は260、外科38床で小児外科は小児科、NICUにベッドを借りています。

スタッフは常勤5名：松下（肝臓）、田口（乳腺）、山本、中山、大場と、外科志望の後期研修医1、初期研修医0-2名であります。

昨年の手術件数は502件（成人252、小児250）でした。

成人の平均年齢は63歳（15-99歳）で、主な内訳（鏡視下）は、乳癌20、肺癌（5）、血管15、肝臓癌15、胆膵癌6、胃癌13、結腸癌29、直腸癌12、胆石25（21）、虫垂炎20（4）、ヘルニア28（4）、気胸（12）例でした。

小児では出生前診断、母体搬送を含む新生児手術27、日帰り手術124、ヘルニア103（94）、虫垂炎15（1）例を数え、搬送元は全道に及びました。

新生児から高齢者まで、合併症なく安全に周術期をコントロールできるよう、日々の診療、地域連携に勤しんでおります。また学生、研修医を広く受け入れ、教育、人材育成にも力を注いでおります。

昨年末の新築、引越により、患者により快適で、病気と戦える環境が整いました。“ハコ”に負けないよう精進いたします。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。(文責：中山雅人)

洞爺協会病院



当院は、社会福祉法人北海道社会事業協会が設置する7病院（函館、小樽、余市、岩内、帯広、富良野、洞爺）の一つとして、昭和5年に創立された歴史と伝統のある病院で公的病院に指定され、地域医療に貢献しており周辺住民の方々に大変親しまれております。

当地は洞爺湖、有珠山、昭和新山等有す道内屈指の観光地であり、国内はもとより海外からの観光客も多く、救急告示病院として24時間診療している救急外来にも多数受診し、国際色豊かな病院となっています。

診療科は、内科、外科、整形外科、リハビリ科、泌尿器科、小児科、麻酔科、歯科口腔外科で、北海道大学、札幌医科大学の関連施設（北海道地域大学循環型専門研修プログラム関連教育病院）となっています。

外科スタッフは2名で、科を問わず何でも診るようにしています。外科全麻件数は年間60から70例で腸切始め鏡視下手術を積極的に取り入れています。血液透析も外科で管理しており、シャント手術、PTAとも当院で完結しております。年々患者数が増加している周辺地域の期待に答えるべく、透析ベッドを拡充し現在25床で約90人前後の透析患者さんの治療をしています。

外科に限らず幅広く知識と技術を身につけたい伸び盛りのあなたには最適な病院だと思います。(文責：院長・青木 茂)

苫小牧市立病院



当院は、平成18年に新築された清潔感あふれる白亜の建物で、札幌市の南東約65km、苫小牧中心部の東側に位置しています。病床数は382あり、18の診療科を有する胆振地方の基幹病院です。救急対応している地域は、東は日高地方 西は白老 北は千歳近郊と広範囲です。

外科のスタッフは5名(佐治、廣瀬、崎浜、花本、石黒)で日常診療にあたっています。研修医も毎月最低1名は、外科と一緒に働いています。

2013年の手術件数は401件(全麻371)あり、その内定期は323件、臨時は78件でした。当科の特色は2つあります。まず鏡視下手術を積極的に行っていることです。胃癌29(鏡視下9)、結腸癌32(同25)、直腸癌25(同15)でした。次に、肺と肝臓に対する手術も行っている点です。肺疾患に対する鏡視下手術は32例であり、内14例が原発性肺癌でした。また毎週水曜日、神山先生に手術の応援に来ていただいています。肝切除は10例(原発7 転移3)であり、鏡視下手術は4例でした。ここ2年間は麻酔科常勤医が不在でしたが、平成26年度からは、札幌医大の麻酔科医4名が常勤医となる予定です。今後更に、病院全体のアクティビティーが上がると期待しています。(文責：崎浜秀康)

苫小牧日翔病院



外科チーム(熊谷、櫛田、松久、大学派遣医)として、消化管手術と透析治療を担当しています。

消化管手術は、松久先生(H4年卒)が中心になって行っています。対象疾患として進行大腸癌が多い印象があり、腸閉塞、穿孔のため緊急手術になることがたまに有ります。もちろん胃切除、胆嚢切除、ヘルニア根治手術なども一定量の手術を行っています。鏡視下虫垂切除手術なども積極的に行っています。症例によって、大学から交代で派遣されている先生にoperatorをお願いしています。

透析治療は、熊谷先生(S53年卒)が中心になって行っています。慢性維持透析、シャント作成(人工血管吻合を含める)、PTA治療などの他、手術後の急性臓器不全に対する血液浄化治療、腹水の濃縮治療などを行っています。

私たちは、外科が苫小牧日翔病院の医療を牽引していると考えています。Operatorとして関与する手術数を確保します。私たちと共に外科チームを作りませんか。(文責：櫛田隆久)

西さっぽろ病院



当院は1982年に理事長の河西紀夫が19床の河西外科医院としてスタートしました。当初は大学からの応援を得つつ一人で始めました。1985年に増床して河西外科病院となり、外科・整形外科・消化器科の急性期病院として地域医療に貢献しております。

2012年の内科開設とともに病院名を西さっぽろ病院として今日に至っております。消化器を中心に、肛門外科や透析(入院透析のみ)などの診療を行っています。

近年の手術数は全体で350件程度、全身麻酔は160～170件です。腹腔鏡手術を積極的に取り入れ、胃癌・大腸癌をはじめ腸閉塞でも可能ならば応用しています。鼠径ヘルニア・虫垂炎はその多くを腹腔鏡で施行しております。夜中でも手術室スタッフの協力のもと腹腔鏡手術が施行でき、十二指腸潰瘍穿孔もラパロでやっています。

外科メンバーは河西理事長・山田・上井・森田の4名ですが、本年4月からは森田が恵み野病院に移り、洞爺協会病院より安原が赴任します。

他の施設と同様に外科医の高齢化が著しいですが何とか頑張って救急診療を継続しております。(文責：上井直樹)

日鋼記念病院



喜納 政哉 寺田 拓仁(2年目研修医) 高田 謙二 船越 徹 蔵谷 勇樹
副院長 浜田 弘巳 院長 柳谷 晶仁(新入局) 理事長 勝木 良雄

日鋼記念病院は1911年に日本製鋼所に付設され、西胆振地域の工業地帯において高度専門医療の提供と地域医療機関との連携を実践し、2011年には創立100周年を迎えました。2013年には急性期医療の核となる手術室、ICU、救急センターが新築され、より機能的な環境が整備されました。初期臨床研修プログラムの充実にも力を入れており、初期研修医は例年各学年ほぼ4名程度でしたが、次年度は7名の予定となっております。メディカルクラークやドクターズクラークの練度が高く医師が診療に集中できる環境です。本館からやや離れた別館に27床の緩和病棟をもち、専任者が終末期ケアをおこなっております。地域がん診療連携拠点病院・地域周産期母子医療センター・災害拠点病院としての役割を果たし、特にがん診療においては、複数科による連携は科と科の垣根が低くスムーズな集学的治療が展開されております。医師54(外科5)名、病床数479(ICU6、NICU6)、平成25年1～12月の外科手術件数は648(全麻602、局麻46)件、年間の入退院患者数は1000名強です。透析センター(23床)は外科で管理し、透析関連手術は年間100件程度あります。外科として力を入れていること、やはり腹腔鏡下手術であります。虫切・胆摘を除いた腹腔鏡下手術は昨年40件となりました。大変充実した毎日ではありますが外科一同みな息災です。

(文責：喜納政哉)

医療法人はまなす



・はまなす医院(石狩市花畔4条1丁目141-1、電話0133-64-6622、FAX64-6555)

医師2名(院長 工藤岳秋、相談役 工藤謙三)、総スタッフ数40名

・篠路はまなすクリニック(札幌市北区篠路4条9丁目12-45、電話011-776-3030、FAX776-3001)

医師2名(院長 三好茂樹、顧問 栗林弘)、総スタッフ数34名

「はまなす医院」は平成6年3月の開業以来、石狩市民のかかりつけ医であるとともに、入院19床を完備し、外科、血液透析(25床)を柱として専門性を生かした医療も提供して参りました。全身麻酔手術に対応し、消化器癌など透析以外の患者も受け入れております。「より患者様に寄り添った透析医療の実現」、「シャントトラブルの早期発見」、「消化器診療の充実」をテーマとし、法人理念「『人』は医療の根幹」を具現化できるよう努力しています。

平成26年度は、透析サテライトである「篠路はまなすクリニック」の増築工事を行います。現有の血液透析(50床)に加え、入院病床・手術室・放射線・検査部門を設置し、平成27年春から消化器外科・腎臓内科診療を開始する予定です。札幌市中心部からやや離れており他に外科の入院施設がありませんので、少しでも地域のお役に立てるよう、万全の準備をしていきたいと考えております。(文責：工藤岳秋)

北楡病院



当院は白石区の環状通に面し、南郷通と国道12号線に近く利便性の良い病院です。一般・消化器外科の推進、移植医療の展開、人工臓器開発と臨床応用、高度先進医療技術の開発と実践を旗印に急性期医療施設として昭和60年に開院されました。総病床数は231床で外科を含め14の診療科があります。外科のスタッフは川村明夫、米川元樹、目黒順一、久木田和丘、玉置透、古井秀典、小野寺一彦、堀江卓、飯田潤一、服部優宏、土橋誠一郎、後藤順一、三野和宏の13名で透析・血管外科チームと一般外科・消化器外科チームに分かれて診療に当たっています。2013年の手術件数は1191例で全身麻酔件数は533例でした。消化器外科は現在、内視鏡外科を重点的に行っており、単孔を含めたReduced Port Surgeryも積極的に行っています。更に、ダヴィンチを用いたロボット支援手術を導入し、2013年7月26日に1例目のロボット支援下高位前方切除を施行しています。また、透析関連では内シャント造設、血管グラフト留置、Blood Accessトラブルに幅広く対応し道内の多くの透析施設からの信頼を得ております。今後ともよろしく願いたします。(文責：服部優宏)

北海道医療センター



北海道医療センターは平成22年3月1日に国立西札幌病院と国立札幌南病院とが統合し誕生した新しい病院です。27診療科を標榜し、全病床数は500床で、一般410(救急30)、精神40、結核50床で構成されています。3次救急の急性期から神経難病、結核などの慢性期疾患まで幅広く対応し、さらに精神科身体合併疾患など特殊な診療も担当しています。統合の際、北大第1外科は外科(消化器外科・一般外科)、第2外科は呼吸器外科を主に担当することといたしましたが、実際には第1外科5人、第2外科3人で一緒に協力しながら診療しています。外科の病床数は35床で、3階の外科センターにあります。年間症例数は徐々に増加し、平成24年は501(全麻440)件でした。急性期疾患が多く、臨時手術も年々増え、全体の25%を超えてきています。今年度から大学の協力を得て、内視鏡下手術に力を入れており、手術数全体の中でその占める割合も増加してきております。急性虫垂炎、鼠径ヘルニア、胆石、さらに急性腹症など後期研修医が比較的担当しやすい症例が多いのも当院の特徴と思われます。(文責：植村一仁)

北海道がんセンター消化器外科



篠原敏樹



濱田朋倫



二川憲昭



前田好章



長津明久

スタッフ：濱田朋倫、篠原敏樹、二川憲昭、前田好章、長津明久

私共の施設は、2000年代初頭に国立札幌病院から北海道がんセンターへ改称し、現在へ至っています。乳腺外科と呼吸器外科が独立していますので、純粋に消化器外科の悪性腫瘍手術中心の診療を行っています。近隣施設には、急性腹症・虫垂炎・胆石、等もいつでもwelcomeですよ、と事あるごとにアピールしているのですが、内科各科が癌以外の疾患の診療に熱心でないこともあり、がん以外の疾患の割合はかなり低くなっています。本業の癌手術は年間で、胃50-70件、大腸癌70-90件、肝切除(原発+転移)20-30件、胆膵20-30件程度で横ばいから微増の状況です。当科の特徴として、他科(婦人科、泌尿器科、等)との共同拡大手術、癌性イレウス等に対する症状緩和手術がそれぞれ年間20-30件程度あるのが特徴です。近隣に大病院が多い激戦区の中だけでも少しずつ手術件数を増やしています。食道癌は近所にある某有名病院のその時の評判にかなり左右されるので、ムラがありますが、5-10件くらいの手術数です。全手術件数でみると年間300件強ですが、そのほとんどが消化器のmajor手術です。

手術は少ない出血量で、郭清のきちんとした質の高い手術を実践するよう努めています。腹腔鏡手術は結腸癌はbulkyなもの以外はほぼ全例を適応にしています。胃癌については原則早期胃癌を適応にしています。

研究テーマについては、以下のような項目については継続的に全国学会に発信しており、シンポジウム等上級演題・国際学会での発表機会も多くなっています。

- ・大腸癌集学的治療(Conversion肝転移切除、肝肺転移切除、Repeat肝転移切除、等)
- ・胃癌NAC後の外科治療
- ・3D-CT画像ナビゲーションによる腹腔鏡下大腸癌手術
- ・癌性イレウス等に対する症状緩和手術

これらの学術的活動を行うにはData baseの充実が不可欠であり、Data baseの整備に時間をかけています。国立札幌病院のころのパンチカードの時代からの受け継がれている自分達のデータで発表するというスタイルを大切にしています。この伝統を大切にしつつ今後とも、臨床・研究活動に精力的に取り組みたいと考えております。(文責：前田好章)

独立行政法人国立病院機構 北海道がんセンター乳腺外科



【スタッフ】

高橋将人（統括診療部長・平成元年卒）、渡邊健一（医長・平成元年卒）、富岡伸元（平成3年卒）、佐藤雅子（平成7年卒）、馬場基（平成15年卒）、萩尾加奈子（平成23年卒）の医師6名で、高橋、渡邊、富岡、馬場の4名が第一外科同門です。

【診療実績（2013年）】

新規乳癌手術（乳癌登録対象）307例、全手術数453例、平均入院数34.8名、平均外来数79.1名、年間の乳癌化学療法施行4000件超でした。

【病院・診療科の特色】

当院は都道府県がん診療拠点病院であり、乳腺外科は関連病院ではほぼ唯一の乳癌診療に特化した診療科です。診断、初期治療から転移再発乳癌の治療、緩和医療に至る診療にあたっています。

転移再発乳癌を含めすべての症例をお断りするなく診療する方針です。

形成外科との連携による乳房再建（同時・2期的）、内視鏡下乳腺手術、ラジオ波熱焼灼療法（臨床研究・先進医療）なども実施しています。遺伝子・先端医療外来を開設し、主に遺伝性乳がん卵巣がん症候群（HBOC）に関するカウンセリング・遺伝子検査に対応しています。

治験・臨床試験への参加を重視しており、症例登録数は全国有数です。

新規薬剤・治療の開発、エビデンスの創出に貢献したいと考えています。

（文責：渡邊健一）

北海道社会保険病院



北海道社会保険病院では外科25床で、2013年度は数井啓蔵部長のもと、中西一彰、市川伸樹、脇坂和貴の4名で約420例の全麻症例の手術を行いました。手術はヘルニア、乳腺・甲状腺などの体表外科から下部食道から直腸までの消化管、肝胆膵、肺とバリエーションに富んでいます。当科の特徴は若手にどんどん手術を執刀・経験してもらうことです。当初は皮切もぎこちなかった脇坂先生が1年で約200例の執刀を経験して、幽門側胃切除や右半結腸切除などを立派にこなすようになりました。右半結腸切除と肝外側区切除の同時手術もやってもらいました。内視鏡手術も積極的に行っております。教室から毎週本間重紀先生に応援をいただき、若手に技術認定習得を目標に指導してもらっています。市川先生は今年度の技術認定を目標に症例を積んでもらいましたが、それ以上に当科の内視鏡手術の定着、レベルアップに大変貢献してくれました。肺切除は数井先生、肝切除は中西がそれぞれ若手と一緒に手術することで技術を伝えたいと思っています。

2014年度より武富教授、教室のご厚意によりスタッフが5名に増員となります。これはもっと若手をしっかり育てるとの教室の意向だと思っています。病院も新年度から地域医療機能推進機構（JCHO）北海道病院となります。我々も心機一転、もっと研鑽を積んでより良い診療を行いたいと思っています。（文責：中西一彰）

北海道対がん協会



北海道対がん協会札幌検診センター外科（乳がん検診部門）の固定医師は1名、病床も手術もありませんので、簡単に乳がん検診の現況を報告させていただきます。

札幌検診センターでの検診数は年間約3万例、道内各地で行われるバス検診は約2万5千例です。センターは午前2診、午後1診で行っており、北大第一外科、乳腺外科、関連病院の先生方にご協力をいただいています。それに加え、バス検診においては札幌医大、旭川医大等の先生方にもお手伝いをいただいています。

多忙な外科医の現状、北海道の地理的条件、視触診の効果等を考えますと乳がん検診に外科医の労力を割くことはためられません。何とか視触診を省いた検診を普及しようと試みておりますが、当協会は市町村から検診を受託している立場で、主体的に働きかけることは難しい状況です。それでも、今年度から僅かですがマンモグラフィのみのバス検診を導入しております。

そのような状況ですが、皆様のご協力でなんとか維持できております。この場をお借りしてお礼をさせていただきます。今後ともご協力をお願い申し上げます。（文責：池田由加利）

医療法人北農会恵み野病院



当院は昭和61年5月に故近藤博先生によって恵庭市恵み野の閑静な住宅街に開設されました。周辺人口の増加とともに病院も発展し、現在病床数200の恵庭市中核病院として市民の信頼を受けています。外科スタッフは定員4名で、平成26年度から中村貴久（副院長）、津田一郎（部長）、林俊治（部長）、森田恒彦（部長）が診療にあたる予定となっています。さらに北大第一外科の先輩で老健施設長の長谷泰司先生に手術応援を仰ぐ場合もあります。年間330例程度の全麻手術を行っており、その内容は胃癌や大腸癌を中心とした消化器悪性疾患から虫垂炎、胆嚢炎など消化器炎症疾患へと広く消化器外科疾患を網羅しています。内視鏡外科の導入も行われおり胃癌、大腸癌の3-5割を鏡視下に施行しています。今後ともその適応拡大に向かい外科スタッフが研鑽に励んでおります。特に森田先生が前任の西札幌病院で修練された、腹腔鏡下単径ヘルニア修復術の技術が当院でも発展されることに期待しております。昨年は当科からJournal of Hepato-Biliary-Pancreatic Sciences（柴崎）、Journal of Gastroenterology（戸井）、日本臨床外科学会誌（津田）など学会誌への投稿をはじめ多数の学会発表が行われました。これからは札幌近郊の中規模病院ながら情報発信することも忘れずに、恵庭の外科基幹病院としての役割を担っていきます。

（文責：津田一郎）

森町国民健康保険病院



スタッフ数：2名（私と同年齢の外科医長（名古屋市立大学卒））

病床数：30床

年間手術件数：全身麻酔0、腰椎麻酔0、局所麻酔200件

病院の特色：森町は、高齢化率（65歳以上の方が全人口に占める割合）が31%を越えています。受診者も高齢の方が中心です。整形外科疾患が主体となります。頸椎症、胸椎・腰椎圧迫骨折、腰部脊柱管狭窄症、大腿骨頸部骨折、変形性膝関節症などを中心としています。

外傷は、交通事故（国道5号線、道央自動車道）、労災事故（水産加工場での事故、漁船事故、農作業事故）、一般外傷など多彩です。

特に力を入れている分野：血管疾患は、加齢に伴い増加します。MRI、CTアンギオにより、手術適応の方を函館市内の心臓血管外科（又は循環器外科）に紹介しています。術後の方のフォロー、軽症の方の治療は、ADL改善につながり、喜びの声は私を勇気づけてくれます。

また、脊柱管狭窄症の方の薬物治療にも力をいれています。MRIがアシスタントです。肉体労働に従事している方が多い町です。その結果、60代から腰痛・下肢のしびれ・脱力をきたすことが多く、受診者は毎年増加しています。

近況：学生の時、地域での医療を考えていました。38歳から新冠町国保、43歳から森町国保で一外の裾野で仕事をしていました。知力・体力に合わせて、少しずつ対象疾患が変化しています。体力・気力に合った仕事をしていただけることは喜びです。（文責：院長・川崎和雄）

編集後記

これまでの伝統ある同門会誌である楡刀会会報をベースとした新たな医局誌年報を作成することとなり、初代編集委員長という大任を仰せつかりました。最初は途方にくれておりましたが、実際には自分は原稿をただ回収するだけで、多くの先生方の暖かいご協力やご尽力により無事創刊の運びとなりまして、安堵しております。原稿の作成をして頂いた先生方、またご協力頂きましたご関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。また、今回の編集に際して多大なご尽力を頂きました秘書の川口さん、小原さんには、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。次年度以降もより内容の濃い年報となることを期待したいと思います。(S.S.)



消化器外科学分野 I 教室年報2013

平成26年7月発行

発行 北海道大学大学院医学研究科消化器外科学分野 I
TEL: 011-706-5927
FAX: 011-717-7515
ホームページ: <http://surg1-hokudai.jp/>

印刷 北大生協 印刷・情報サービス部

